

REVIEW OF ARCHITECTURAL DESIGN COURSE,
KANAGAWA UNIVERSITY

【特集】 まちのように住む
国際学生寮・栗田谷アカデミア

vol.16





目次

・特集 まちのように住む 国際学生寮・栗田谷アカデメイア	1
成り立ちと概要	2
寮内紹介／デザイン・空間・暮らし方	6
考察／つながりを生む、まちのような建築空間	18
特集班座談会／何が見えた？ 国際学生寮	22
編集後記	24
・建築探訪	25
・2019年度学生優秀作品紹介	31
修士論文	32
修士論文 全作品リスト	52
卒業設計・論文	53
卒業研究 総評	66
卒業研究 全作品リスト	69
学部設計課題 優秀作品	71
学部設計課題 総評	90
・NEWS	91
KU+LEMON HOME Design Forum VI	92
課外活動・学外受賞	94
留学生レポート	96
・研究室紹介	101
・沿革・クレジット	102



【特集】まちのように住む 国際学生寮・栗田谷アカデメイア

神奈川大学には、世界各地から学びを求めて人々がやってくる。寮は彼らを迎え入れる住まい。国際学生寮・栗田谷アカデメイアは、多様性やSDGsといった21世紀のパラダイムシフトを牽引する新たな概念に対し、その実現を標榜する集住体として2019年に完成した。

“まちのような”をコンセプトに掲げた特徴ある空間+挿入

されたソフトが示すのは、新しいコミュニティのかたちだ。これからの集住そして建築のあり方へも及ぶ提案を、神大建築学生が真正面から見つめ、考えた。本特集では、新型コロナウイルスの世界的な発生・拡大という稀有な事象の経験をも加味されたその思考をたどりつつ、まちのように人と人が出会い、つながる特異な建築空間を体験いただきたい。

国際学生寮 栗田谷アカデミアの概要



建築概要
 施設名：神奈川県 栗田谷アカデミア
 所在地：神奈川県横浜市神奈川区栗田谷 36-53
 建 物：RC+S造 地上4階

2019年7月、神奈川県横浜キャンパス近隣地区に竣工した新国際学生寮栗田谷アカデミアは「国内外から集まった学生たちが共同生活を営み、そこでの交流を通じて学生の成長を支援する」というコンセプトの下“まちのような国際学生寮”を提案した(株)オンデザインパートナーズ、本学大学院建築学専攻OG 萬玉直子氏によって設計された。

最大入居者300人を想定したこの国際寮はA・B・C棟の3つに分かれ、A・B棟が男女混住、C棟が女性専用棟となっている。各棟の1階部分はリビングストリートと呼ばれるシェアスペースが水平に連なり、それに面して4つのスタジオ

オや大キッチンが配置されている。また各棟2~4階には約7㎡の居室と中・小のキッチン、水まわりに加えて、4層吹き抜け空間に浮遊して点在する『ポット』と呼ばれる共有スペースが存在し交流の場となっている。

日常生活を支え、彩るさまざまな共用部が立体的につながり合うことで、入居者同士が自然に出会う“まちのような空間”が作り出されているのが、この建築の最大の特徴だろう。

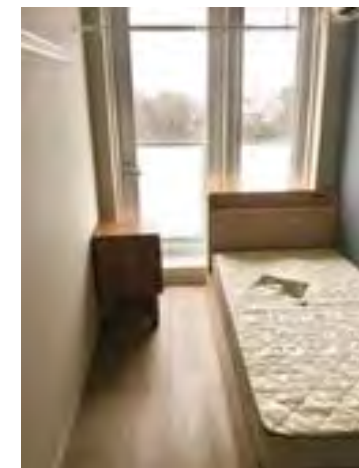


リビングストリート



各棟の1階をつなぐ共有スペース

居室



約7㎡の個人空間

キッチン



A・B棟の1階に大型、各棟の2~4階に中・小型を配置

ポット



4層の吹き抜け空間に浮遊し点在する共有スペース

スタジオ



リビングストリートに面して配置される4つの空間

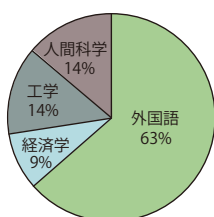
用意されたさまざまなソフト

栗田谷アカデメイアでは、多様なバックグラウンドを持つ者同士が起居を共にする。多彩な交流や体験を通して、文化的・歴史的背景に由来する価値観や個々の特性の差異を乗り越え、

多様性を尊重し、新たな価値を生み出すコミュニティを創造することがその目的だ。整備されたさまざまなソフトがそれを支援する。

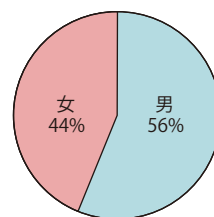
Diversity

神奈川大学では、ダイバーシティ（多様性）を推進する意義を社会に発信する宣言を行っている。それに伴い、ここでは国際交流（言語・文化・食）、男女混住、SDGsを使った教育プログラムが用意され、多様性を尊重し広い視野で考える力を培う環境が整えられている。



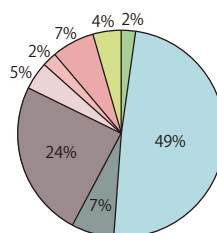
所属学部

外国語学部は留学生が多く所属するので全体に占める割合が大きいが、そのほかにも多様な学部の学生が居住している。



男女比

既存の神奈川大学の寮は男女別だが、ここは男女混住となっており、比率も偏りのないよう調整されている。



出身国

日本人学生と留学生は約1:1になるように調整されている。現在はアジアからの留学生がやや大きな割合を占める。



内訳：入居者45人（2020年6月現在）



学内で開かれた食のダイバーシティに関する講演会后、寮内ではハラール・ベジタリアンフードの試食会が行われた



異国の文化や価値観を肌で感じられる点が良い。毎日が新鮮で、過ごしていて楽しい。（日本・男性）



ヨーロッパでは男女混住の寮は一般的であり、アパートを異性とシェアすることもある。なので、この寮での暮らしも問題なく楽しく過ごせている。（フランス・女性）

SDGs PBLプログラム

SDGs PBL(Project-Based Learning : 課題解決型学習)プログラムは、SDGsを使った実践プログラムである。寮生はSDGsの17の目標の中からテーマを選び、その課題に対してグループワークを行い、各グループで課題解決のための仮説設定を行う。その後全体発表し、フィードバックを受ける。自ら調べ、考え、発信しSDGsへの理解を深めると同時に、SDGsを推進できる人材となることをめざす。



新型コロナウイルス感染拡大の状況下でソーシャルディスタンスを保つために、寮内のポット・スタジオなどをうまく使い、オンラインでプログラム参加している

RA活動

RA (Resident Assistant) とは、入居者として住みながら寮の運営を担う学生リーダーである（現在は日本人学生のみ）。寮生が安心して快適な寮生活を送れるようサポートし、寮内での活動を活性化するためにイベントも企画する。これらの経験を通じ

て、RAには国際的な視野を持った人間力の高い人材への成長が期待される。

具体的な活動として、入退寮生のサポート・生活指導・相談役・定期的なイベント企画・大学と管理会社との会議・RA間での会議などがある。



寮内でのRA会議の様子



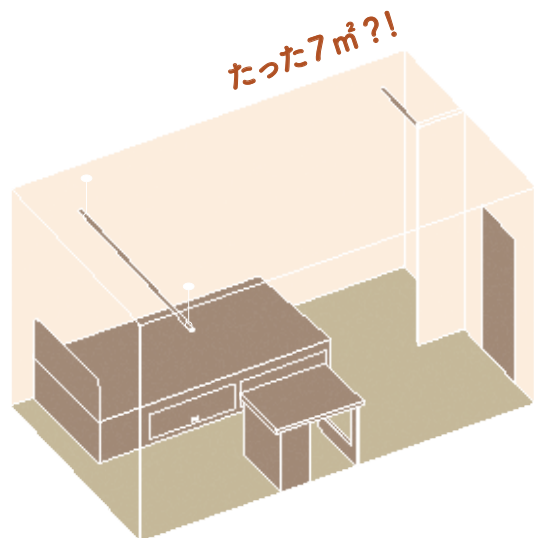
留学経験で培った語学力や多様性への理解を発揮できるいい機会だと思い、RAに応募。入寮することを決めました。



私たちの活動によって寮生が共に成長することができ、この寮に住んでよかったと思える寮にしていきたいです。

個室

人を外へ連れ出すミニマルな空間



約7m²の個室が寮生の住まう部屋である。ここには最低限の設備と最低限の居住面積しかない。“寝る”という機能のみを持つ純粋な箱である。機能のほとんどをポットに担わせることで他者との共有、つながりを引き起こす。

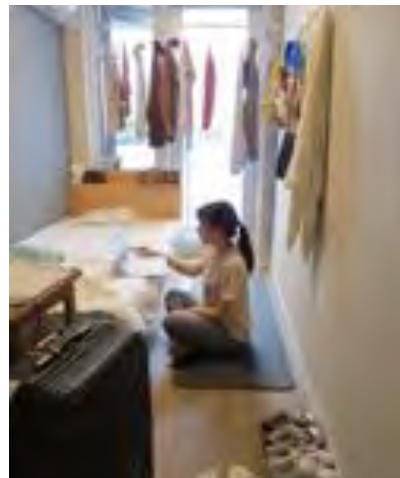
筆者(古城)は部屋を「睡眠」のみに抑えたところがかかり良いと考える。“フロ”や“トイレ”は、プライベート性が高くかつ使用頻度も高い機能である。これをひとつにまとめ自室外に存在させることで、入居者を強制的に部屋の外に出し、閉鎖空間のみに居ることを防ぐ。ある程度の他者とのつながりを作り出すことができるかもしれない、そんな個室である。

設備

机	椅子を掛けられるようになっている
椅子	極小な部屋を考慮した折り畳みタイプ
ベッド	ベッド下が引き出し収納になっている
クローゼット	中を机にすることも
有孔ボード	外部廊下に面し、ポスターを貼ったり服をかけたたりできる
物干し竿	—
エアコン	—



住まい手 Interview



黄 織亭 さん(中国出身)
外国語学部国際文化交流学科

住んでみてどう?

住む分にはいいけれど、部屋でトレーニングして体を動かしたいから少し狭いなあ〜(外でやるのは恥ずかしい…) 最近は床にトレーニングマットそのまま敷いてるよ(笑) あとベランダに出たい! 洗濯物を外に干したいから。

暮らしはどう変わった?

中国の大学にいる時は、学内寮6人部屋だったのが国際学生寮に来てから個室に! でも友人が作りやすそうなので2人部屋がよかったかも。ひとり暮らしになったことで自炊するようになったよ。



セリヤ・グレイズ さん(フランス出身)
大学院建築学専攻

住んでみてどう?

狭いけど、景色はいいね。天気がいい時は富士山も見えるすごい! でも、パソコンに出れないのは残念…。部屋中ポスターだらけだけど、外にも有孔ボードを使ってポスター貼ってるよ。折り紙の鶴を部屋に吊って、可愛くしてる!



マギ・ピエガス・エリサレ さん
(スペイン出身) 大学院建築学専攻

住んでみてどう?

狭いと思うけど、他の機能が充実しているから生活は全く問題ナシ! 外の有孔ボードは何の目的があるのかわからないなあ…。

暮らしはどう変わった?

母国では家族と過ごしていて、何もない時でも友人と過ごすことが多かったよ。寮生活になってから自炊を始めて、料理の腕が上がったかも? 留学中の今は、かなり自由時間が多いね。



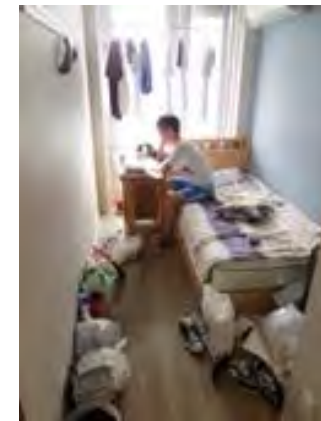
劉 鋒浩 さん(中国出身)
外国語学部国際文化交流学科

住んでみてどう?

狭い! けど、そんなに住み心地は悪くないだよな〜、むしろ良い! 部屋とか外のボードにものを置いた方がいいのかな? 今後とくに何か置こうとは思っていないんだけど。

暮らしはどう変わった?

以前は学内寮6人部屋だったので賑やかでよかった。いまはひとりだから少し寂しいかも…。だから外(ポット)に出て人と喋るようにしてるよ。



李 路捷 さん(中国出身) 外国語学部国際文化交流学科



住んでみてどう?

狭いと思うけど、ひとりにはちょうどいいと思うよ。付属品の机をクローゼット側に持ってきて、そこでゲームをします。だからwi-fi弱いのは困るけどね(笑) でも、ひとり部屋だから他の人を気にせずにできるよ。外の景色は横浜駅まで見えて、夜景もきれいでとてもよい!

暮らしはどう変わった?

中国の大学にいる時はルームメイト4人との生活だったんだけど、晴れてひとりに…ひとりが好きなので個室になってよかった、心おきなくゲームもできるし。

私物群

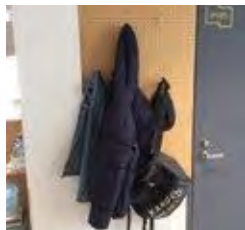
個性を語るプライベートアイテム

建物内部には個室以外の場にも入居者の私物が点在している。廊下やポット・スタジオ、キッチンにも生活感があふれ、共有し合うもの、自分の個性が伝わるように飾っているものも。ここではそんな数々のアイテムにスポットをあて、入居者の暮らしの一端を味わっていただく。

廊下



個室入口の有孔ボードにお気に入りの服をかけてみた



有孔ボードにかけておくと出かけるときに楽なの



私のことをみんなに知ってもらいたいから自己紹介カードを貼ったよ



日本に来て大好きになったアニメです！日本語が上達したきっかけだよ



雨の日は廊下の柵にバスタオルなどの洗濯物を干したりするよ



1階のテラスで観葉植物を育てています



ポット・スタジオ



読み終わった本をポットの本棚で共有しているの



私物のテレビをポットに置いて、みんなで観ているんだ



トレーニング用具は棚に戻してきれいに管理するルール



自分のグリーンを置いてリフレッシュできる空間にしたわ



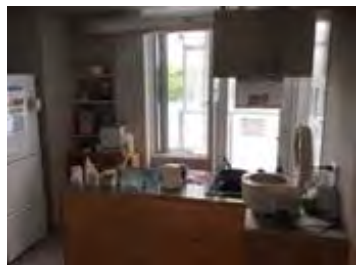
趣味を共有しようと思って、ポットの棚に飾ったよ



みんなにも読んでもらいたくて、お気に入りの雑誌を置いた



キッチン



調理器具などはキッチンの棚にきれいに保管しておかないといけないんだ



所有者ごとに調味料や食品をカゴに入れていきます



キッチン入口のホワイトボードにルールや注意喚起を書いているよ



各々食品を束にして並べていて、たまに交換したりするんだ



冷蔵庫内ものには部屋の番号を書くルールがある



料理や食事をするときに好きな音楽を流して、音の共有もするよ



共用部

機能と居場所を兼ね備える場

キッチン・スタジオ・ポットといった生活の機能が共用部として寮全体に点在することにより、入居者の生活領域は個室の外に拡張

される。大きさやしつらえの異なる共用部は数多くの多様な空間を作り出し、自室以外の居場所ともなっている。



リビングストリートに配置された大人数キッチン

キッチン

各棟の1階には、レベル差を変えながら雁行しゆるやかにつながる『リビングストリート』というシェアスペースが広がる。その中心に大きめのキッチンが2か所あり、周囲のスタジオや団らん空間、テラス空間とつながりを持ちながら、大きな交流の場として利用されている。

2～4階には小規模なカウンター型のキッチンや個室型のキッチンが4～6ヶ所あり、入居者はその日の気分で階を超えてキッチンを利用したり、料理をシェアし合う。計17か所のさまざまなキッチンが大小の交流を生み出している。



カウンターキッチン



個室型キッチン(小)



個室型キッチン(大)

1階のキッチンは常に人がいるので楽しい！
(日本・男性)

部屋に近い小さいキッチンと1階の大きいキッチンを使い分けます(日本・男性)

お酒を置いていて友達と飲むよ！(中国・男性)



授業終わりは使う人が増えるので少し狭く感じる(フランス・女性)

キッチンの掃除のルールをつくってほしい(中国・女性)

人が増えると冷蔵庫の数が足りなくなりそうです(イタリア・男性)



スタジオ1 (団らんスペース)

スタジオ

1階のリビングストリートに面して配される4つのスタジオは“運動も可能な広々とした多目的空間”“団らんの空間”“映像視聴の空間”“音楽演奏や映像鑑賞の可能な防音された空間”

とそれぞれに違う性質を持っている。

入居者は日常的に自由に利用し、イベントやプライベートな集まりの場としても活用されている。



スタジオ2 (多目的スペース)



スタジオ2 (多目的スペース)



スタジオ3 (映像・音響スペース)

語学の授業のスピーキング練習をスタジオ1でやります(日本・男性)

スタジオ2は鏡があるので、それを使ってトレーニングをします!(日本・男性)

スタジオ3はダンスで使うよ!(フランス・女性)



みんなで集まって遊んだり映画を見たりする(中国・男性)

スタジオ1のカウンターで立って勉強しています(中国・女性)

ヨガをやっている人もいますよ(中国・男性)

スタジオ3で映画鑑賞やカラオケをします(イタリア・男性)



勉強や読書に集中できるフォーカスポット

ポット

10㎡程度の階段の踊り場や吹き抜け部に面したコーナー部分には『ポット』と呼ばれるシェアスペースが点在している。

個室と大規模な共有空間の中間、さまざまな場所に配されることで、ポットは個室に収まりきれない生活のあふれ出しを吸収し、かつ個室から延長した居場所ともなる。閉じられたもの

や開かれたもの、建築と一体化したデスクやソファによる形状、そして異なる仕上げにより、19個のポットは多様な空間を生み出し、個室と共有空間をつなぐ第三の場としての機能を果たしている。



床座でくつろげる畳ポット



コーナーポットは小規模で気軽なスペース



外光が入って明るいアウトドアポット

留学生と一緒に課題をする
ときに使う(日本・男性)

自分の部屋から遠いポットを使うのは恥ずかしい(中国・女性)

ポットがあることで、そこで人と話せる。いい空間!(中国・男性)

畳とコーナーポットがお気に入りです(スペイン・女性)

もっとポットで交流できるツールが欲しい(イタリア・男性)

ポットでテーブルゲームやポーカーをしたい!(フランス・女性)

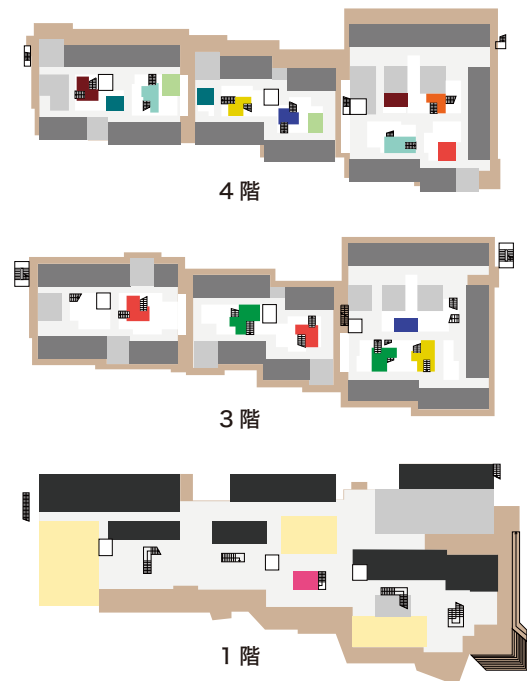
困われているポットはあまり人の目が気にならないのでお気に入り!(イタリア・男性)

使い方のわからないポットがある(スペイン・女性)

ポット

アカデミアの建築空間を特徴づけるポットでは、入居者同士が日々コミュニケーションをとったり、ひとりの時間を過ごすなど、さまざまな利用形態がうかがえる。ここではすべてのポットを紹介。魅力ある共用スペースをご観いただきたい。

- | | | |
|------------------|-----|------|
| BOOKPOT | 外部 | スタジオ |
| TALKINGPOT | 内部 | その他 |
| SMALLPOT | 共用部 | 階段 |
| PLAYPOT | 個室 | EV |
| OUTDOORPOT | | |
| DIYPOT | | |
| FORCUS(集中)POT | 休憩 | 集まる |
| TATAMIPOT | 会話 | 展示 |
| TERRACEPOT | 食事 | 運動 |
| LIVINGPOT | 創造 | 鑑賞 |
| GREEN/DISPLAYPOT | 勉強 | 娯楽 |
| CORNERPOT | | |



勉強や読書を集中して行う場



床に座り、座卓で作業を行う



RA 会議を行うなど学生同士が話し合う場



大きなソファの上でトランプを楽しんだり作業をする



大浴場に近い場所で、風呂上がり休憩したり



くつろぎながら読書や本の共有をする



昼寝やストレッチなど、リラックスする場



日々の情報発信の場。掲示板としての役割を担う



ソファに座って話したり、モバイルゲームなども



外を感じながらひとりで勉強やデスクワークする場



主にミーティングや勉強に使用される



小さな空間の中で読書したり、趣味を楽しむ



壁に囲われ、周囲を気にせず会話できるスペース



趣味を楽しみ、他の入居者と共有したりもする



自分の世界に入り込んで読書できる場



入居者同士で話したり、テレビを観たりしてくつろぐ



お茶会をしたり、畳でくつろいでゆったり過ごす



ソファでストレッチをしたり、話したり



キャレルが設けられ、ひとりで集中できる



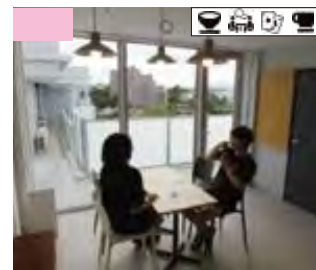
陽が差し込む場所で作業や運動をする



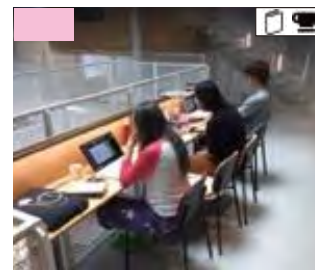
待ち合わせや小休憩できる場



電子レンジとトースターを置いて、朝は人が集まる



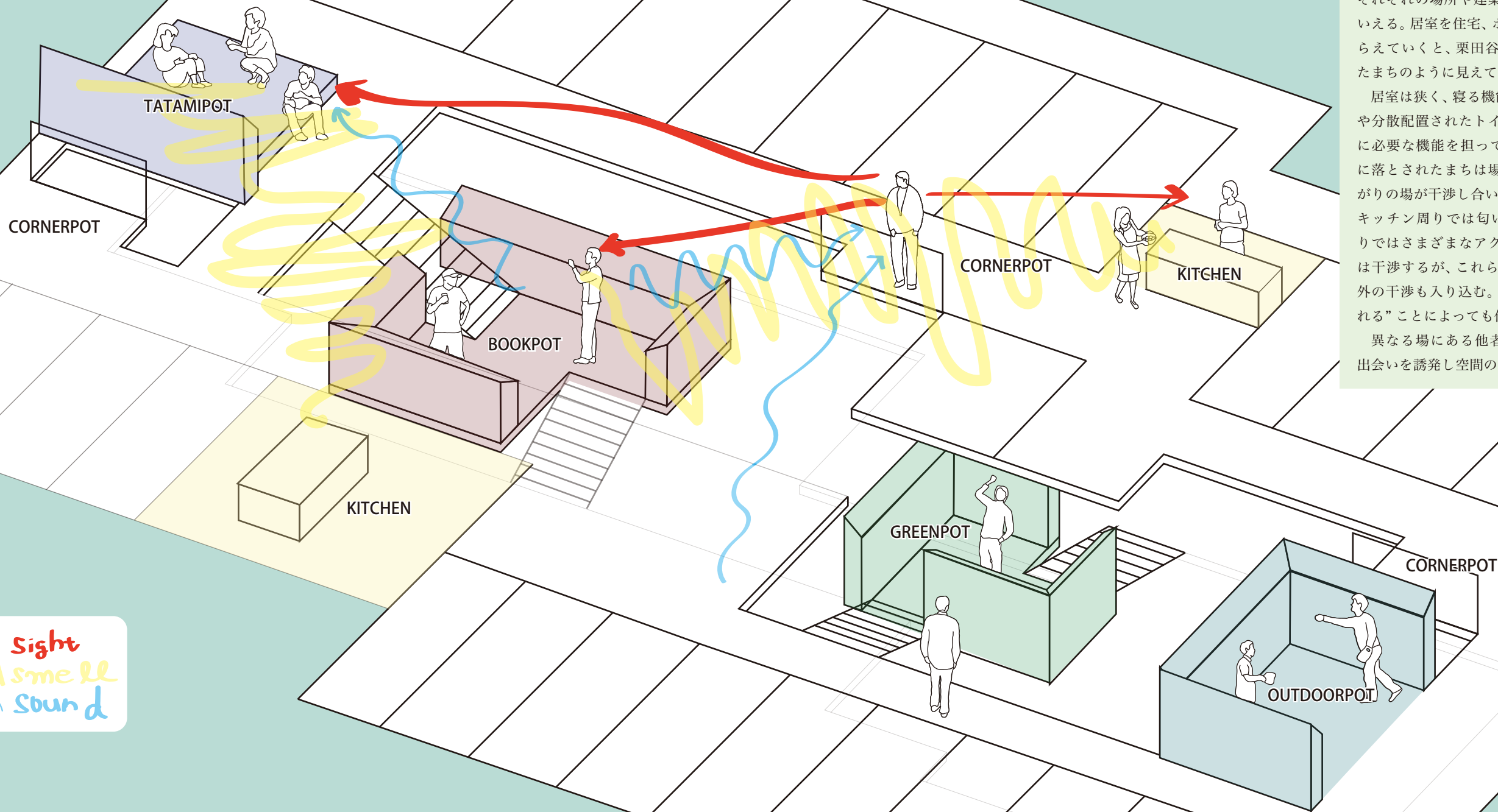
外を眺めながら、語り合ったり食事をする



カウンターで勉強や休憩など

つながる

まちのように出会い、交流する仕掛け

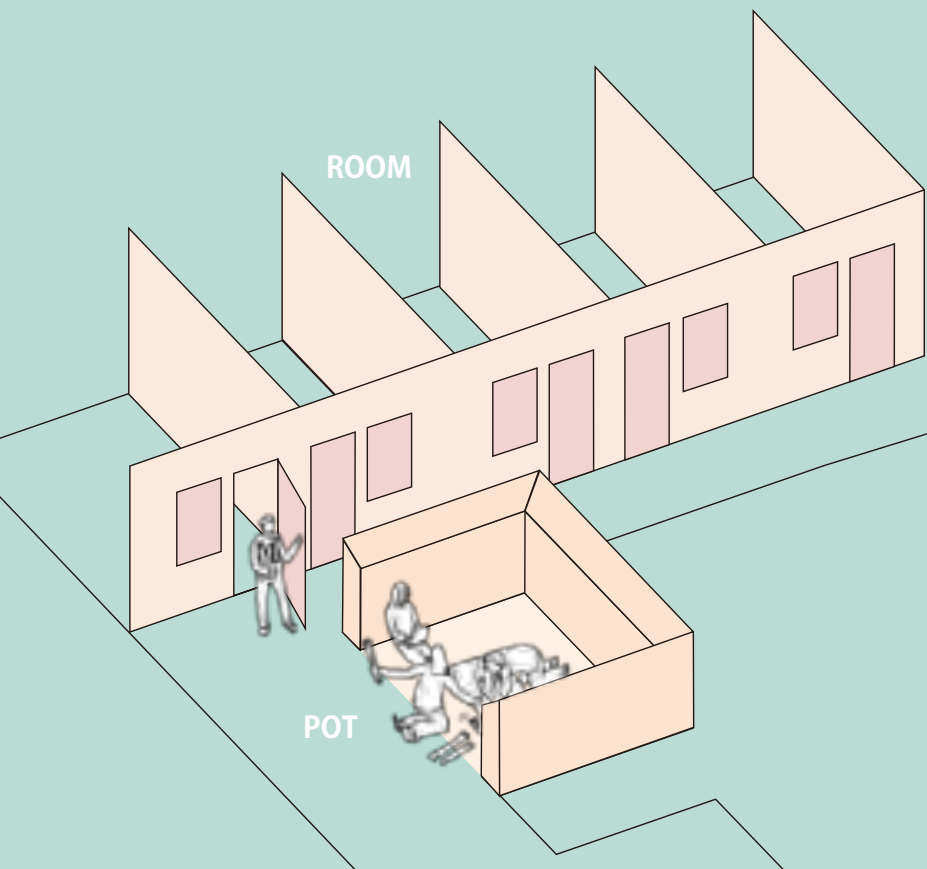


— Sight
~ Smell
~ Sound

まちにおけるつながりはある程度範囲が決められ、場所によって縛られてしまう。つながりはそれぞれの場所や建築ごとに規定されやすいといえる。居室を住宅、ポットを公園などとしてとらえていくと、栗田谷アカデミアは縮小されたまちのように見えてくる。

居室は狭く、寝る機能のみであるため、ポットや分散配置されたトイレやキッチンなどが居住に必要な機能を担っている。スモールスケールに落とされたまちは場所ごとに規定されたつながりの場が干渉し合い、空間を作り出す。例えばキッチン周りでは匂い・食を通じて、ポット周りではさまざまなアクティビティによって人々は干渉するが、これらが混ざり合うことで規定外の干渉も入り込む。さらに“相互に見る、見られる”ことによっても他者の存在が意識される。

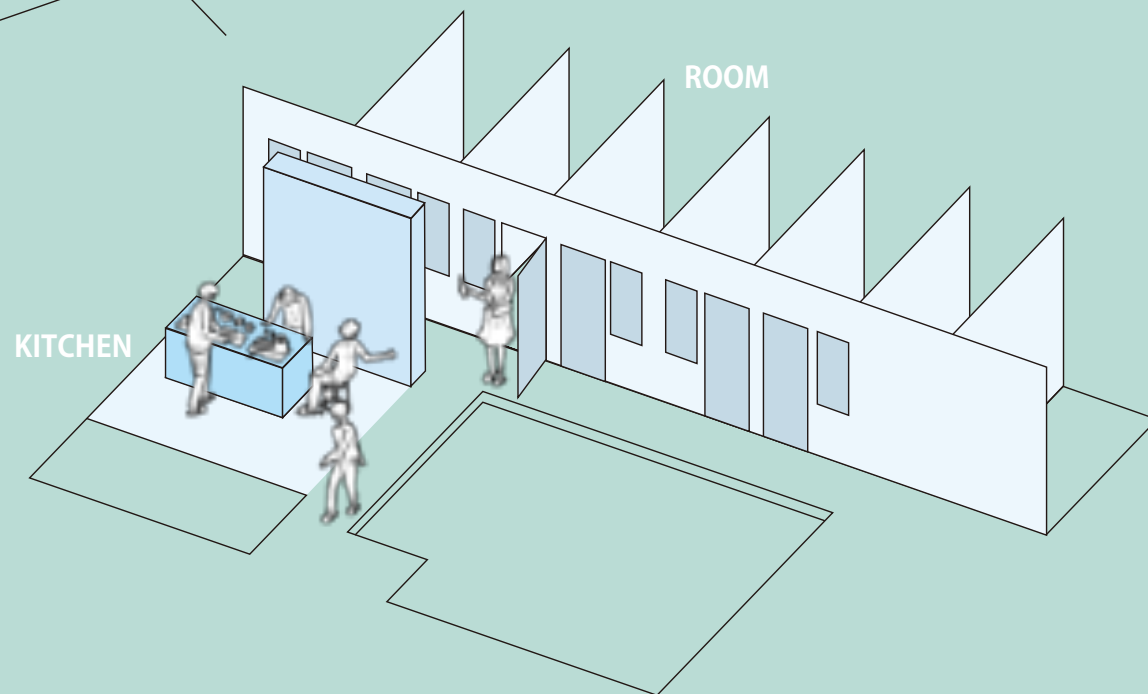
異なる場にある他者への意識が、人と人との出会いを誘発し空間のつながりを作り出す。



ROOM-POT

個室は寝る以外の活動が外にあふれ出すよう設計されており、ポットとのつながりは寮生活を豊かにするために必要不可欠となってくる。

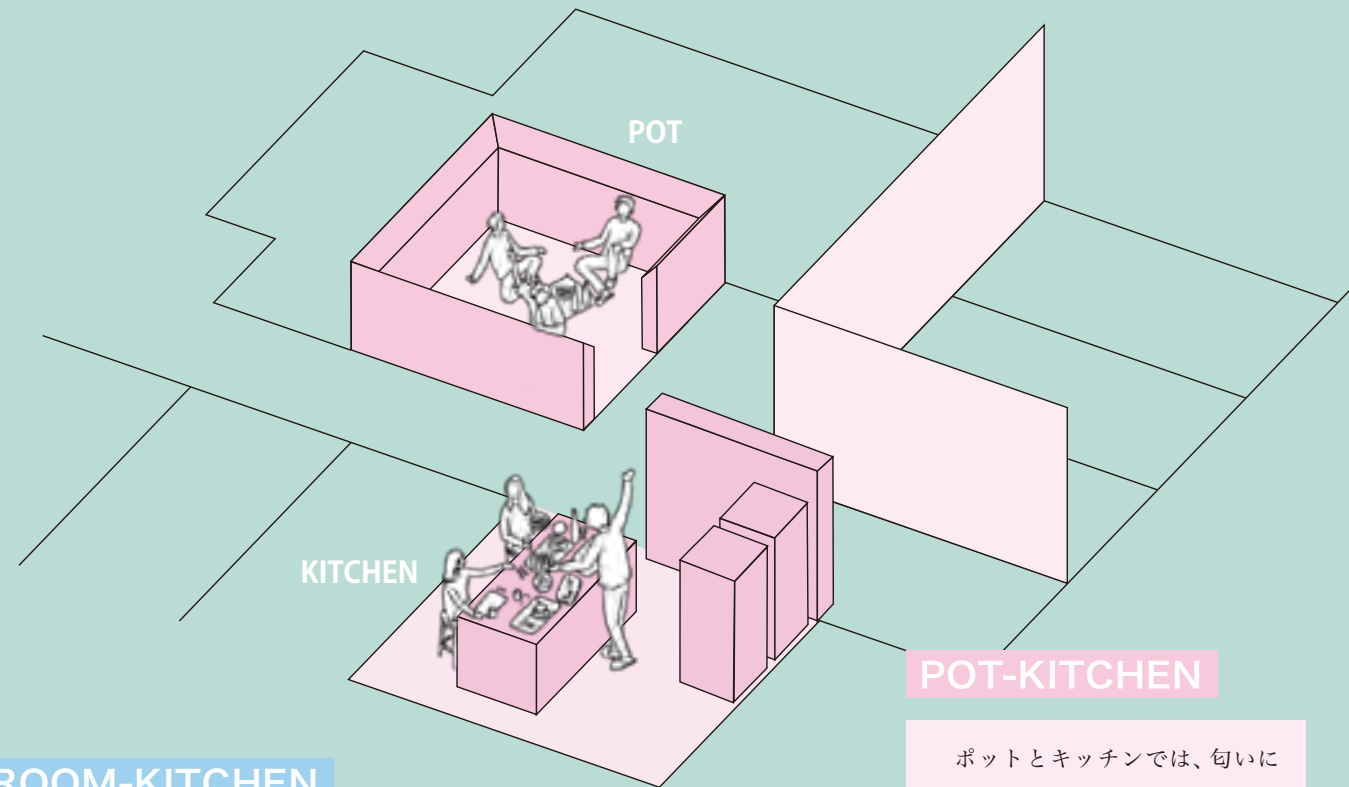
複数の個室がポットとつながることで、当初は個人の生活の延長だったものがポットで出会う人々へと拡張され、他者に対し関心を寄せ始める。



ROOM-KITCHEN

生活に必須な“食べる”という行為が個室の外に持ち出されることで、新たに人が出会うツールとなる。別フロアに食堂を設けるのではなく、個室とキッチンが近い距離に配置されることで個人の生活の一部を他者と共有できる。

通りすがりに感じる美味しそうな匂いや料理を作る音で、共に住まう人やその文化を知るきっかけとなり、より濃密な関係を築くことができる。



POT-KITCHEN

ポットとキッチンでは、匂いによる間接的なつながりが最も顕著に現れる。それぞれの活動がポットとキッチンで行われる中、キッチンから出た匂いはポットにいる人の嗅覚に作用し“食”と“料理している人”とを意識させる。

これは、視野から外れる場所にいる時でもコミュニケーションを誘発させる仕掛けとして機能する。

特集班座談会

独自の空間性と計画性を備えた国際学生寮・栗田谷アカデミア。その魅力や可能性、課題、そしてアフターコロナの時代を見据えた展望までを、特集ページ制作に取り組んだ学生メンバーが語り合った。

(文責：二階さちえ)



出席者(五十音順)：遠藤啓吾／加藤佑規／古城偉央理／坂本理久／竹本真／徳山碩峰／向 咲重／横山優莉菜／田野耕平(助教)／司会：二階さちえ

徳山 疑問としてあるのが、文化の違いによる衝突です。僕は在日韓国人で、特に食文化、行儀のよし悪しなど日本とは正反対なので食事ときは意識しています。いろんな国籍の人の生活が見えれば食い違いもあるのでは。デメリットについても考えたいです。

遠藤 多様性の推進は、運用面をちゃんとしないと期待値以上にならないと感じています。言葉が違えば仲良くなりづらく、なじみにくい。個室の配置は4階に欧米系、下階に中国系学生の部屋が多く、C棟は女子専用です。男女も国籍もバラバラにすればいいのにと感じますね。

古城 アカデミアを見ていて、日本は“他人と生きる、住む”という面でかなり遅れていると気づきました。ジェンダーフリーの欧米と比較して区別しすぎていると感じています。

横山 最近読んだ社会学の本によって“全員が仲良くなくてもいい”という考えに至っています。特に話はしなくても一緒に居やすい人、そういう人を受けとめるような関係性もあるのでは。アカデミアには“ご近所”のような感覚があります。同じ大学という属性だけではそう意識しないけれど、近くに住んでいろいろ共有することでゆるい共同体意識が生まれるのでは？ 今後の住まい方のひとつの可能性かもしれません。

遠藤 一緒に住んでみないとわからないことがあるし、いろんな国の人がいるのもいい。日本の国際学生寮が“世界中に行けるプチ留学のような場”としてスタンダードになり、日本のグローバル化・若者の多様性に繋がってほしいです。

建築的視点で解く空間・計画・領域

——独特の意匠や構造、計画で設計された魅力ある建築空間について感じたことは。

古城 個室が特徴的です。すごく狭くて寝るだけ、外に出ないと暮らせない。それを住戸にしたのが画期的で、強制的に外に出るところが計画面でいいなあと思います。部屋から出ると吹き抜けになっていて気持ちの切り替えができる空間だと思うし。

竹本 確かに自室は“家”と感じています。ドアを開けて廊下に出た瞬間「外に出た、

今日が始まった」と思う。自室のあるB棟4階からC棟、A棟、リビングストリートと空間がつながり、音や匂いで誰かの暮らしとつながっていると感じる、不思議で楽しい感覚です。

横山 大きな建物の中での吹き抜けは“あり”だと思います。単につながっているのではなく踊り場にポットがあったり、個室から出ると視線の上下にポットがあってその奥にも空間が広がるのは、なんだかいいなあ。

向 ポットの段差や素材の違い、小さなまとりとか、自分で居場所が選べますよね。ひとつの建物内でここまで明確に分けられるのはすごくいい。

加藤 僕はポットの構造が気になりました。鉄骨で床を支えて浮遊感・特別感が出ている。“まちのような”と考えれば、ポットは高層ビルの上層階やスカイツリーの展望階といった非日常の空間と解釈しています。まちの特性が詰めこまれ、さまざまな暮らし方を誘発している、そこがとても面白い。

遠藤 スタジオや大きいポットより、小規模なコーナーポットに人がいることが多いですね。寮にまだなじめず気が向かなかったり、誰かがいたらいやだなという気持ちがあるのでしょう。自室に近いエリアに“テリトリー”ができてしまっていて、他に行くルールが違う。部屋の近くはご近所さん、でもちょっと離れると隣の小学校エリアのような領域意識がある。

竹本 僕の部屋に近いキッチンにRAの女子学生が自分のフライパンを持ってきて「真さん、ここ使っていい？」と聞かれたことがあるんです。いつも使うキッチンを欧米人グループが使っていたそうですが、普段仲良くしているのにわざわざ聞かれて悲しかった。

——領域性がなく、どこでも自由に使えるのがアカデミア本来のコンセプトだからですね。

竹本 自分の道具を置く領域感が出てくるので、例えば料理道具を共有すればこんな話はなくなくなるかも。所有物のルールが変わる可能性がある。そこまで踏み込んで、RAから提案していきたいです。

アフターコロナの時代 アカデミアそして建築の可能性

——コロナ下という特殊な状況の中、アカデミアを通して何を思いますか。

向 アフターコロナで建築がどうなるか、どう住まうのかという問いに対し、アカデミアがひとつの解になるのではと思います。こもるときには有効。でも200人が一斉にこもったら、キッチンとかは絶対足りない。領域感の問題もあるし、その中でどうなっていくのか楽しみですね。

坂本 たくさんの共用部が用意されていて多くの経験ができるはずですが、使

い方が共有されなければ可能性が縮まって、建築の良さを引き出せないと思います。これからは設計者だけがプランを知っていればいいのではない。建築の伝え方についても学んでいきたいです。

徳山 アカデミアを通して他者との関わりや境界について考えました。建物内だけでなくまち全体で考えれば、地域住民との関わりも重要。建築によって起こる境界の問題は大きいので、ここを考えていくのが大事だと思います。

遠藤 外から見たアカデミアは“大きな箱”で、ひらくと言いつつ実は地域に対して閉鎖的。これを打ち破る活動をRAとして広げていけたらと思っています。“まちのように”に加えて多様なアクティビティがあればいい。

加藤 境界の話が出ましたが、今の日本の建築設計では敷地や街区の境界を超えたら何もできず、一方で境界内ならなんでもできる、つまりアイデア勝負。“まちのような”も『ポット』もアイデアだから、アカデミアの課題は参考になります。キッチンが使えづらいとは今まで想像もしなかった。それを建築でどう解決するかがアイデアだと思います。

古城 建築は社会を変え、ライフスタイルや新しい社会圏を提示できると思っています。コロナ下の状況で、今まで建築が言ってきたことが明確化して一般の人に見え、社会の要請も出てきました。アカデミアも社会を変えていく建築群のひとつだと思います。

田野 意外にみんな、この建築に可能性を感じていますね。今はひきこもっている状況だから、アカデミアでは気持ちよく暮らせるかも、と考えるのはわかる。しかしアフターコロナの視点から見ると、集まって住むこと自体がリスクであり、かつ自室で生活が完結できないこともリスクが多いはず。それがダメなのではなく、どうバランスを見出し、共有できる人たちが選択可能な場がどれだけあるか、その存在を互いに認めていけるか…自分の体験+アカデミアを通した建築空間のあり方、生活の仕方や広がりについて、考えていかなければならないと思います。

こういうライフスタイルが定着するかどうか、です。顔も知らない人と何かを共有できるか、そこに人はたまってくれるのか。管理が明快でない共用物に対してどうするか。本来新しい動きになるはずだったことに対して、コロナ後にみんながどう反応をしていくのか気になります。

ただ、特集ページやこの座談会での発言などを見ると、柔軟に場を受け入れ使っていくたくましさもある。今後ポジティブに状況を考えていけるかもしれないと感じました。

2020年6月26日

新型コロナウイルス発生拡大に伴う外出自粛により、ビデオ会議アプリ『ZOOM』によるリモート会議形式にて開催

編集後記



編集者と居住者 (RA) という異なる立場から、特集ページを担当した。居住者であるからこそわかることや、他の寮生からのリアルな声をインタビューを通して共同編集者に共有できたと同時に、客観的視点からの意見も伺えた。今後の国際寮運営に携わるものとしていい経験ができた。(遠藤啓吾/P4-P5 担当/山家・上野研究室)



今回コロナの影響で製作が難しい中、RAの二人を筆頭に制作をした。居住者のリアルな声と自分の思っていたこととは異なる情報が多かったと感じる。リアルな国際寮の記事ができたとともに自分も国籍が韓国なため個人的にも住みながら国際交流ができることに興味があった。(徳山碩峰/RAKU制作副リーダー/山家・上野研究室)



今作は制約がある中での編集作業となった。しかしRAの竹本さん、遠藤さんをはじめ、編集メンバー、協力メンバーの熱意と国際寮への興味・関心が功を奏し、特集記事24ページが完成した。短い期間ではあったが、ひとつの建築に対して深掘りできたことは、良い経験となった。(加藤佑規/RAKU制作リーダー/曾我部・吉岡研究室)



コロナの影響により、この寮に一度も入ることが出来なかった。それが原因なのか、実際に住んでいる学生からの声と、それ以外の学生が描くこの寮へのイメージには大きなギャップがあったが、互いにイメージをすり合わせながらリアルな建築の使われ方を知ることが出来たと思う。(向咲重/P10-P15 担当/中井研究室)



私は他者とのつながりについてのページを担当しました。このページは難航し、結局は大勢の方々の手を借りました。難航しつつも作成に関してはそこまで苦労する事はなく、つながりを考えるなかで濃密な議論をできたことがとても良かったと思います。(古城偉央理/P6-P7、P18-P21 担当/石田・田野研究室)



今回作業を進めていく中で最も感じたのはソフトとハードの関係性であった。建築に携わっていると建築的なハードな面に視点が偏りがちになるが、国際学生寮では住まい方をソフト面からも模索する様子が伺えたことは、「建築のその後」を知る良い機会であった。(横山優莉菜/P10-P15 担当/石田・田野研究室)



空間の使われ方について、建築家の思惑とは違う形で活用されているところを今回、感じる事ができた。いま現在では建築の魅力を100%引き出せるような活用はできていないと感じたので、今後RAの方はじめ、もっと生活感が外部にまで現れてくるようなソフト面を考えてほしいと思う。(坂本理久/P8-P9、P16-P17 担当/曾我部・吉岡研究室)



covid-19により大学キャンパスも入構禁止になるなど特殊な状況の中、国際寮に入居している学生がメンバーにいて内部の取材が出来たことは幸いであった。特集の中では「まちのような」という言葉が示す通り、多様なコミュニケーションのレイヤーが重層している様を見ることができる。集まることの脆弱性が露呈していく中で、それでもまだ集まる空間の可能性を見出す一助となれば幸いである。(田野耕平/助教)



編集メンバーとしてだけでなく居住者としても携われたことで、他の雑誌等で扱っているものとは全く異なった、リアルな声が多く反映された雑誌を作成できたと感じている。多くのご協力を頂いた寮生の皆様・本学国際センター様・(株)学生情報センター nasic 様に感謝申し上げます。(竹本真/特集ページとりまとめ・P2-P3 担当/内田・須崎研究室)

建築探訪

神奈川県にゆかりのある建築に学生が訪問し
学生独自の目線で紹介する
今回は神奈川県名誉教授である高橋志保彦先生の作品
開港広場と馬車道ガーデンストリートを取り上げる



開港広場・馬車道ガーデンストリート
設計：高橋志保彦建築都市デザイン事務所

開港広場



水に触って遊ぶ子どもたちの様子 | 海辺に位置する横浜には直接水に触れることができるオープンスペースが少ない。水と直接触れ合う体験ができる広場は、海に近い都市の中でも特別な空間となっている。



木陰で静かに読書を楽しむ人

道路を挟んで海側にあり人々で賑わう山下公園とは対照的に、開港広場は静かな佇まいを形成している。広場の緑には樹木が整備されていて、木陰で寛ぐ人が見受けられる。



改修された噴水

改修前はわざと縁をつくらず、子供たちが「じゃぶじゃぶ池」に入っていけるようになっていた。今は縁で囲まれ水に触れることはできるが、入ることができない。当初意図していた「潤いのある空間」が弱まっていると感じた。

開港広場

竣工年：1982年
敷地面積：基本設計部分約 8100㎡
企 画：横浜市都市計画局都市デザイン室
実施設計部分約 1600㎡
設 計：高橋建築都市デザイン事務所
(新建築 1983年9月号より)

① 計画された経緯

横浜市の人間的な都市空間づくりの一環として、開港広場整備、開港広場前交差点改修、大棧橋入口道路改良という内容で企画され、高橋志保彦建築設計事務所は3つの基本設計と、開港広場の実施設計を行った。

② 計画条件

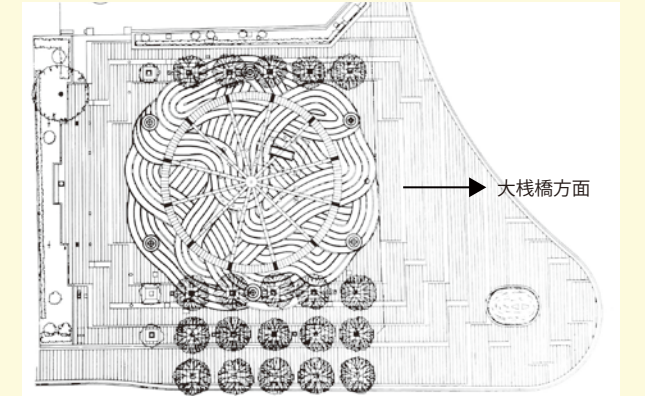
- ・開港を記念するにふさわしい広場をつくる事
- ・大棧橋から海岸教会への軸線を主軸線として空間構成を図る事
- ・人間的スケールで快適なオープンスペースの確保、水と緑による潤いの空間、プラザとして誰でも親しめる広場をつくる事

③ 計画

- ・近代文明の発祥を象徴するモニュメントとして、「開港の泉」と呼ばれる噴水を広場の中心に設け、「ほとぼる文明」を表現する。また、足元部分に子供が水と戯れる事を想定した「じゃぶじゃぶ池」を設置した。じゃぶじゃぶ池の水深を深いところで15cmとし、安全に十分注意した。
- ・ステンレス鏡面のモニュメントは現代文明、横浜市民を映し出す鏡として配置し、12本設置する事で時の流れを表現した。また、ドライバーが反射による幻惑で不慮の事故を起こさないよう、原寸大の模型を使いながら計画を行った。
- ・舗装の波の模様は、海を渡って押し寄せた西洋文明の波を象徴している。噴水の中心を横浜として、横浜の国際親善都市や提携している港の市章、紋章を描いたプレートを方向と距離を測りながら噴水周辺に埋めている。(新建築 1983年9月号より)



配置図 1/4000



平面図 1/800 (新建築 1983年9月号より)

学生対談：開港広場について

広場を構成する要素(ステンレス鏡面のモニュメント、噴水、波模様の舗装、石のツール)

山本：ステンレス鏡面のモニュメントは、現代文明を映し出す鏡として配置されたいけれど、実際に見たときにそのような意図を汲み取るのは難しかった。

鈴木：まちかどの広いオープンスペースだけでなく、波模様の舗装やミラーのオブジェクトの影響なのか、ヒューマンスケールの居場所が多く感じられた。

池原：そうだね。周辺の木がつくる木陰や石のツールも、一人でもいられるような広場をつくる要因になっていたと思う。

三浦：設計当時は、噴水が広場の中心としてパブリックスペースが成り立っていたけど、教会前につくられた大きな滝によって、居場所の重心が変化しているように感じられた。

山本：たしかに、資料や図面から得たイメージに比べてあまり場が拡散しているようだった。

横浜の玄関口から都市のポケットパークへ

鈴木：開港広場から道路を挟んで海側に位置する山下公園は常に人々で賑わい、観光地化されているイメージがある。対して、開港広場は山下公園とは違って、目的地にはならないけれど、歩いていたらふと見つけた場所になっているよね。

三浦：確かに。竣工当時、開港広場は横浜の玄関口のような位置付けだったけれど、今は都市のポケットパークのようになっていて、時代によって意味合いが変化しながら残っているように見える。

池原：後世に残る場をつくる時に、目的地になるような場所ではなく、道や広場のような目的地をつなげる空間がまち全体のまとまりを形成するため、まちにとって一番大事であるということ、高橋さんは考えていたんじゃないかな。



大棧橋方面から開港広場をみたとき(「地球の歩き方」より)



噴水奥の滝と教会

馬車道ガーデンストリート



様々なアクティビティが混在する道 | 歩行者空間の幅を拡張し、ベンチを直角に配置することで、人々が憩える新しい空間が生まれていた。その結果、コーヒーを飲みながら本を読む、歩く、休むなど多様なアクティビティが混在している道になっている。



整備前の馬車道
(早稲田建築アーカイブスより)

壁面後退で広がった歩道



車道と同じ幅の歩道

歩行者優先のまちづくり | 壁面後退や車道の幅を2m狭めたことで、ほぼ同じ幅を持つ車道と歩道。人と車が同等の存在感を持つまちの人はどこかのびのびとして見えるように見えた。元々歩道側にあったアーケードは、歩道が暗くならないように撤去され、車道上部にゲートが設置されている。

馬車道計画 (第1期)

竣工年：1976年 設計監理：高橋建築都市デザイン事務所
企 画：馬車道商店街協同組合 敷地面積：歩道整備区間総延長 530m
(DAAS サイトより)

馬車道まちづくりの方針

- ① 歩道幅員を3.5m-4.5mに拡張して歩行者空間を拡大し、車道幅員を9mから7mに狭める。(1997年、第2期整備において、さらに歩道を5.25m、車道を5.5mとした)
- ② 商店街などのビルを建設する際は、ビルの1、2階の壁面を2-3m程度後退し、後退した部分にも敷地内の歩行者空間を設ける。
- ③ ①②の工夫により、歩行者空間を現在の3.5mから約2倍に拡大する。
- ④ 歩道上の一部に設置されていたアーケードは撤去し、太陽光の下の明るい歩行者空間を誕生させる。(馬車道まちづくり協定より)



馬車道モール計画案のパス (早稲田建築アーカイブスより)



馬車道駅
平面図1/4000

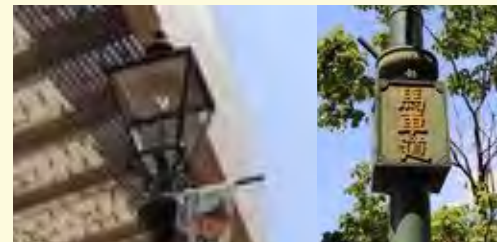
学生対談：馬車道ガーデンストリートについて

池原：様々な形状のストリートファニチャー（ガス灯、馬頭の車止めなど）が多く見られ、歩行者空間を単に歩くだけの道にならないようにする工夫が窺える。
山本：ガス灯は、もともと有名で知っていたけど、街灯をガス灯のみにしているのは高橋先生の計画の1つだったんだね。
三浦：明治時代に日本最初のガス灯が馬車道に設置されてから（戦後は水銀灯ランプを使用していたが、改修のとき復活させた。）、ガス灯はまちの特徴となり、現在もガス灯のある通りの風景が保存されていると感じる。また第2期の改修で電柱を地中に埋めたことでガス灯の存在と矛盾しない工夫がされているね。

車道空間と歩行者空間の関係性

三浦：歩道の幅が車道幅とほぼ同じ事って、東京ではあまりみられないね。
山本：ヨーロッパでは、大通りが完全に歩行者優先の都市も多い。それに比べて日本の歩行者空間は狭いと感じる。当時、高橋先生がやりたかったのは、ヨーロッパ的な歩行者のための都市空間だったんじゃないかな。その点で高橋先生が当時行った、歩道の拡張や車道・歩道間の段差をなくすことは先進的な都市のデザインを目指した横浜にとって重要な課題だったのだと思う。

対談参加学生：池原、鈴木、三浦、山本



ガス灯と馬車道のロゴ



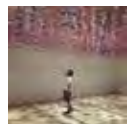
コペンハーゲン（デンマーク）のストロイエ通り
【設計：ヤン・ゲール】
(<http://wadaphoto.jp/kikou/hokou03.htm> より)



設計者 profile
高橋 志保彦
Shiohiko TAKAHASHI
神奈川大学名誉教授

1936年生まれ、早稲田大学第一理工学部建築学科卒業、1959年～1968年（株）竹中工務店設計部、1965年ハーバード大学大学院建築学専攻修了、1975年高橋建築都市デザイン事務所設立、1988年～2006年神奈川大学工学部教授（2006年～同大学名誉教授）、2020年～日本トイレ協会名誉会長・顧問就任

●ディプロマ賞



竹島 大地

Daichi TAKESHIMA

山家・上野研究室
YAMAGA・UENO lab.

認知症の患者の行動分析に基づいた建築の提案

Proposal of based on behavioral analysis of patient with dementia

中井 認知症の方の行動やふるまいを観察して一般の方に理解を促す建築を設計したように思えるが、実際に認知症の方が利用する上で、この提案は有効なのでしょうか。

竹島 認知症の方の行為を通じて、一般の人が普段気にかけることのない些細な日常に気づくことができる提案となることに重きを置きました。そのため認知症の方の利用まで考慮仕切れない部分があるように思います。

内田 1人の認知症の方の行動や振る舞いを観察していますが、認知症の方の空間認識は共通してるのでしょうか。

竹島 認知症の症状は様々です。提案では一個人の行動に着目したため認知症の方を扱う建築の一般解ではなくて個別解です。

認知症患者の行動調査から得られた指標と読み解いた地域性、症状を緩和する操作をもとに形態を導いていく。ふるまいを導くための操作が集積し、それぞれが独立した空間でありながら、敷地を覆う2枚の屋根の下に連続する。

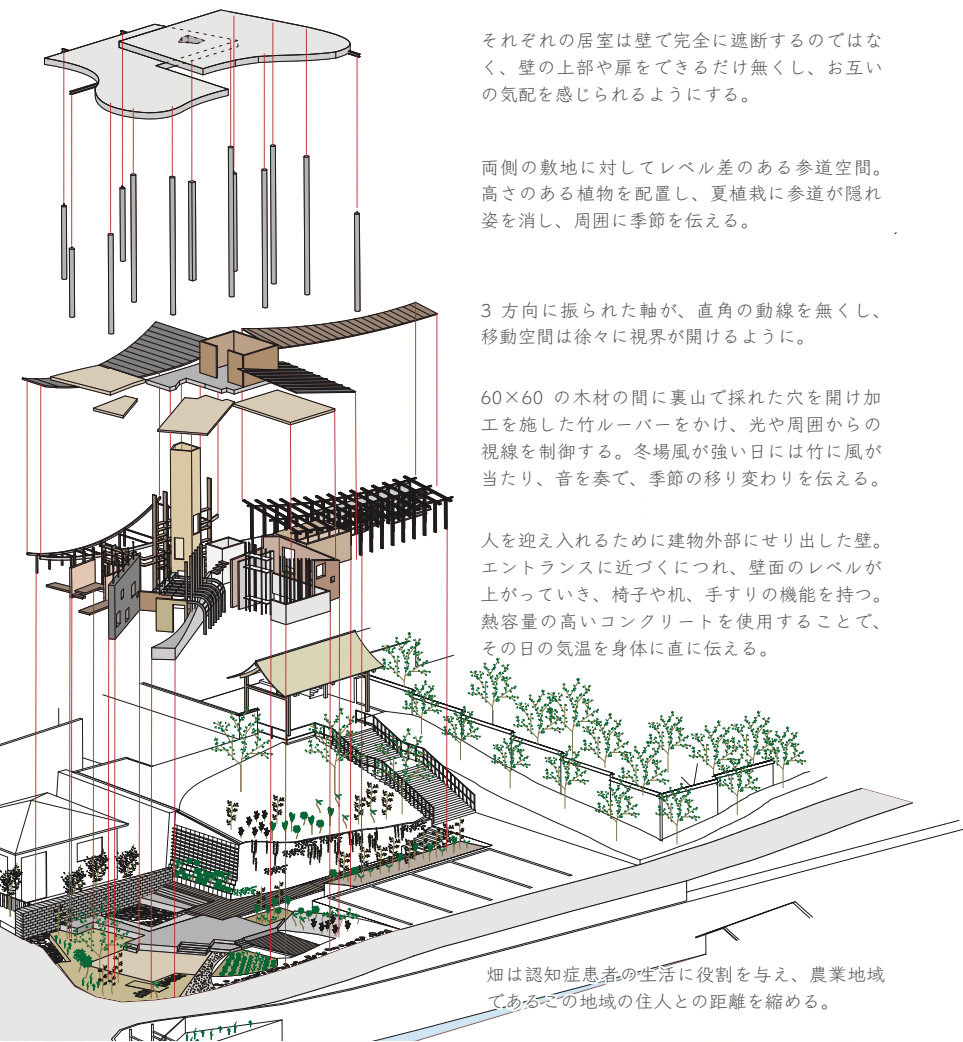
大屋根を支えるための柱。方向性を与えないように、角のない丸柱にし、居室やアプローチ部分に落とすことで、人のいる場所にたどり着くためのインジケーターになる。屋根からつきだした柱は周囲に影を落とし、時間の経過を伝える。

屋根をバラバラ上に設えた参道への抜け道。海と山の軸に対して直行しており、暗がりの空間でも風に押し出され歩くことで、風が方角を示す。

publicな参道空間と室内との境界は、視線を遮り、光を取り入れるポリカーボネートで設え、内部に人の気配を伝える。

参道の抜け道を歩いた先には、既存擁壁を改修し設えられた地域住人と共用の花壇。風が擁壁上部に抜け、植栽が揺れることで音を奏でる。また擁壁についた花はこのまちの特徴的な農業形態の風景を思い出させ、記憶を連想するための手がかりに。

躯体を取り囲む敷地と建築の間のそれぞれの中間領域が、認知症高齢者を囲うためのバッファゾーンに。



それぞれの居室は壁で完全に遮断するのではなく、壁の上部や扉をできるだけ無くし、お互いの気配を感じられるようにする。

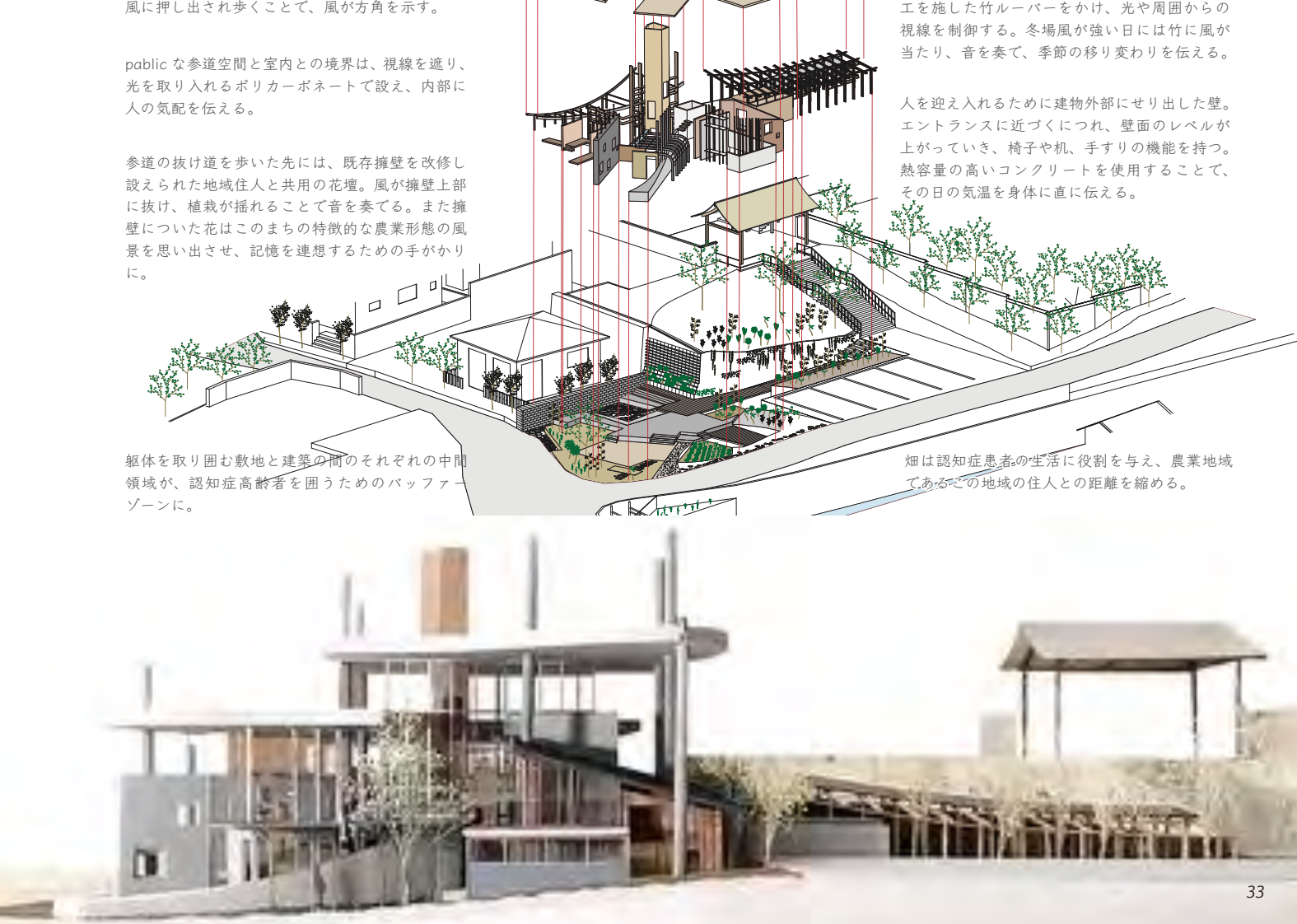
両側の敷地に対してレベル差のある参道空間。高さのある植物を配置し、夏植栽に参道が隠れ姿を消し、周囲に季節を伝える。

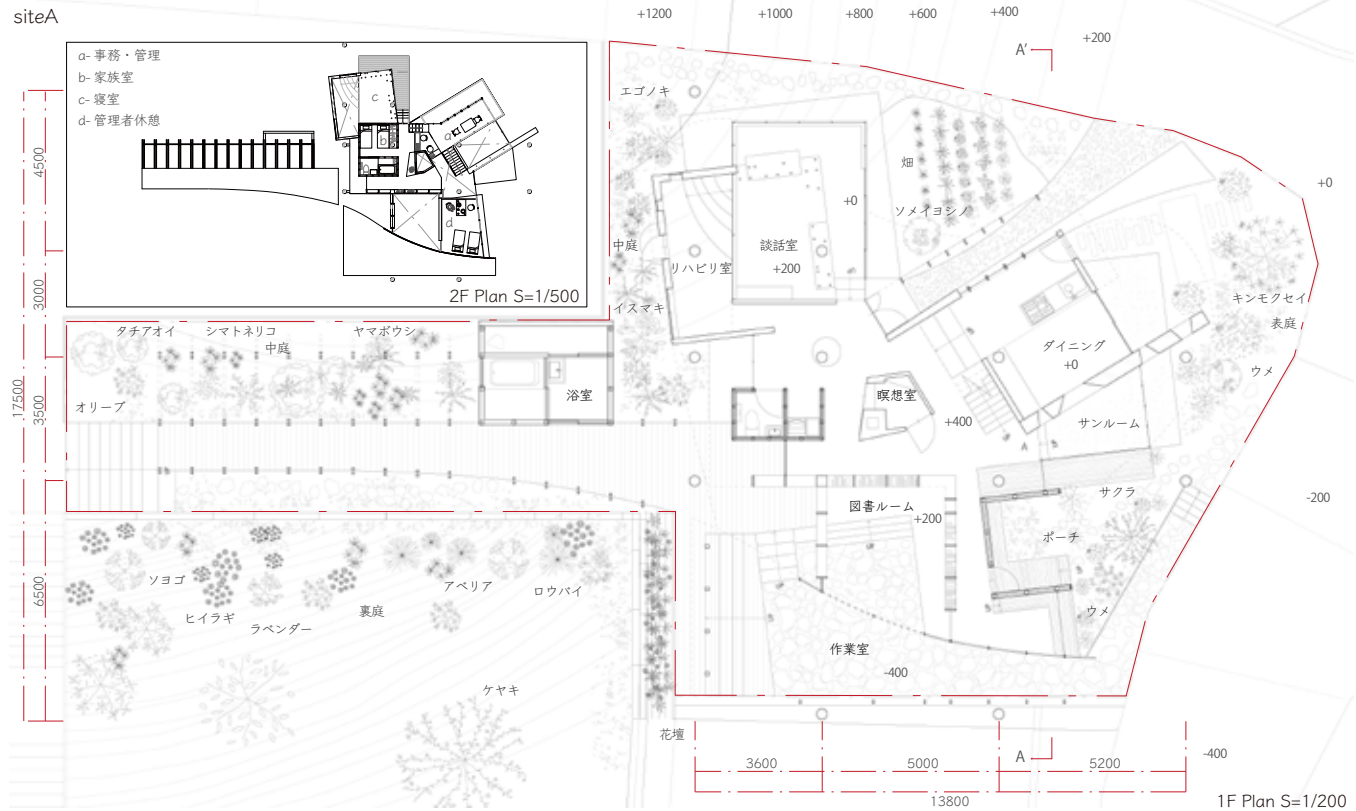
3方向に振られた軸が、直角の動線を無くし、移動空間は徐々に視界が開けるように。

60×60の木材の間に裏山で採れた穴を開け加工を施した竹ルーバーをかけ、光や周囲からの視線を制御する。冬場風が強い日には竹に風が当たり、音を奏で、季節の移り変わりを伝える。

人を迎え入れるために建物外部にせり出した壁。エントランスに近づくにつれ、壁面のレベルが上がっていき、椅子や机、手すりの機能を持つ。熱容量の高いコンクリートを使用することで、その日の気温を身体に直に伝える。

畑は認知症患者の生活に役割を与え、農業地域であるこの地域の住人との距離を縮める。





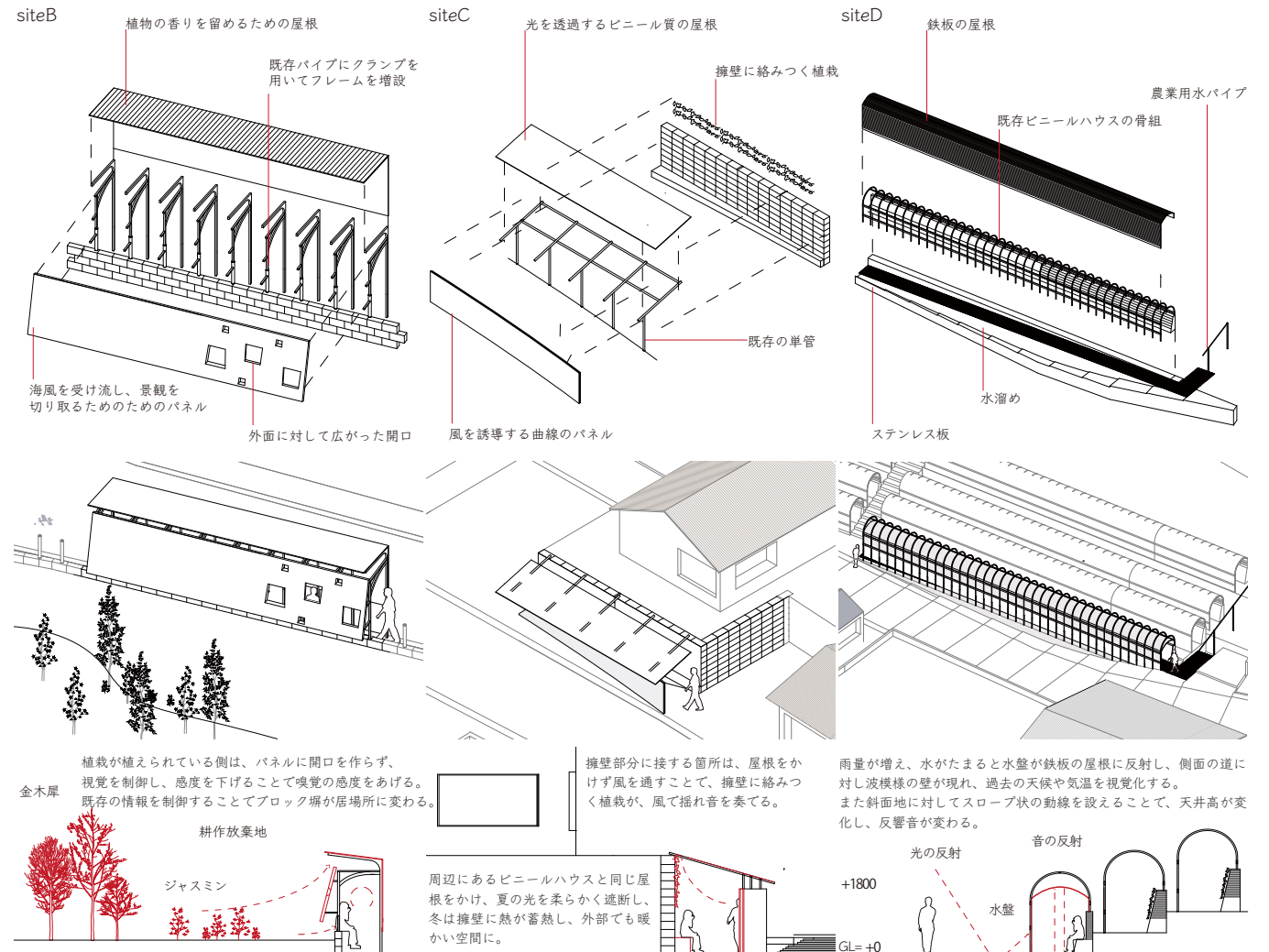
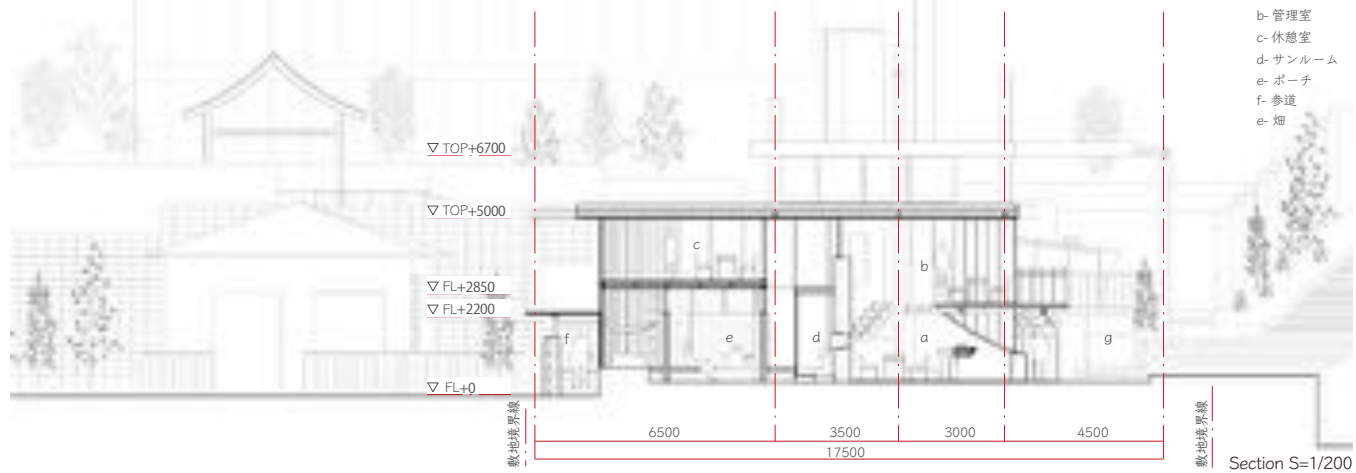
siteA 施設生活者と地域高齢者のサードプレイス

施設で生活する患者、地域高齢者のためのサードプレイスとなる居場所を計画する。高齢化率の高い地域のため、地域住民が気軽に介護に関われる環境を整えることで、介護への抵抗を緩和し介護支援者を増やしていき、地域高齢者や介護施設の入居者にとっては、外出し、他の人と交流しながら過ごすことで、社会的な孤立を解消することを目的とする。

敷地内に植えてある植栽

表庭	四季で変化する植栽	ウメ、サクラ、キンモクセイ
畑	鳥を呼ぶための植栽	ソメイヨシノ
中庭	目隠しになる植栽	オリーブ、タチアオイ、シマトネリコ、ヤマボウシ
裏庭	香りのする植栽	ソゴ、ヒイラギ、ケヤキ、アベリア、ラベンダー、ロウバイ

- a-ダイニング
- b-管理室
- c-休憩室
- d-サンルーム
- e-ポーチ
- f-参道
- e-畑



siteB-C 既存環境を活用した3つの小さな建築

介護施設と提案建築を結ぶ道空間上に、既存の環境を生かした4つの小さな建築を計画する。ふるまいから抽出し、一般化したいくつかの操作をまちの中に組み込むことで、現在の地域住民の環境に対する新しい意識を創出することを目的とし、地域住民にとって当たり前になっている環境のポテンシャルを引き出す建築を介在させることで、そこに情報が生まれ、まちに小さな居場所が出現する。

●ディプロマ賞



馬鳥 夏美
Natsumi BATORI
曾我部・吉岡研究室
SOGABE・YOSHIOKA lab.

継承と発展

Succession and development

旧蒲原宿における職住一体の暮らしの場の提案
Proposal for living space with their works in Kanbara

近代化が進行する前の暮らしと生業の関係は、今日大きく変化している。ライフスタイルも変化し、人々の価値観の多様化が進んでいる。伝統的な住宅の形式に着目することで、今日の多様化するライフスタイルのひとつに答えられる、新たな暮らし方を提示できる可能性があると考えた。

静岡市蒲原町は江戸時代、宿場町として栄えたが、人口減少の一途を辿っており、宿場の町並みが薄れつつある。

ライフスタイルや人との関わり方が変化してきた今日において、建築も形態を変える必要がある。

東海道に対して建物の軸を45度ふり、和小屋を4本柱で支える新たな架構を提案する。

軸をふることにより通りに対して建築をひらく。

新たな架構が人と建築の関係をつくりだす

中井 45度角度を振ることで様々な効果を生み出す面白い発想だと思います。90mmの4本柱の上に柱をのせているところは、垂直荷重については大丈夫だと思いますが、しっかり繋がらないと揺れるのではないのでしょうか。また構造については誰かから指導を受けましたか。

馬鳥 構造については独自で考えました。揺れについては4本柱の上に柱や束がくる状態で、接合部にスペーサーを入れている事例もありましたが、今回の提案のようにスペーサーを入れなくても大丈夫だと思います。

石田 それはスペーサーを入れないと取まりが悪くなります。4本柱については、詳細などから様々なことを考えていることが分かりましたが、その上の構造についてはどのように考えていますか。

馬鳥 上の構造は45度振ったことによって屋根部分の棟木がなくなることへの対応策として、一番高いところへ束を増やしています。



01. 静岡県静岡市清水区蒲原町について



01-1. 蒲原宿

江戸から数えて東海道の十五番目の宿場町として栄えた。江戸後期に安藤広重によって描かれた「蒲原夜之雪」は東海道五十三次の中のひとつである。



出典：廣重画 東海道五十三次



出典：東海便覧図略

01-2. 町の形状

元禄期の洪水の被害を受け、宿場を山側に移している。移設後の道路形状が、当時のまま残されている。道路幅は本陣のある町の中心部にいくほど広がっていく。北側には神社仏閣が多く、街道から垂直に細い路地が形成され参道となっている。各家の間口や奥行きも中心部につれて大きくなる。



出典：蒲原宿の楽しい暮らし

02. プログラム / 計画敷地

旧蒲原宿を対象エリアとする。現在、蒲原町は人口減少の一途を辿っており、東海道沿いには空き家が増えている。しかし交通の利便性により2拠点居住者や移住者からの注目が集まっている。周辺状況を分析し、旧東海道を挟んで対面する敷地を選定した。本計画では、敷地いに重点をおいて設計するが、まちの活性化のため敷地ろ、は、ににおいても設計する。



	敷地い	敷地ろ	敷地は	敷地に
プログラム	藍染工房 機織り工房 住居	漆塗り工房 木工房 住居	カフェレストラン コワーキング スペース 住居	宿泊施設 住居

03. 継承する要素

旧宿場町であることから、歴史的な景観が重要視されている。古い建物から今日に効果のある要素を継承する。

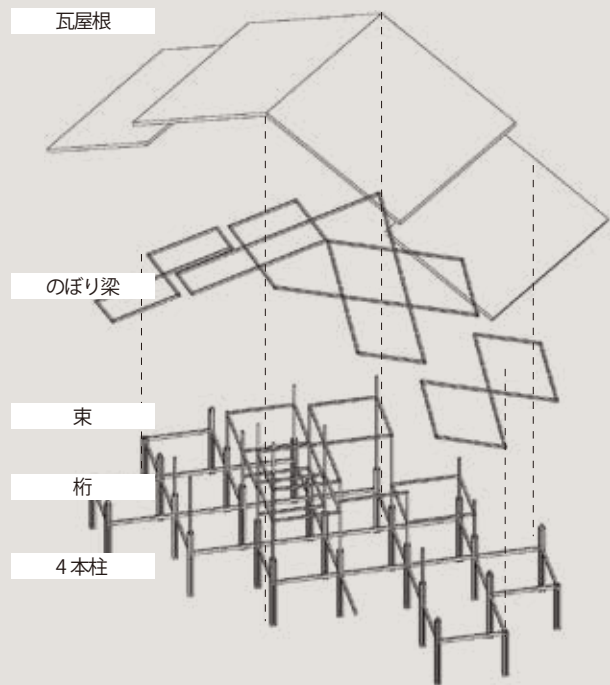
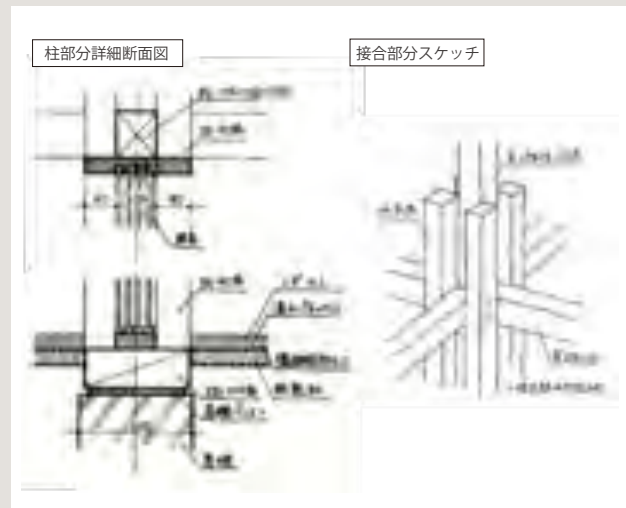
まちなみ	手摺	木建具	格子	平入屋根
	箱階段	空間の連続性	採光	
内部要素				
生業	藪戸	揚見世	漆器	藍染

出典:WindowScape3

04. 構造計画

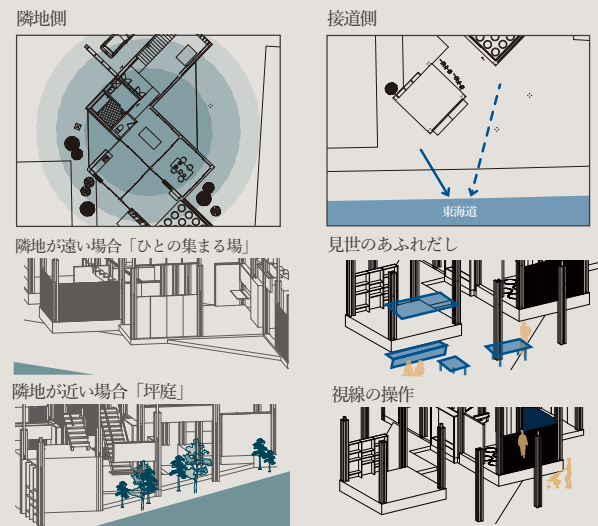
「45度ふられた和小屋を支える4本柱」

グリッドを旧東海道に対して45度ふり、小屋組を4本柱で支える。
4本に柱を束ねることにより、柱と梁の接合部を剛接合的な取り合いとみなすことで壁量を減らすことなどが可能となる。



「45度」の軸をふるることによる効果

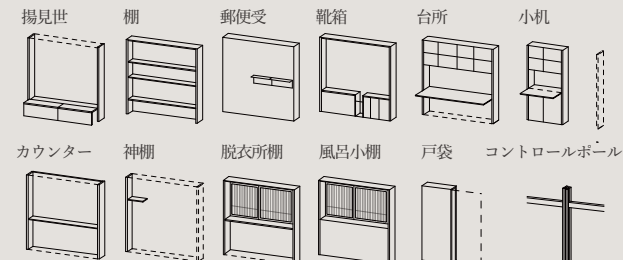
45度軸がふられることで各所に鍵込まれた空間が生まれる。



「4本柱」による効果

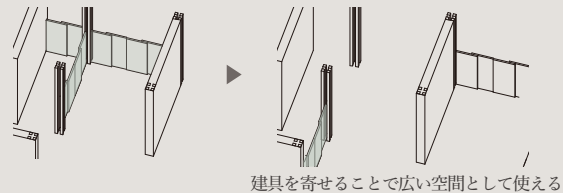
105度の柱に比べて、4本柱は壁に285mmの厚みをもたせることができる。古い住宅には部屋を格付ける空間などが存在していた。

285mmの厚みにより部屋を格付けるための「ふるまい空間」を仕込むことができる。

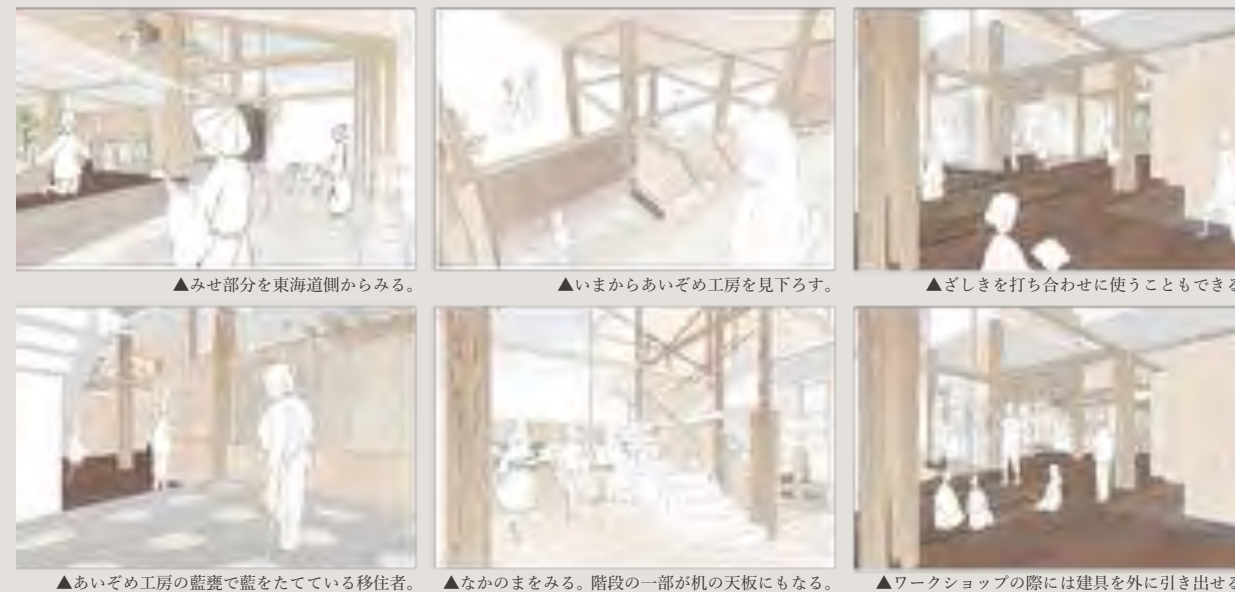
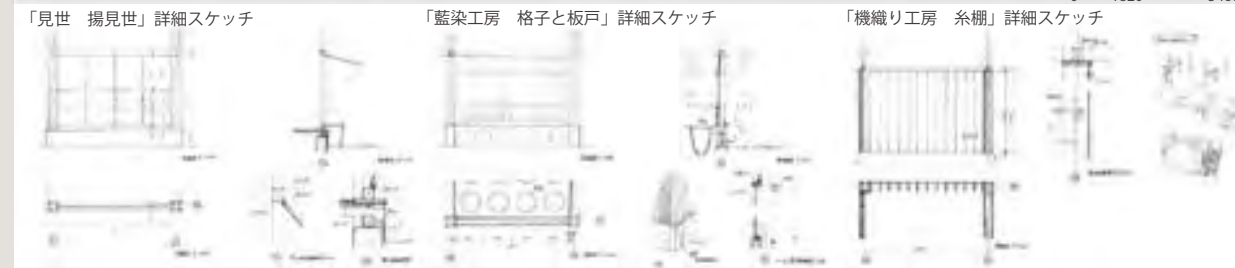
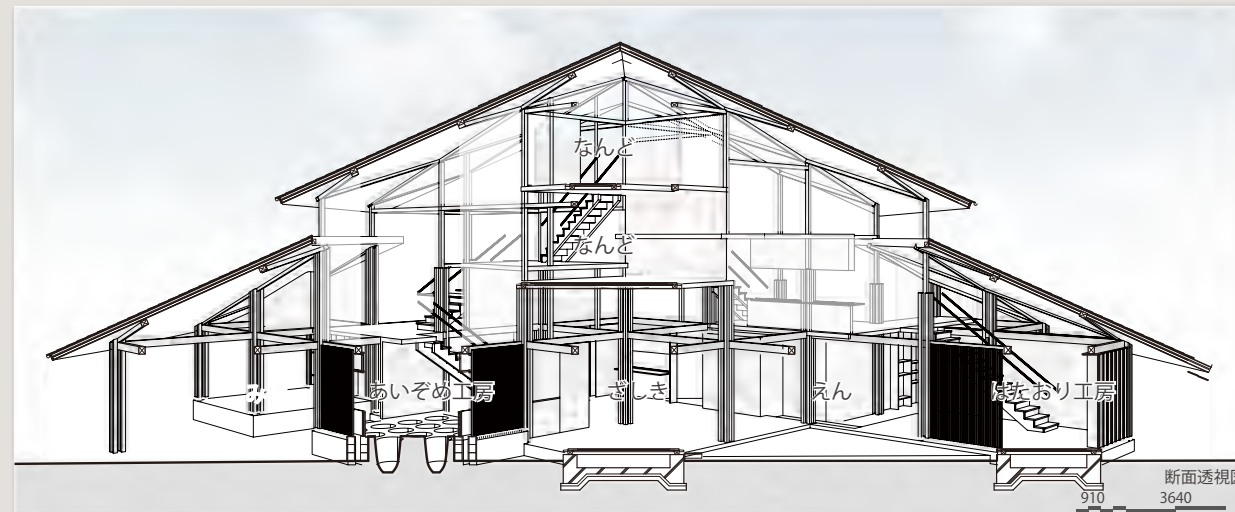


建具

4本柱の間を通過させることで、建具の可動域を広げることが可能となり、空間の多様性が生まれる。



05. 設計 敷地い



●優秀賞



丹羽 貴行
Takayuki NIWA
中井研究室
NAKAI lab.

フローティングフレームスタジオ
Floating frame studio

自主設計施工による既存の躯体や部材をいかした
多目的スペースの提案
Proposal of multi purpose space with existing frameworks
by self-build

石田 解体から設計施工を通じて既存を再構成していく中で、壁や床などの建築の部位の持つ意味について考えたことはありますか。

丹羽 当初は中2階や1階間仕切り壁などを取り外すことを想定していましたが、次第に壁や床などの分節によって空間が特徴付けられることに気づき、既存の構成を理解した上で設計をしました。

曾我部 今後のこの場所の位置付けや提案の最終像についてはどう考えていますか。

丹羽 ギャラリー、シアター、貸店舗といった様々な活動に対応できる拠点として将来像を持っています。



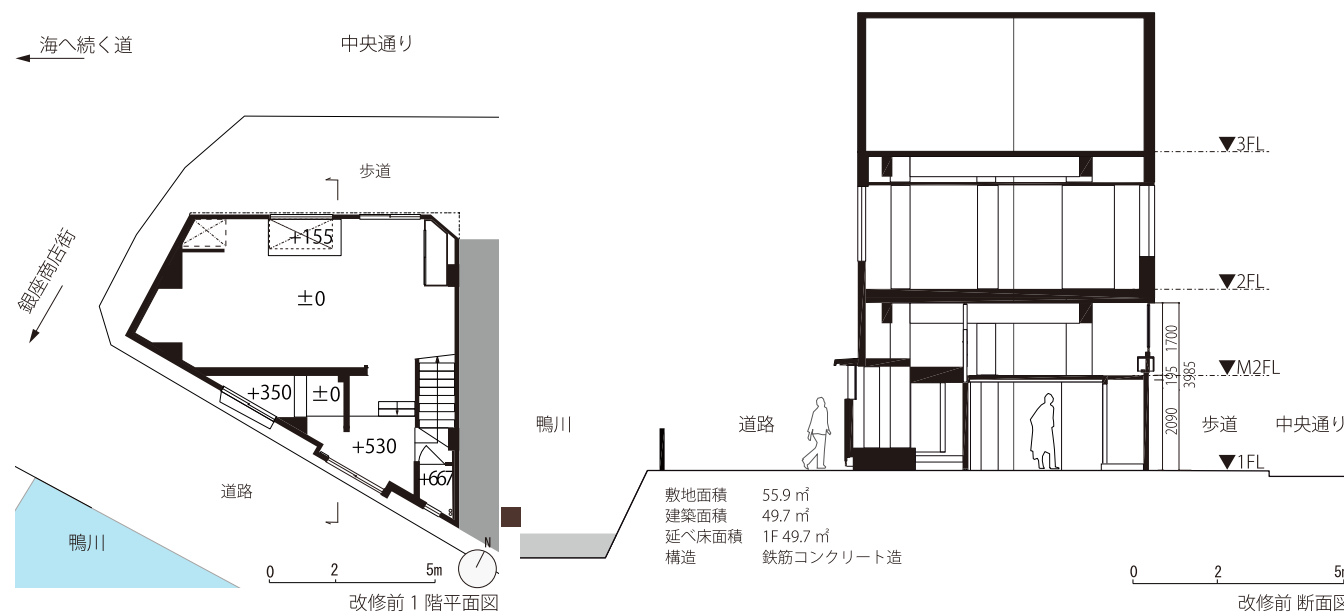
改修前 北側立面



改修前 1階内部



改修前 中2階



北側壁面撤去後



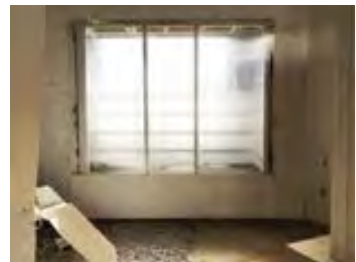
1階内部壁面撤去後



中2階床板撤去後



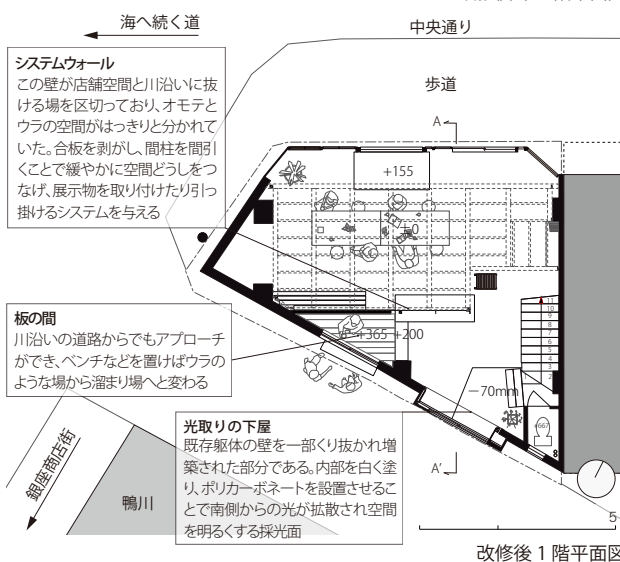
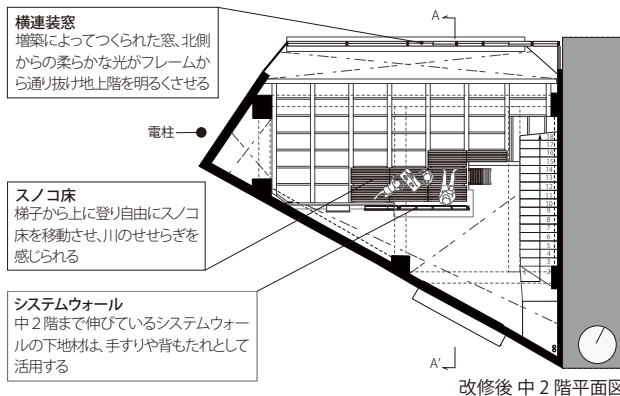
フローティングフレームからスノコ床を見る



光取りの下屋を見る

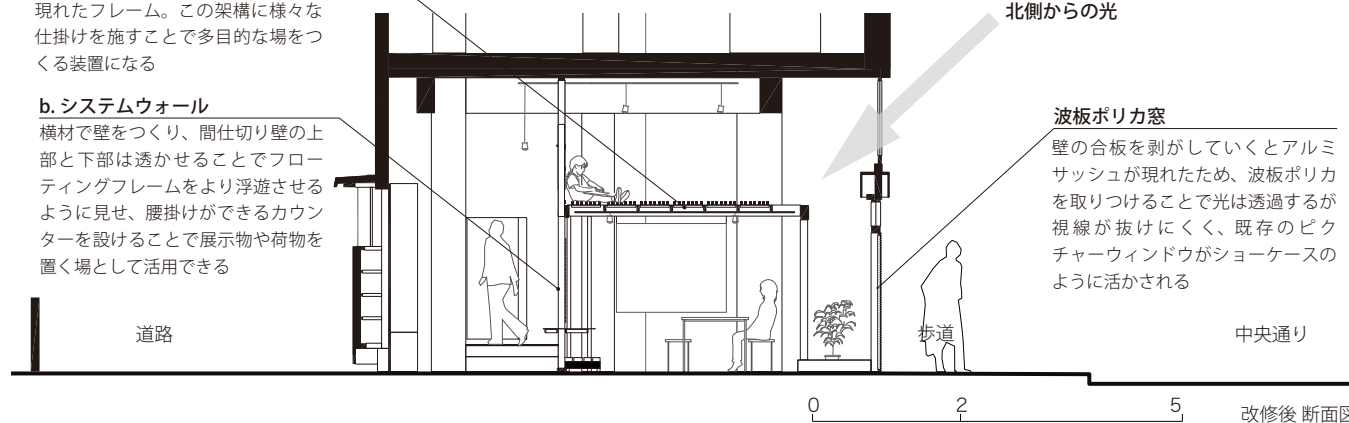


システムウォールを見る



a. フローティングフレーム

梁が天井から吊られており、床板を取り除いていくと浮いているように現れたフレーム。この架構に様々な仕掛けを施すことで多目的な場をつくる装置になる

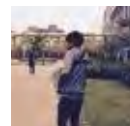


b. システムウォール

横材で壁をつくり、間仕切り壁の上部と下部は透かせることでフローティングフレームをより浮遊させるように見え、腰掛けができるカウンターを設けることで展示物や荷物を置く場として活用できる



●優秀賞



内山 大輝
Daiki UCHIYAMA
曾我部・吉岡研究室
SOGABE・YOSHIOKA lab.

浮遊する建築
Floating architecture

海拔ゼロメートル地帯の東京臨海部における水害に対する事前復興計画

Preliminary reconstruction plan for flood damage in Tokyo waterfront residential area at zero meters above sea level

中井 佃島は歴史のある街ですが、街並みを壊すのではなくそれらを再構成するような形が良かったのではないのでしょうか。このスケールでやると、船も揺れると思いますし、やるとしても佃島でなくても良かったのではないのでしょうか。

内山 佃島を選定した理由の一つに、周辺の建物が高層マンションに建て替えられ、転入者が増えていますが地域共同体としての関わりがなく祭りなどを行うことが難しくなっている現状があるからです。今回の提案では、1つ1つの建物をバラバラにすることで繋がりの変化を生み出し、今までになかった人同士の交流を生み出そうとしました。

内田 住吉神社については住宅や宿坊のように浮遊化させていないのはなぜですか。

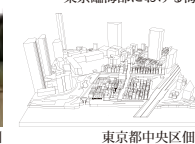
内山 佃島らしさを残すために、歴史があり、佃島を象徴する建物が住吉神社であると思ったからです。

内田 しかし、神社は災害が起きた場合、最初の避難場所としても使われると思いますが、そこところはどうか考えていますか。

内山 神社も道と同様にかさあげしており、大波が来ても避難できる高さになっています。



2019年台風通過後の佃川支川



東京都中央区佃島



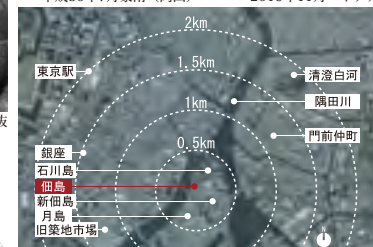
平成30年7月豪雨 (岡山)



2019年11月ベネチア



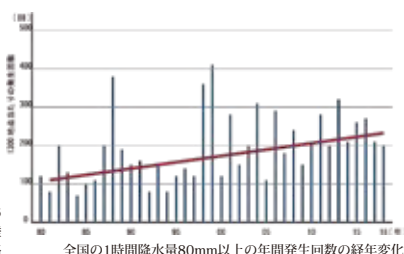
令和元年台風19号(福島)



高層化する佃島周辺



2019年と1996年の日本に上陸した台風の進路



全国の1時間降水量80mm以上の年間発生回数の経年変化



かつての船溜まり



水の神を祀った住吉神社



佃島の路地に残る井戸

近年、世界各地で台風や高潮、地球温暖化に伴う異常気象による水害が頻繁に起こっている。本計画は、海拔ゼロメートル地帯の東京臨海部における水害問題に対する事前復興の提案である。

計画地域の東京都中央区に位置する佃島は墨田川河口に位置し墨田川と佃川支川に囲まれており、満潮時と干潮時の水位の差が最大約 2m あるため、日常的に水害の危険がある。水門と防潮堤によって外水氾濫の対策がなされているものの、昨年の台風時には、隅田川の水量をできるだけ分散させるために水門がなかなか閉ざされず、住民は水害の危険に晒された。

そこで本計画では、水害の際に水没しない「浮遊する建築」を提案する。浮遊する建築は、地域に残る祭礼の単位から 2 街区をこれを生活共同体の単位とし、1 つの公共的な施設と住宅などによって構成する。建築は、佃島

の過去と現在の風景から土着的な建築要素を抽出しデザインに取り入れる。移動が可能なことなど、水に浮くからこそその利点を生かした計画とすることで、住宅は時には庭を持ち、畑を持つ。祭礼時には広場を設け神輿が街を練り歩く。

水害に対応できる建築の構想を通して、新たな街の構築と風景の継承の可能性、さらには地域共同体の再生を考えた。



浮遊化のフェーズ

フェーズ1 空き家の解体

佃島では、近年高齢化や建物の老朽化が原因で、空き家が増えている。これらを解体、更地化し、最低限の整備を行う。

フェーズ2 街区の掘り起こし

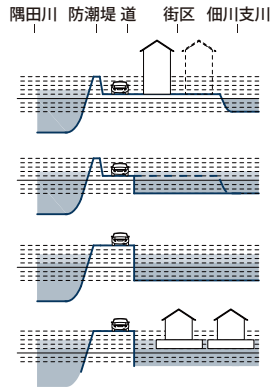
街区を4m掘り起こし、現在の佃川支川と同じ高さにする。

フェーズ3 道と住吉神社のかさ上げ

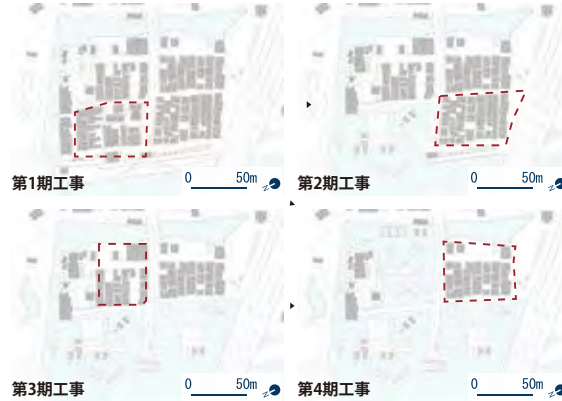
街区を掘り起こした残土を、道と住吉神社のかさ上げに再活用する。かさ上げされた道は、道の役割だけではなく、ふ頭としての役割と堤防としての役割を果たす。道に上下水道を整備する。

フェーズ4 建築化

新たに水上に浮かび、街を構成する建築(船)を新築する。また現状ある神社の機能や店舗に肉付けする形で新たな機能を付加する。



浮遊化プロセス

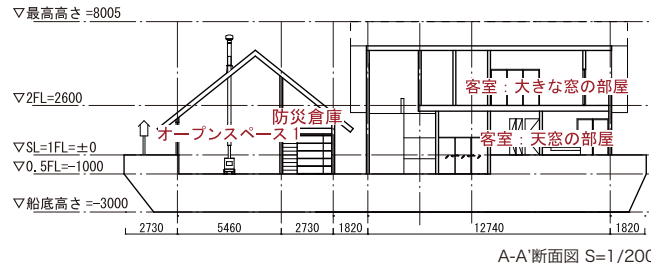


宿坊

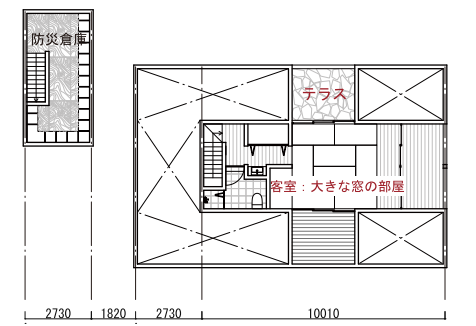
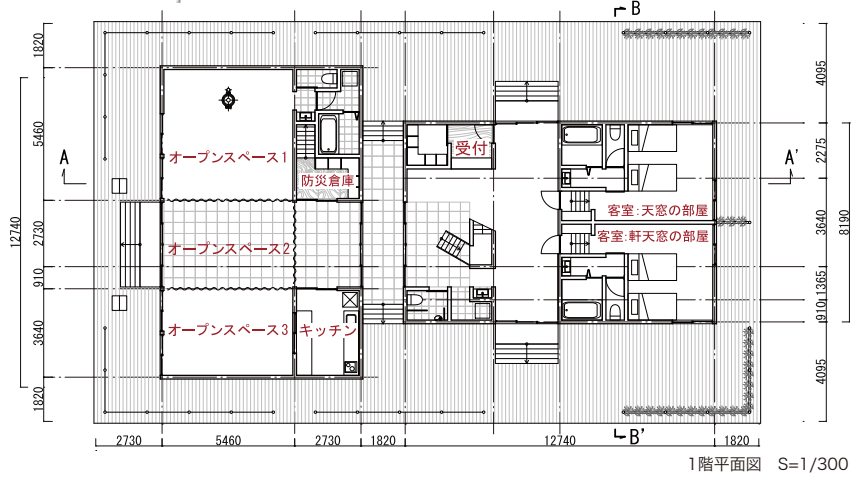


現在の住吉神社には陸路で参拝に訪れるが、かつては隅田川から船で来るのが正式な参拝ルートだった。そのため、住吉神社の参道に面したこの街区には、外から来る人をもてなす様々な店舗が並んでいた。本計画では、外から来る人のための宿坊を設計する。

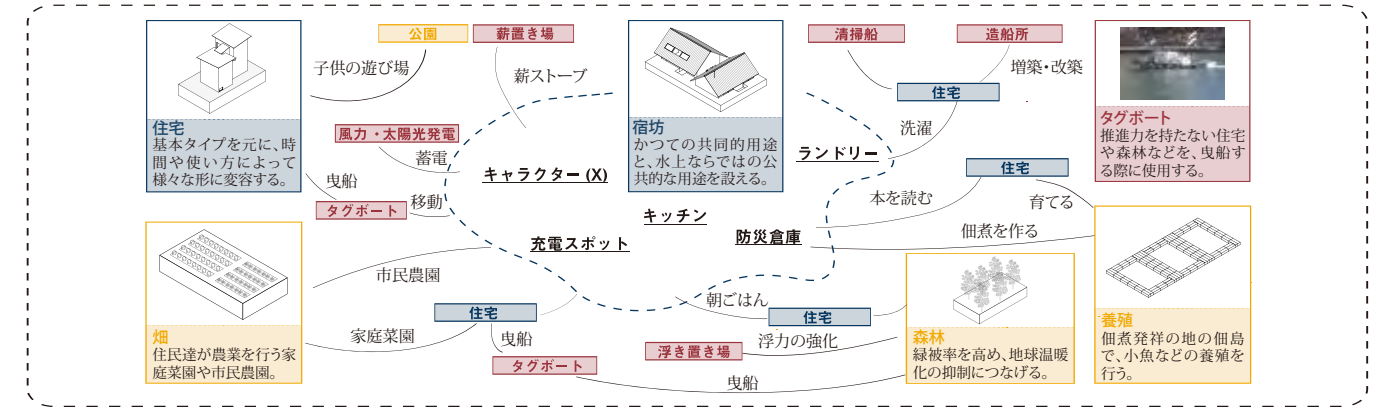
佃島の住吉神社には、住吉三神が祀られている。本社の建築様式には、同じく住吉三神を祀り全国の住吉神社の総本社である住吉大社と同様に、住吉造りを採用している。住吉造りは、反りのない切妻屋根の妻入りで、室内は外陣と内陣の二間に分かれる。また、住吉大社では第一から第三本宮が直列し、第三本宮の南には第四本宮が隣接する。海に浮かぶような船団のようなものである。本計画でも住吉造りの特徴である屋根と2つの空間に仕切る断面構成を用いる。本宮の拝殿同様に、手前に建築を配置することで船団のような風景を作る。



屋根伏図 S=1/100



街区の構成のイメージ

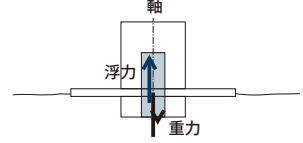


住宅

本計画の住宅は基本モデルをもとに、様々なタイプに展開を行う。

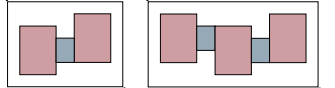
●水周りを集約させる

水の位置と量をコントロールすることで、水上でバランスをとる、また、上下水道と接続せず集約させることで、移動可能にする。



●部屋単位を6畳とする

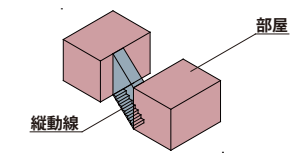
かつての佃島の多くの住宅から基準居住空間を6畳間と設定し、これを部屋のモジュールとする。モジュール単位の連なりで、住宅の増改築を可能とする。



●部屋を木造にする

船体部分のみを鉄骨構造とし、他を木造にすることで軽量化とローコスト化を図りつつ、住宅の増改築の自由さを生む。

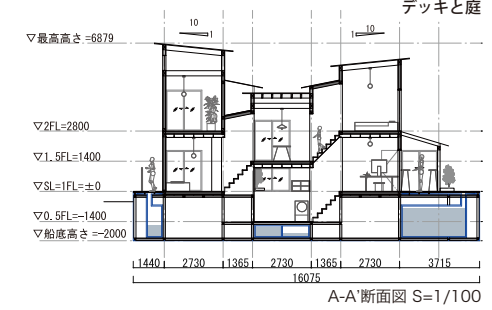
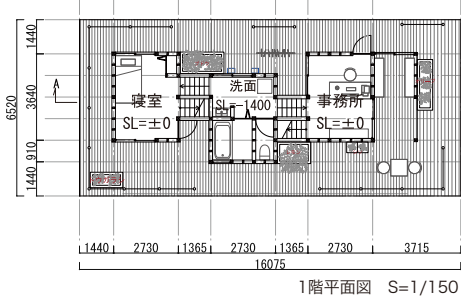
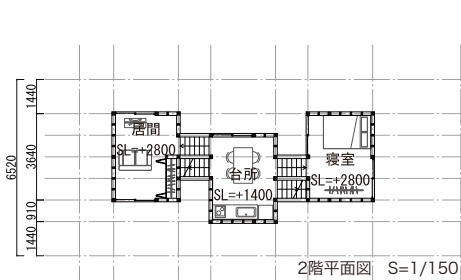
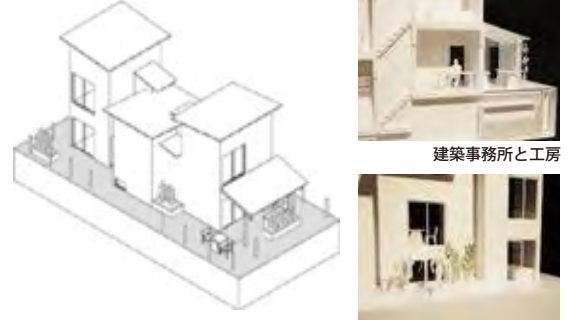
●縦動線を接続のコアとする



●雨水をバラスト水と備蓄水に転用

雨水を貯め、緊急時に生活用水として活用する。また、貯める量を調整することで、重さとバランスから、建築を水平にし、浮力を保つ。

住宅タイプの例：建築家の住宅



●優秀賞



野々村 明佳里

Akari NONOMURA
内田・須崎研究室
UCHIDA・SUZAKI lab.

同潤会の分譲住宅事業の成立と 事業モデルとしての赤羽分譲住宅地について

*A study on the establishment of Condominium
Housing Project by Dojunkai and how the Akabane
Residential Area developed as a business mode*

「佐々木家文書」を主資料として
“Sasaki-ke Document” as a main document

1. 研究背景と目的

同潤会は関東大震災の罹災者向け住宅の建設を目的として大正13（1924）年に設立された日本初の公的住宅供給機関であり、普通住宅事業やアパートメントハウス事業、分譲住宅事業などを展開した。本研究で着目する赤羽周辺地域では、赤羽第一期（1929）から赤羽第三期（1938）まで継続的に開発が行われた。なかでも、赤羽第二期（1929）では55戸が建設され、分譲住宅事業において初めての大規模分譲が行われるなど、分譲住宅事業の転機となった住宅地であるといえる。

平成28（2016）年に北区立中央図書館に寄贈された「佐々木家文書」には、赤羽分譲住宅地を中心とした、未発見の同潤会の内部資料が多く含まれていた。持ち主であった佐々木友次氏は同潤会の事業を引き継いだ住宅営団に所属しており、分譲課長および住宅整理課長代理を務めた人物であるため、同潤会が建設した住宅地の居住者名簿や申込書といった内部資料を保管していたと考えられる。また、佐々木氏は赤羽第二期分譲住宅の居住者でもあったことから、赤羽分譲住宅に関する資料が多く含まれている。

本研究では、赤羽分譲住宅の分譲を通して、同潤会の分譲住宅事業成立の背景を考察するとともに、分譲住宅事業における赤羽分譲住宅の位置付けを行うことを目的とした。

2. 勤め人向け分譲住宅が建設された赤羽分譲住宅地

分譲住宅事業は昭和3年に始まり、昭和16年までの間に全35ヶ所の郊外住宅地を形成した。サラリーマンなどの勤め人に向けた30坪前後の勤め人向け分譲住宅と工場労働者向けの15坪程度の職工向け分譲住宅の二種類に分けられ、本稿で扱う勤め

中井 普通住宅地と分譲住宅地の特徴や違いはなんですか。

野々村 普通住宅はバラックな建物に住む人をターゲットとしていたので、分譲住宅の入居者に比べて所得は低い層が住むため、連棟建ての長屋形式となっています。分譲住宅については入居者のターゲットが所得が安定したサラリーマン向けであったため、庭付きの木造戸建て住宅が建設されました。

山家 展示会は、敷地の選定や住宅の建設等、さまざまなプロセスのどの段階で行うのでしょうか。

野々村 ほとんどは竣工した段階で行います。竣工した住宅にはいくつか型があり、それを見ることができます。また、この展示会は住宅の購入者のみに向けられたものではなく、今後の住宅建設におけるモデルとなるような展示会でもあります。

人向け分譲住宅は昭和4年から昭和13年に建設された。事業は、政府の住宅組資金の貸出を一時停止していた時期と重なっていたことや同潤会の分譲方法が合理的であったこと、設計施工が優秀であったなどの要因により軒並み好調であった。

本稿で扱う赤羽分譲住宅地付近は、昭和3年から昭和10年にかけて岩淵町第一・第二区画整理組合によって「岩淵町第一・第二土地区画整理事業」が展開され、宅地化が進められた。土地区画整理組合と同潤会の関係は明らかではないものの、宅地開発の成功のために、組合が認可される以前の早い段階から同潤会の分譲住宅地の建設が予定されていた可能性も指摘されている。

3. 赤羽分譲住宅地分譲に際して開催された住宅展示会

同潤会では、分譲時に住宅地や住宅の特徴、平面型式、住宅地の配置図、家賃などを記したポスターや『住宅案内』を作成する。また、分譲前に実地にて住宅の展示を行う展示会が開催されることが知られているが、その詳細はこれまで明らかにされていなかった。赤羽第二期・荻窪における展示会が、現在確認できるなかでは初めての展示会である。

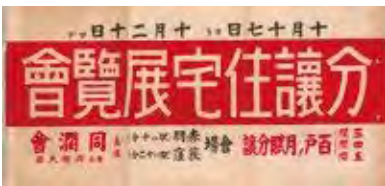
赤羽第二期・荻窪の展示会は「改良セラレタル木造小住宅ノ構造、設備、様式及價格等ヲ一般ノ総覽ニ供シ住宅ニ関スル知識ノ啓発ニ努メテ併セテ本会分譲住宅ノ宣傳」を目的とし昭和4年10月17日から20日の4日間開催された。来場者は9,658人へのぼり、4日間開催されたことが確認できる他の9ヶ所の分譲住宅地における展示会の平均来場者数4,075人と比較しても2倍以上の来場者であり、大変盛況であった。予算に着目すると、広報費が予算を大幅に超過しており、省線広告が予算の約5倍、予

算のついていなかった市電広告に最も多くの予算が割かれるなど、検討過程で鉄道利用者に向けた広告の強化がなされた。鉄道関係の広告の強化は、沿線を利用する通勤圏内の利用客を展示会へ誘導し、良好な住宅環境や住宅内部を実際に見てもらおうことが目的であったと考えられる。『住宅案内』をみると、昭和6（1931）年の洗足台第一期からは各鉄道会社と協力し、世帯主を対象として最寄駅から主要駅までの乗車無料券の交付や割引を導入していることがわかる。このような交通面の利便性を強調する広報は、通勤に不便な郊外に建てた普通住宅における反省の現れともいえる。また、同潤会の分譲住宅は低廉に借入れまたは購入した土地に建設することによって家賃が廉価であること、住宅組合のような連帯責任を負う必要がないことが強調されていた。このような広報を行なった結果、分譲住宅事業は各住宅地の展示会で1日400～5,000人を超える来場者を記録するなど、一般市民からも高い関心を寄せられる事業となった。



◀赤羽第二期分譲住宅の分譲に際して作成された「住宅案内書」(表) (昭和4(1928)年)

両面印刷となっており、表面には申込条件や住宅地の特徴、支払いの内訳が記載されている。裏面には各住宅地の平面図および配置図が記載されている。



◀赤羽第二期・荻窪分譲住宅の住宅展示会の広報のために作成された省線広告(昭和4(1928)年)

4. 赤羽分譲住宅地の申込者について

同潤会の分譲住宅に申し込みにあたって、申込者は①関東大震災の罹災者であること、②住宅組合や住宅資金を供給する産業組合員でないこと、③本人や家族が分譲住宅建設地域に住宅を所有していないこと、④賃貸料などが確実に支払われると認められるもの、という4つの条件に適合している必要があった。これらの申込条件のほかに同潤会の内部基準として世帯主の収入の基準が存在していたことが「佐々木家文書」によって初めて明らかとなっ

た。また、同潤会では住宅数に対して申込者数が多かった場合には抽選が行われることが知られているが、これらの内部基準に適応しない者があらかじめ「事故者」として除かれていた。

赤羽第一期の申込者のうち事故者となった人物の事故理由の65%は収入不足や収入不確実であり、確実な支払いが求められていたことがわかる。申込者の職業は一般企業に勤めるサラリーマンが最も多く、次いで官吏と保険会社社員、メディア関係や銀行員や軍関係など安定した収入がある人物が多くみられた。

「佐々木家文書」には第二期の申込書は含まれていないものの、「赤羽分譲住宅申込者」という冊子が存在し、申込者名と各住宅の倍率が明らかとなった。最も人気であった住宅では倍率が65倍にもなるなど同潤会住宅の人気の高さがうかがえる。

赤羽第三期は昭和13（1938）年に2戸のみ建設された。『事業報告』には、入居普通住宅の居住者を優先するとの記述が見られるが、申込書によると申込者全員が赤羽普通住宅の居住者であった。申込者の職業は8名中7名が官吏であったうえ、展示会の開催ならびに住宅案内の存在が確認できないことから、公に分譲がなされなかった可能性も指摘できる。また、第三期が建設された昭和13年は職工向け分譲住宅事業を主要事業として展開していた時期でもあるため、勤め人向け分譲住宅は収入の安定している官吏に絞った可能性もある。

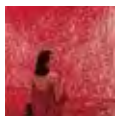
5. まとめ

本研究によって、赤羽分譲住宅地の事例を中心に同潤会の分譲住宅事業の成立について以下の結果を得た。

①赤羽第二期では55戸という大規模分譲を成功させるために初めて展示会が開催され、以後大々的な広報により同潤会の活動を一般に知らしめた。②申込者の中心層であるサラリーマンへの広報を強化するため、鉄道広告に力を入れていた。③赤羽第一期の時点で、申込者のうち同潤会の内部で設けられた収入などの独自の基準を満たしていない者が事故者として除外されていた。

同潤会では、大々的な広報活動を展開することで一般の関心を高め、大勢の申込者を集めたと考えられる。また、その中から賃料の安定した支払いが可能な層を居住者として選ぶようなシステムが赤羽分譲住宅地を起点として確立された。このような居住者選定システムが良好な住宅地の形成に繋がったと考えられる。

●優秀賞



李 蓁

Shin Ri

内田・須崎研究室
UCHIDA・SUZAKI lab.

近代青島における銀行建築のファサードと平面計画に関する研究

A study on plan and style of bank buildings in modern qingdao city

第四公園銀行建築用地への転用経緯を中心に

From The Transformation of The No.4 Park

1. はじめに

青島市は中国山東半島の南側、黄海に面する港湾都市である。近代青島は1897年から1949年までに、様々な統治者によって占領された。ドイツ占領時期（1897-1919）、青島の都市計画が開始し、城市公園（第四公園）が作られた。南京政府時期に、第四公園用地は青島銀行公会に賃借され、銀行エリアが形成された。しかし、その用地の転用と用地内の銀行の建設経緯、建物のファサードと平面の分析を行った研究がみられない。



図1 現在青島の位置 Google 地図より

2. 研究目的・対象史料

本研究を通じて、第四公園用地の転用経緯、そこに建てられた中国銀行青島分行、山左銀行、上海商業貯蓄銀行、大陸銀行、金城銀行、中国実業銀行の計画と様式をまとめ、建設成経緯、変容、再生に関する歴史を明らかにする。なお、それらの銀行建築は中国の重要な文化財として利用されている。

青島市社会研究所、青島市城市建设博物館、中国海洋大学等ではヒアリングや文献収集を行うとともに、档案馆における銀行を建設する申請書類や図面資料を収集した。また、日本国立国会図書館では、青島における南京政府時期の建築法規や城市計画図を収集した。これまでに档案馆で収集した銀行建築の申請書類と配置図、立面図、平面図及び詳細図に基づき、6つの銀行建築の建設経緯をまとめ、各銀行建築の計画と様式の分析を行う。

山家 第四公園の南京政府による銀行公会の4条の条件はガイドラインのようなものだと思いますが、こういった条件は当時の中国で一般的に付けられていたのでしょうか。

李 一般的ではないです。第四公園は青島市内では特に重要な商業エリアですが、市民の利用者が少ないことや規模を大きくできないなどから、商業用地として再整備を行うために付けられた条件です。

曾我部 4つの条件のうち、「正面の入り口は蘑菇石(モグセキ、花崗岩の旧称、青島産)で装飾する」とありますが、この条件だけ具体的に決められているのはなぜですか。

李 青島市は蘑菇石の生産地であり、建物の特色をつけるために加えられた条件です。

3. 第四公園の位置

ドイツは青島を占領した後、青島の地形により、多くの城市緑地を作った。この中の1つのはFriedrichstraße 街（今の中山路）とAlamy 街（今の肥城路）の角地の「城市公園」がある。

日本は1914年に青島に占領し、ドイツが建設した部分をもとに、青島の都市に関する三期工事を編成した。『青島軍政史』（図2）により、第一期計画の中には、今の中山路、



図2 第四公園の位置、『青島軍政史』1914年～1917年

曲阜路、河南路、肥城路のエリアに「深山公園」を作った。1922年には中華民国政府が日本政府から青島を回収し、農林事務が日本時期の公園に基づき、青島の公園を再整備、新規開設し、第一公園から第六公園を形成された。「深山公園」は「第四公園」を改称された、敷地面積は5500平方メートルであった。

4. 青島市第四公園は商業用地への転用経緯

1927年に中国北洋政府は「第四公園は特別な景色がなく、市民の利用者数も少なめである。公園の位置は市内の商業区で、規模の拡大が出来ず、現青島市内の商業を発展するため、商業用地として賃借する」という理由で、第四公園用地の転用することを決めた。しかし、借用地主は租金以外に、市政を応援するため高い金額の「報効金」を支払わなければならなかった。そのため、用地を賃借は成功しなかった。

銀行建築の計画において、南京政府は銀行公会に4条の条件を提示した。1、銀行建築は全て三階建てとし、地下室を付けて建てる。2、正面の入り口は蘑菇石（モグセキ、花崗岩の旧称、青島産）で装飾する。3、内部は暖房設備を整える。4、6つの銀行と銀行公会の計画をまとめて入札し、同時に着工する。

5. 各銀行の建設経緯

各銀行に建設経緯については、档案馆の建築資料からファサードを変更したことが分かるが、特に変更の内容は記載されていない。建物の立面図と現存の建築を比較し、ファサードの装飾の変更が見られる。



図3 青島工務局通知単、青島市城市建设档案馆、1933年

竣工時期	竣工時期	名称	住所	設計者	敷地面積 (㎡)	建築面積 (㎡)	階数	構造	設計者
1913	1914	中国銀行青島分行	青島市中山路	林 謙吉	4764.4	1027.3	3階	鉄筋コンクリート造	不明
1922	1924	山左銀行	青島市中山路	張 潤吉	7943.9	464	4階	鉄筋コンクリート造	安野村高寛
1921	1924	上海商業貯蓄銀行	中山路99号	張 潤吉	2174	723	4階	鉄筋コンクリート造	安野村高寛
1922	1924	中国実業銀行	青島市河南路	許 守忠	1827.3	1270	3階	鉄筋コンクリート造	張潤、トリス川野
1922	1924	大陸銀行	青島市中山路	張 潤吉	2234.6	723	4階	鉄筋コンクリート造	安野村高寛
1922	1925	金城銀行	青島市河南路	張 潤吉	4922	198.3	3階	鉄筋コンクリート造	安野村高寛

表1 各銀行概要、青島市城市建设档案馆、銀行申請書類より

6. 各銀行のファサードの共通点のまとめ

大通りの中山路に面する銀行のファサードは、青島工務局の条件に従い、高さを揃えるなど、連続性が守られている。ファサードは統一性が高く、荘厳さを見せ、統一感を与える。装飾を抑えた、簡潔な新古典主義のデザインとなる。角地の大陸銀行と金城銀行は、角地中央部を強調する目に引くような、ファサードは古典主義とアール・デコを設計した。そして、各銀行のファサードは、図4でまとめている。

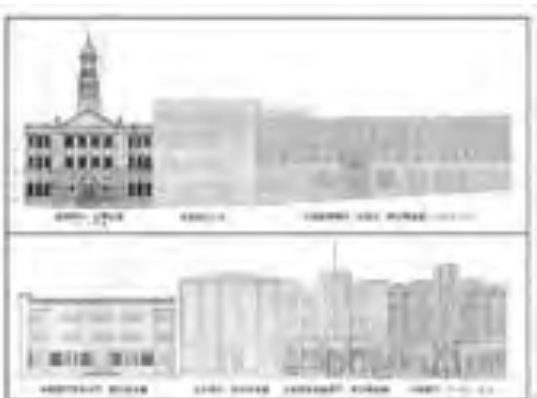


図4 各銀行ファサードのまとめ、青島市城市建设档案馆、銀行図面より

7. 各銀行の平面計画

各銀行建築の平面計画に関する共通点を整理した。その内容は次の5点である。1、銀行の金庫を地下室に配置される。2、ホールと事務室を一階に配置され。3、二、三階には賃借用の事務室を設ける。4、最上階は社員寮として利用する。5、職員が休憩するための裏庭やテラスを配置する。

他の近代青島銀行建築と比較すると、元第四公園用地の銀行建築は単純に銀行としての利用だけではなく、他の会社と共用するオフィスである。そのため、大規模の建物が設計され、社員が生活するための空間が作られた。

8. まとめ

銀行建築の建設経緯とファサードの分析を行った結果は、唯一の南京政府時期に建てられた大規模な銀行建築群として、銀行のファサードは青島工務局の条件に従い、ファサードを変更したことが分かる。そして、各銀行のファサードは、高さを揃えるなど、連続性が守られている。ファサードは統一性が高く、荘厳が見られる。平面計画について、青島工務局からの条件に従う。そのため、大規模な建物が設計され、他の会社と共用するオフィス、社員が生活するための空間が作られた。他の近代青島銀行建築と比較すると、機能が多様化したことが分かる。それら近代青島銀行建築の重要な特徴である。

以上より、文化財として利用と保存をすることは重要である。

註1) 『社史 旭硝子株式会社』旭硝子株式会社 .p.64.1967
2) 雑誌名は1号から40号は『婦人衛生會雑誌』、41号から382号までは雑誌名が改題され『婦人衛生雑誌』となっている。
3) 『報知懸賞住宅設計図案』大倉書店 .p.91.1919

修士論文

◎ フローティングフレームスタジオ 自主設計施工による既存の躯体や部材をいかした多目的スペースの提案	丹羽 貴行
◎ 近代青島における銀行建築のファサードと平面計画に関する研究 第四公園の銀行建築用地への転用経緯を中心に	李 葵
◎ 浮遊する建築 海拔ゼロメートル地帯の東京臨海部における水害に対する事前復興計画	内山 大輝
都市の記憶を引き継ぐ 中国の城中村における地域再生の計画	王 天浩
都市農業の在り方と建築の可能性 生産緑地を活用した地域コミュニティ拠点の提案	太田 朗人
等身大の暮らし 東京都豊島区における持続可能な集合住宅と生活拠点の提案	岡本 晴美
存続危機と向き合う寺と人との関係の再考 現代人の心を整える禅堂の提案	小田 凌大朗
島嶼部における交通インフラを利用した地域活性化の提案 移住者と高齢者のこれからの暮らし方	門田 大希
Twitter画像からみた観光地の空間的特徴 江ノ島・鎌倉・横浜みなとみらい21を対象として	金井 賢三
★ 認知症の患者の行動分析に基づいた建築の提案	竹島 大地

◎ 同潤会の分譲住宅事業の成立と事業モデルとしての赤羽 分譲住宅地について 「佐々木家文書」を主資料として	野々村 明佳里
オフィス街での都市生活モデル 職住混在の暮らしの場の提案	浜松 謙太
浮遊する公開空地 タワーマンションの公開空地を再構築する提案	早川 史洋
★ 継承と発展 旧蒲原宿における職住一体の暮らしの場の提案	馬島 夏美
建築が動くとき 移動・可変機能を持つ建築ハードウェアの提案	水上 翔太
道を内包する建築と「余所者」を介した住民連携による共同体の再編 羽田地区における路地を活用したゲストハウスの提案	諸橋 克哉
息烽県における三線工場リノベーション計画	楊 思航
戦前期におけるハーフティンバー建築のファサード表現に関する分析 文化財指定建造物を中心として	李 林軒
日本独自の「家相」の成立過程に関する研究 中国伝来の「風水」との比較を通して	劉 洪君

★ディプロマ賞 ◎優秀賞

2019年度学生優秀作品紹介

卒業研究

坂本 理久
古城 偉央里
加藤 佑規
黒柳 和大
池原 なつ子
高野 遼真



卒業設計 ゲスト審査員



武井 誠
Makoto TAKEI

京都工芸繊維大学 デザイン・建築学域
特任教授



六角 美瑠
Miru ROKKAKU

芝浦工業大学特任准教授

●ディプロマ賞

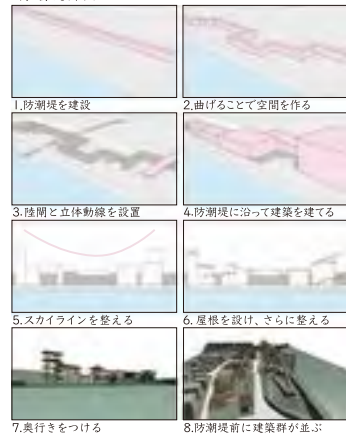


坂本 理久
Riku SAKAMOTO
曾我部・吉岡研究室
SOGABE・YOSHIOKA lab.

隔たりなき壁
Walls without separation

徳島県美波町における防潮堤とその周辺の提案
Proposal for the seawall and surrounding area
in Minami-town, Tokushima

ダイアグラム
-防潮堤計画-

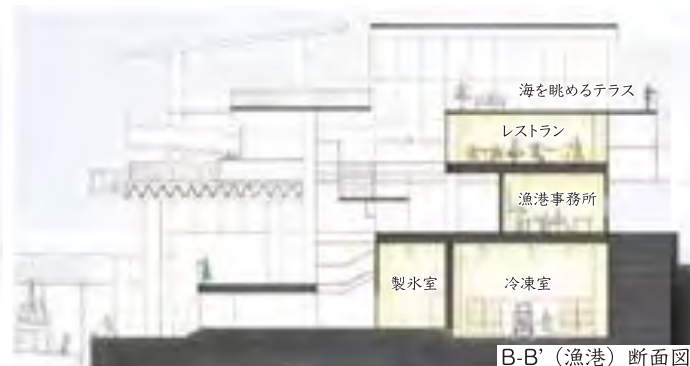
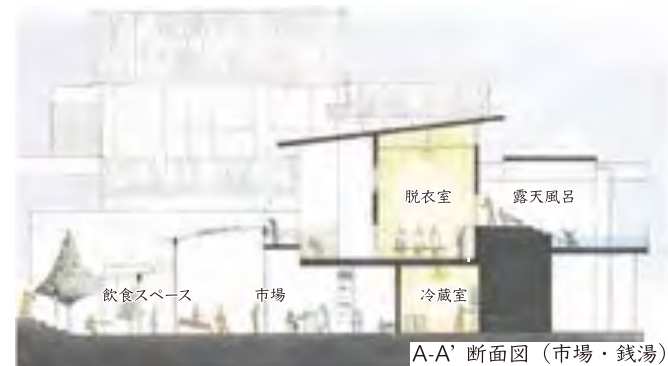


六角 災害時だけのことでなく普段からまちと海を繋げようとする試みが良いと思いました。また、防潮堤という強さに見えるが、隙間があったり裏つばいところがあったり、非常におもしろいと思いました。

武井 今回の計画では海からの見え方や、街からの見え方がよく計画されており好感が持てました。この計画をするときに特に気にしながら計画したことはどこでしょうか。

坂本 一番考えたことは防潮堤がありながらも普段の生活が豊かになることです。そのためにまち側からは柔らかく、海側からは強い印象を意識してデザインしました。また、まちと海を今まで以上につなぐ意識をしました。

武井 現実に起こりうる計画なのかは分からないが、防潮堤という土木的なものを建築的な手法で解こうとする姿勢は非常に我々も考えさせられ、興味あるものでありました。



● 優秀賞



古城 偉央理

Iori KOJO

石田・田野研究室
ISHISA・TANO lab.

死シテ生ヲ為ス

Reborn after Die

建築のはじまりから富士山噴火に伴う機能喪失、
自然へ還るまで

Construction of architecture, loss of the function
caused by Mt.Fuji eruption, and return to Nature

六角 機能として研究室を入れているのですが、純粹に富士信仰のための場ではいけなかったのでしょうか。

古城 信仰のための場として計画するのではなく、時間や自然の現象とともに建築空間が象徴性を持ち、富士が信仰されるような場の計画をしました。

武井 建築の役割、機能がなくなった後のことを考えるのはとても大切だが、形が恣意的に感じられるのですが、いかがですか。

古城 私はこのような造形であったり、建築と自然との関係を考えるのが好きで、造形やプログラムに合う敷地を探しました。

武井 このようなストーリー重視の案では、敷地を形の条件に合うように自らが設定してしまい、建築の理論よりも土地の場所性が勝ってしまうんですね。



● 優秀賞



加藤 佑規

Yuki KATO

曾我部・吉岡研究室
SOGABE・YOSHIOKA lab.

その道の先に

Destination of the way

農地再生を基軸とした土砂災害発生地域の復興計画

Reconstruction plan of the landslide disaster area based on the farmland regeneration

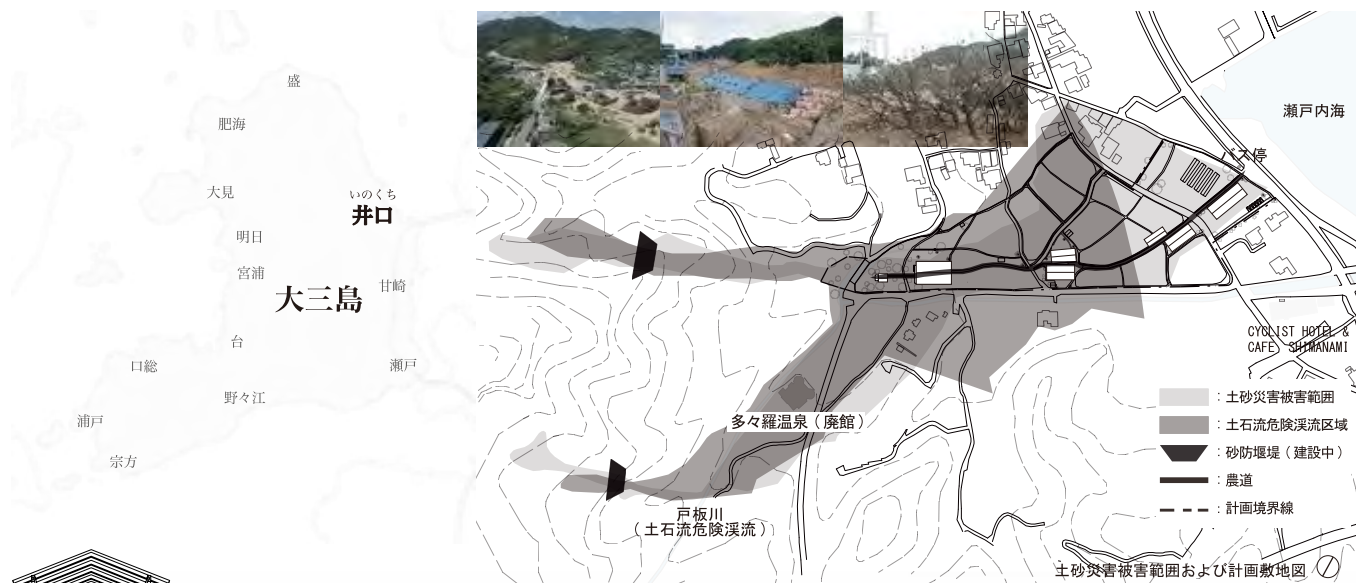
武井 六棟ごとに異なる木造架構にしていますが、農道を歩くシークエンスの中で、架構を魅せる仕掛けは、何かあるのですか。

加藤 建築内部からは大きな開口から見える田園風景をピクチャウィンドウのようにし、吹き抜けを設けることで小屋組を見えるようにしました。また外部からは深い軒先の架構や、酒造場の重ね梁をあらわしにしました。

武井 一本の道を手がかりにそれぞれ建築を配置する発見は良いと思うが、建築を一ヶ所にまとめて配置する計画のアイデアはなかったのですか。

加藤 当初の計画は、近隣の空地にまとめた建築を配置しましたが、この道が島民の方々の生活の中で深く根強い道であるとお聞きし、配置スタディを重ね、風景を存分に取り込むことができるよう農道沿いに配置することにしました。

六角 この広い敷地の中で、シークエンス的に建築群を魅せていて良いが、大三島ならではの風景を手がかりに、もう一歩建築に踏み込めるとより良い作品に仕上がったのではないのでしょうか。



● 優秀賞



黒柳 和大

Kazuhiro KUROYANAGI

山家・上野研究室
YAMAGA・UENO lab.

城ヶ島の雨

Rain over J

北原白秋を通して自然と文化を空間体験する
施設の提案

Proposal for a facility to experience nature and culture
through Kitahara Hakushu

武井 雨を取り入れる建築を考えたようですが、具体的な造形の中に雨が溜まり、流れる様子を建築で表現した時に、全体のランドスケープとの兼ね合いは、どのように考えたのですか。

黒柳 灯台からの景色はとても綺麗だが、コンクリートで固められた現状に対して、雨を流す行為と灯台を生かした外側からの動線を維持したランドスケープを考えました。

六角 造形的な建築がとても興味深い作品ですが、自然との関わりの中で建築の機能は、はっきりしているのか、それとも曖昧なものなのか、その関係性をどのように考えていますか。

黒柳 自然界の中で人間の変化のスピードを自然界に合わせることで、人間が自然界との共生について深く考えるのではないかと思います。

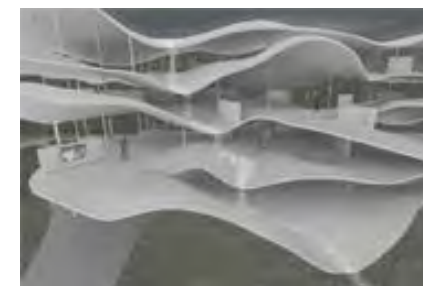
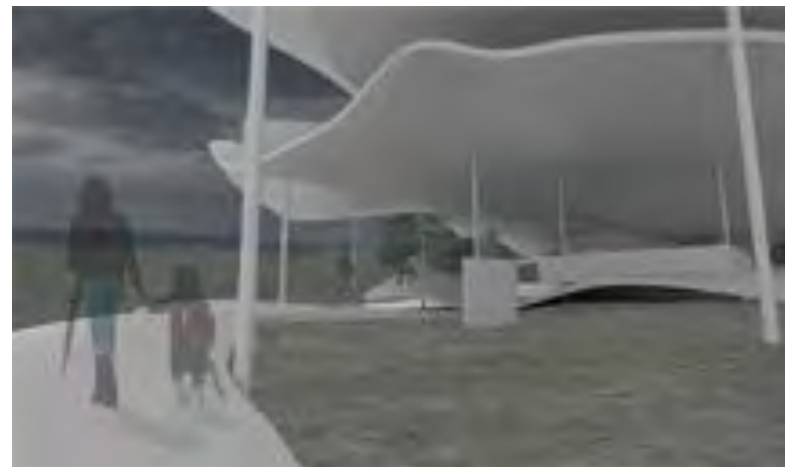
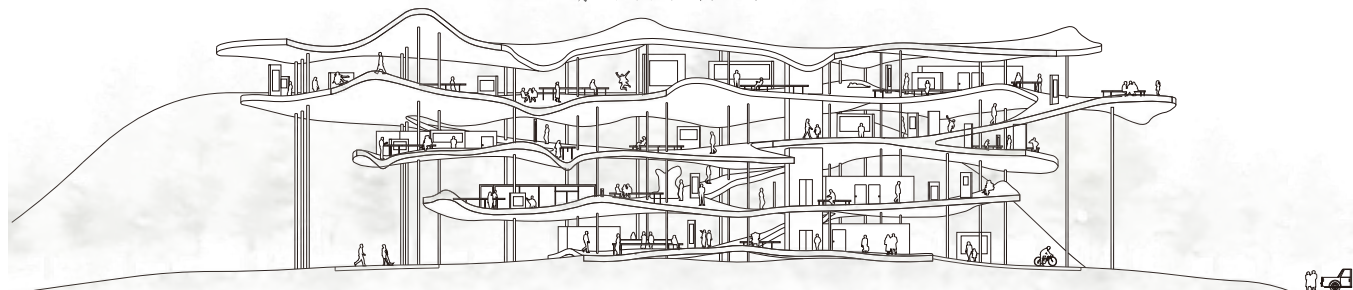
北原 白秋

雨はふるふる 城ヶ島の磯に
利休鼠の 雨がふる
雨は真珠か 夜明けの霧か
それともわたしの 忍び泣き

舟はゆくゆく 通り矢のはなを
濡れて帆上げた ぬしの舟

ええ 舟は櫓でやる
櫓は唄でやる
唄は船頭さんの 心意気

雨はふるふる 日はうす曇る
舟はゆくゆく 帆がかすむ



北原白秋と聞いてその名を知る人は減ってきている。それは時とともに歴史や文化が変わることと同じようにかつての偉人が忘れられていくことも必然ではないだろうか。しかし、この詩に出てくる「利休鼠の雨がふる」それは雨というひとつの自然の要素が人間の過去から今を繋ぐ媒体となり、不変的なものを通して変わりゆく時代の流れに気づく手掛かりとなる。



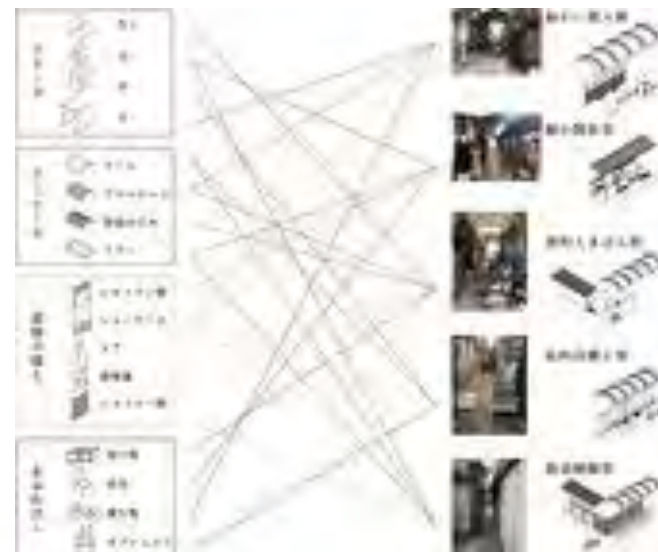
●優秀賞



池原 なつ子
Natsuko IKEHARA
中井研究室
NAKAI lab.

子どもの遊び場から見る
マチグワールの表と裏
The parallel playground in local market

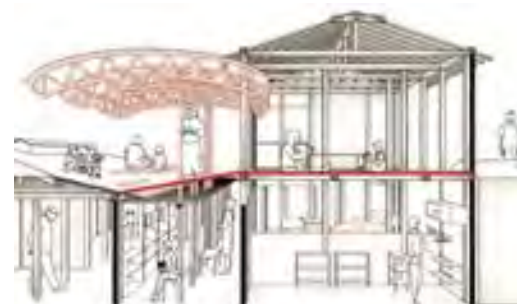
栄町市場における要素の共存と連担から
読み取る道空間の構成
*Spatial Composition of streets with building and
elements in Sakaemachi market, Naha, Okinawa*



道空間の構成



まちの展望台



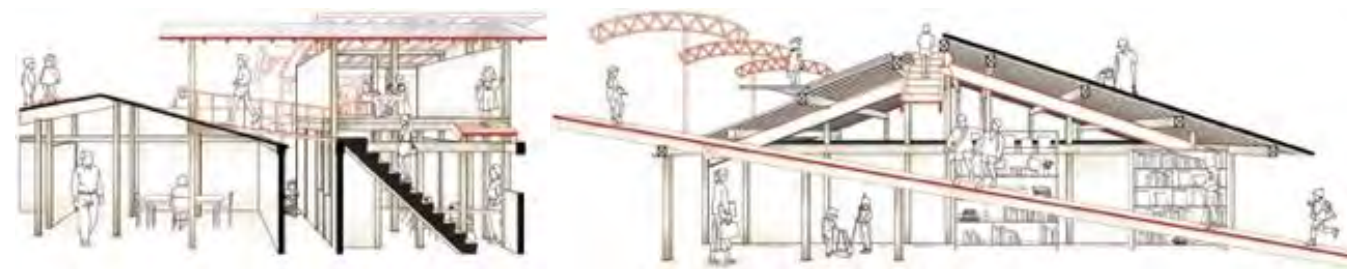
大屋根キッチン

六角 リサーチで魅力的なエレメントを抽出し、そこから動線を構築していったと仰いましたが、どのように活かして設計したのですか。

池原 建物の単位を超えたつながりや道にあふれ出す活動など、栄町市場の空間的特徴を新たに設計した動線に反映しました。

六角 その方法論が見えるともっと面白いですね。
武井 部分を調べていって建築の全体性を見つける、こういった分析は非常に大事だと思います。一人の建築家として今までの場所性に加えて新たな風景が形成されるといった仮説みたいなものを立て、その説明ができるといいですね。

”マチグワール”がこれからの沖縄を元気にする



図書と相談所

子ども工房

●優秀賞



高野 遼真
Ryoma TAKANO
内田・須崎研究室
UCHIDA・SUZAKI lab.

国宝・重要文化財の遺構からみる詰組斗拱の研究

A study of Intermediate Bracket Complexes in Remains of Important Cultural Properties

甲良家建仁寺流にみられる「アイタ」による斗拱法
The Bracket complex method
by "AITA" found in the Kenninji school of the Kora family

1. はじめに

日本の伝統的な建築において、細部意匠やプロポーションが造形性を高める要因となっている。その基盤となった一つとして江戸時代の設計基準を記した木割書が考えられる。

江戸時代の大棟梁職において、建仁寺流を形成した甲良家は多くの木割書を伝えた。その最大の特質は、詰組斗拱の斗拱芯々間隔を「アイタ」と称する一種のモジュールに置き換えていることであり、その比や倍数から合理的な設計を可能とした。

2. 研究目的・対象史料

本研究では、日本全国の詰組斗拱を持つ寺院より、その類型を明らかにしアイタ型の遺構の存在を確認する。また、中世から近世にかけての木割の原理において、日本の古建築における比例関係を重視したシステムである「アイタ」がわが国にどの程度普及されたのかを明らかにする。対象は現在、国宝及び重要文化財に指定されている近世までに建てられた寺院建築 716 件のうち、出組以上の詰組斗拱がみられる事例 27 件を対象とする。また、河田克博氏の研究¹⁾で調査された 22 件も含め、計 49 件で比較検討を行う。

図1 詰組斗拱とアイタ



中井 新たに資料を作成する上で基準としたものは何ですか。また作成した資料を見ると平面や立面だけではなく、建築全体にアイタというものが展開できるのではないかと思います。いかがですか。

高野 本研究では国宝と重要文化財に指定されている全 49 件中、河田氏が研究を行っていない 27 件を対象としリスト化しました。また

アイタの立面的な部分に関しては、細かな規定があり、アイタの寸法値を何倍かした値を元に考えられています。軒の出などアイタ型ものは全てアイタを基準なっています。

山家 全 49 件中 27 件と研究対象を絞り込んだことで狭い領域に踏み込んで研究を進められたことは非常に良いことと思います。

3. 詰組斗拱の類型

禅宗様建築の大きな特徴の一つとして詰組斗拱が挙げられるが、中世から近世にかけて斗拱の配置が変化している。表1より、初期の型としてはソナエⅠ型・Ⅱ型・Ⅲ型が挙げられる。主に中世の禅宗寺院に用いられた型であり、完数やその比から柱間寸法を定め、斗拱を配している。近世初期(桃山時代)には垂木幅によって柱間寸法を規定する枝割が出現する。斗拱間隔の規定は枝割ではなく中央間の3等分、脇間の2等分で規定されており、枝割と斗拱に関係性はみられない。

近世になると枝割と斗拱が整合性を持ち、斗拱間隔を基準寸法とするアイタ型が出現する。斗相²⁾と斗拱端間隔³⁾が同寸法になり、合理的に詰組が配されるようになる。さらにアイタ型には発展型であるⅡ型があり、大斗外面と脇巻斗外面が一致している。これにより甲良本では枝割・巻斗・大斗・柱径・柱間のそれぞれに整合性を持たせた理想的な斗拱の設計体系を確立したといえる。⁴⁾

4. 詰組斗拱の類別

表2は全 49 件の類別結果と時代による変遷である。ソナエⅠ型のような完数値のみを用いた型は普及せず、ソナエⅡ型・Ⅲ型のような比による設計を主とした型が好まれていたことがわかる。また、時代的に見ると中世はソナエ型が主流で、近世に入るとソナエ八枝掛型やアイタ型などの枝割を使用した型が出現し始め、より整合性を持った型が普及した。新たなアイタ型においては知恩院三門と南禅寺三門はアイタ八枝掛Ⅰ型、専修寺如来堂は発展型であるアイタ八枝掛Ⅱ型に該当する。

5. 各類型の普及具合

ソナエⅠ・Ⅱ・Ⅲ型は同時代にみられたものだが、使われた地域に違いがあることがわかる。ソナエⅠ・Ⅱ型は遺構が少ないため地域性の検討は難しいが関東地方から中国・四国地方まで疎らに存在している。ソナエⅢ型は関東地方から九州地方まで存在しているが、中でも京都に集中している。ソナエ八枝・九枝掛型は関東周辺と京都にみられ、ソナエⅠ・Ⅱ・Ⅲ型のような範囲では確認できなかった。既往研究では京都においてアイタによる設計方法はなかったとされたが、新たなアイタ型は2件が京都の遺構であることや、甲良家がもともと京都で活動していたという記述もみられ、京都にもアイタという設計方法は存在していたといえる。

表1 類別結果と変遷

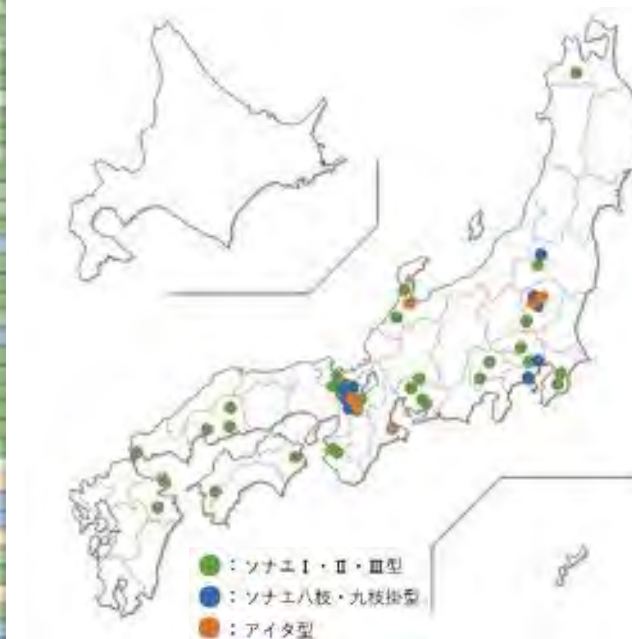
6. 結論とまとめ

本研究における結論は以下の3点である。

- ① 詰組斗拱の類型に地域性がみられた。
- ② 新たにアイタ型に類別できる遺構が3件確認できた。
- ③ 「アイタ」という設計方法は普及しなかった。

新たに京都府でもアイタ型がみられたが日本に広く普及するに至らなかった。理由としては、その技術力の高さから容易に習得できるものではなかったと考えられる。比例を重視したシステムである「アイタ」は日光東照宮や南禅寺三門などの重要な寺院に用いられ、近世から現代まで時代を問わず多くの人々に好まれている。西洋におけるモデュールや黄金比のように、日本独自の比例による設計方法の一つとして「アイタ」は大きな役割を果たしたといえるだろう。

図2 全遺構の分布



註釈

- 1) 河田克博編著(1988)『近世建築書一堂宮雛形2 建仁寺流』(日本建築 古典叢書3)小葉田敦・内藤昌監修,大龍堂書店
- 2) 斗拱一備え中における巻斗の間。
- 3) 斗拱一備えの外側巻斗の端から隣の斗拱の端まで距離。
- 4) 註1に同じ。

武井 誠

Makoto TAKEI

1974年 東京都生まれ
1997年 東海大学工学部建築学科卒業
1997年～1999年 東京工業大学塚本由晴研究室研究生＋アトリエ・ワン
1999年～2004年 手塚建築研究所
東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了、博士(工学)
現在、京都工芸繊維大学 デザイン・建築学域 特任教授

主な賞歴/受賞
2016年 Record HOUSES 2016受賞：「旋の家」
2015年 日本建築学会賞（作品）：「上州富岡駅」
2014年 Brunel Awards 2014：「上州富岡駅」第6回 JIA中国建築大賞 特別賞：「カモ井加工紙第三攪拌工場史料館」
2010年 第21回 JIA新人賞：「カタガラスの家」
2009年 東京建築士会 住宅建築賞受賞：「カタガラスの家」 第25回 吉岡賞：「カタガラスの家」
2008年 Wallpaper Design Awards 2008 最優秀賞：「輪の家」
2007年 Record HOUSES 2007受賞：「輪の家」

六角 美瑠

Miru ROKKAKU

東京都生まれ
2001年 筑波大学芸術専門学群建築デザイン卒業
2003年 東京藝術大学建築科大学院修了
2003年 六角鬼丈計画工房(六角工房)所属
2005年～ 六角工房分室ミルアトリエ開設
2005年～2010年 東京大学工学系研究科博士課程在籍
2006年～2009年 東京藝術大学建築科教育研究助手
2014年 東京大学工学系研究科建築専攻博士号取得
2015年～2017年 東京大学先端科学技術研究センター 特任助教
2017年～ 東京大学生産技術研究所特任助教
2018年～2020年 芝浦工業大学特任准教授

建築作品
住宅ORU、住宅浅間観荘、広州大学城中心スタジアム、シーフォースBLDG等

人類はコロナウイルスという目に見えない脅威に直面した。まさか、卒業設計の講評をしている時には、世の中がこのような状況に陥るなどとは夢にも思わなかった。しかし、今思い返してみると、あの時私が講評会の時に感じた、既成概念を打破しようとする皆さんの果敢な姿勢は、見えないものに立ち向かう医療関係者にも通じる、専門家としての使命感のようなものにも感じられ、勇気付けられた。

最優秀賞の坂本さんの案は、津波という見えない脅威といかに向き合いかを景観という視点を交えながら、土木と建築の境界を曖昧にするような建造物の提案であり、土木工学の未知なる領域まで踏み込んだことは、評価すべきであろう。古城さんと、黒柳さんの案は、詩的な雰囲気醸し出し一見すると自然と共存するような振る舞いを見せる建築かと思いきや、否そうではなく非常に自律的なプログラムによって形づくられることにある種の強引さがあるものの、実際に出来上がる空間を想像

最優秀賞に選ばれた坂本さんの制作は、防潮堤という自然に抗う強い人工物に対して、「折れ曲げながら配置する」というユニークな方法で、環境に溶け込み海辺の新しい拠点を作り出している。一連の壁面が環境や人の活動とともに海辺の新たな場や景となり、災害時だけではなく人と海辺をつなぐ構築物としての日常の在り方にとても可能性を感じた。

加藤さんの集落の農地再生計画は、しまなみ海道から伸びる道沿いを巡るシークエンスや木軸組が水田に映り込む様が、風土にあった情景として色濃く想像できとても気持ちの良い作品でした。

池原さんの作品は、沖縄の活気ある市場の雰囲気や模型に様々な活動の場所とともに生き生きと表現されていたのが印象的でメイドイン栄市場のような固有な場が作り出せたら、さらに良かったのではないかと思う。

造形性が際立つ作品が卒制審査において評価されることが近年少ないと感じているのだが、古城さんの卒制

すると、そこには確かに建築でしかつくることのできない場所がある。この2案が選ばれたのは、見たことのない造形への不安よりも、新しい空間への興味の方が優れた結果に違いない。一方で、加藤さんと池原さんの案は、復興と再開発という現代における社会問題を切り口に、丁寧なりサーチと、明快な架構から生まれる群造形が、新しい風景をつくることを期待させるものであった。この2案も「見えない」その土地の気概を発見し、建築によって必死に形にしようと試みたことが評価された。

そもそも建築行為自体が目に見えない脅威なものかもしれない。建築物が地面に建ち上がった瞬間は、突如として現れるカタチに、社会や近隣の住民などが拒絶反応を示して、社会問題になることもある。しかし、パリのエッフェル塔のように、建設当時に、「無意味」と評されたとしても、長い年月を経て、フランスにとっても、世界的にも無くてはならない存在になることだってある。人の感情を揺さぶるような建築こそ、今求められているのではないだろうか。

は独特な世界観と熱意のこもった造形力を持って、私たち審査側をその世界観に引き込んだ。黒柳さんの作品は静かな環境の中に緩やかな波を打つような動線空間が立体的に構成され、周辺環境に馴染みながら美しく存在していた。

今回の卒制審査会では、個性や思想がしっかりと形になって現れている作品に多数出見え、とても充実した時間になりました。その根底には、まちづくりから発展したプロジェクトやまちのリサーチなど研究室ごとの活動や研究での学びがあり、計画の背景や思考のベースとしてしっかりと培われているように感じられた。今は新型コロナの影響で、実空間での対話や活動が制限される事態に直面しまちづくりや調査に赴くことも難しい状況が続いている。しかし、現地に滞在しての調査や活動など、学生時代にしか経験のできないことも多い。大学院や社会に進んでからも、卒制で芽生えた考察力と視点を生かして、幅広く活動をしていてもらいたいと思う。

石田 敏明

Toshiaki ISHIDA

今年度の卒業研究は審査システムの見直しもあり、全体的にレベルアップにつながったと思う。また、一方卒業設計のテーマの設定について改めて考えさせられた。生産物としての建築はモノとして社会に姿を現し評価されるが、卒業設計は実際にリアライズされるわけではない。今年度の作品は構想力や思考のプロセスを通して現実化されると、どのように影響力を持つてであろうかを想像する楽しみがあった。上位入賞作品は地域や場所、風景のつくりかた等、建築の本来の役割や使命について真摯に向き合い、思考したプロセスや格闘が窺えた力作であり、ドローイングの表現力も高く評価できた。

一方、修士論文（設計）では卒業設計に比べ、より社会の出来事や接し方など今日的なテーマをアンケートやヒヤリング、文献調査から得られた基礎的資料の読み取りを通して結果としての建築的提案として昇華させた論理的構成力が求められる。今年は身近な問題を深く掘り下げ、建築的提案として表現力や図面としての完成度も含めて、とても説得力のある作品が多く見受けられた。空間構成にのみ注力するのではなく、現実的な空間をイメージし具体的な空間のディテールまで思考が詰められていたのは現実と向き合った証左であり、とても良い成果であった。

修士論文は根気強く資料収集し、それらをテーマに沿って論理的に組み立て、論考として発見的結論に導かなければならない。また、論文内容を裏付ける資料の収集や豊富さが論文の厚みや発見の新規性を決定してしまう。今年度の優秀賞として評価された二つの論文は上述したような内容であり、信用できるしっかりとした資料の収集もさることながら、文献を通して独自の視点で論考しているし、想像力も必要であることも示唆的であった。修士論文から博士論文への展開を期待したい。

内田 青蔵

Seizo UCHIDA

僕の研究室は、歴史研究を専門とするため学生のほとんどが卒業論文を選択している。その際、たかが卒論であれ、これまで言われてきた研究分野の中、例えば、“参考にした書籍の中に新たに1行でも新しい知見や発見を加えたいという気持ちを持ち続けること!”と学生たちに伝えている。ただ正直に言えば、卒論のレベルは大半が既往研究から用いられている資料や方法を整理し、どのような解釈が導かれているのかを整理することで終わっている。新たな1行は残せていないが、卒論レベルではここまででも十分だ。ただ中には、そこまでも到達しないものもある。本人だけでなく指導も悪いのかもしれないが、その後に手を加えさせ、完成させている。

自らの研究フレームを構築し、新しい知見を展開するところまでは、やはり大学院での修論を待つかない。それでも僅かではあるが、自分のやりたいこと、あるいは、やるべきことがおぼろげながら理解できたもの、すなわち、導くべき結論までのストーリーを自分自身でしっかりとイメージできた学生たちは、“新しい1行”を確実に残している。これがあるから指導も楽しいのだ。

さて、改めて卒業設計を見ていると、卒論同様に自らでストーリーをイメージできたものの作品は、なかなか見ごたえがある。そうした作品が二次審査まで進んだものといえ、それなりのストーリーが審査時にイメージできたものなのだ。個々の図面そのものに何を伝えるために描かれたものかが明快に読み取れるし、ストーリーの中での位置づけもしっかりしている。しかしながら、大半の卒業設計は残念ながら何をしたいのか、社会に対してどのような提案をしたいのか、現状をどう変えたいのか、こうした問い掛けをしても全く反応がない。図面も、基本となる平面、立面、断面も揃わず、そもそも図面を見てもフラットな図面ばかりで表現も乏し

く、図面からの訴えもなく、何を描いているのかが理解できないものが多かった。卒論に起承転結が必要のように、卒業設計の図面群にも同じことが求められるのだ。その意味で、改めて、基本となる平・立・断の図面類をまずしっかり描くこと、そこに卒業設計の起承転結があることを理解してほしいし、社会の仕事の中でこの経験を生かしてほしいと願う。

山家 京子

Kyoko YAMAGA



審査会はスリリングである。何と言ってもライブなので、その場に居合わせた者にしか分からない空気感がある。以前、オーディエンスとして参加したコンペの審査会はなかなか劇的な展開だった。ある案が予選の段階で圧倒的に評価され、本選でも途中まで揺るがない支持を集めていた。ところが、ある審査員が、「でも、これって面白いのかな・・・」とつぶやいたところから流れが一気に変わり、結果その案は最優秀を逃した。こうした展開はドラマティックだが、当事者にとってはたまったものではない。しかし、審査会とはそういうものである。審査員やその場の流れで選ばれる作品は変わる。一方で横綱相撲というのがあって、本人の調子が悪くても、どんな相手がきても勝ち抜く強さを備えている様を指す。審査される側にできることは、審査員を選ぶか、横綱相撲も目指すかである。

今年度の卒業設計優秀発表会がそこまでスリリングでドラマティックだったわけではない。ただ、ベスト 5 に選ばれた作品を見ると、今年度の選考のカラーが出ていたように思う。横綱相撲の作品もありながら、有機的建築の存在感が際立っていた。今年の発表会の空気が彼らの作品の良さを際立たせていたといえるだろう。

個人的に気になった卒業設計として、三浦(亜)さんの「都心の洞窟」は、都市河川の鬱陶しい場所の魅力を発掘し、それを際立たせようとした試みは興味深かった。福田さんの木造架構は、プログラムに関心が向きがちな昨今にあって、建築デザインを主題とした清々しさを感じた。修士設計では、構想、デザインともに竹島さんと馬鳥さんが頭一つ抜けていた。卒業・修士論文はテーマが多様で本人の関心が盛り込まれていたところに共感もてた。

曾我部 昌史

Masashi SOGABE



今年度の卒業設計では、ここ数年の神奈川大学での卒業設計で提示される作品群と異なる傾向が二つの側面であった。ひとつ目は、作品のタイプの幅が少し広がったように感じられることである。流行に左右されることなく（実際に建てられている建築にも、流行といえるような明確な傾向は感じられにくくなってきているけれど）、各自の関心を元に特徴的な提案につながったものが多いが見られた。ふたつ目は、出身地を敷地に選んだものが減ったことである。特に優秀作品講評会に残ったものの多くが、出身地とは別の場所で構想されたものだった。いずれの傾向もポジティブにとらえて良いと思う。そして、優秀作品発表会で発表をした作品に限られることではあるけれど、それぞれの関心を十分に突き詰めたといってもいいものが見つかった。

最終的に上位5作品に選出されたものを、エリアの広さ順にみていきたい。一番広域での提案となった坂本の「隔たりなき壁」では、地方都市の旧市街全体に目を向け、水際エリアの課題と可能性に迫った。広域でありながら生活者の視点を元にした提案が重なり合っており、丁寧な検討がみてとれる。沖縄の市場の役割を再考する池原の作品と、大三島の土砂災害跡地再興を目指す加藤の作品は、面的か線のかといった違いはあるが、規模が近いだけで無く、構法や構成と人びとの暮らしの様子とを関係づけながら思考しているという点でも共通した問題意識が確認できる。富士噴火被災後の建築の様子を独自の視点で描いた古城の「死シテ生ヲ為ス」は、被災することで建築としての完成を迎えるというもので、良い意味で問題作といっていだろう。うねる床面が山の斜面と運動しながら計画された黒柳の「城ヶ島の雨」は建築の提案としては正統派であるが、美術館として提案されていることで、用途と空間の関係についての検討を矮小化させたくないという意欲が感じられる。この先、卒業設計に取り組む後輩たちも、自分自身の視点で独自の問題意識にもとづいた建築提案を目指してほしい。

中井 邦夫

Kunio NAKAI



近年は、建築の魅力を語る際、社会や地域、環境などといった様々な文脈との関係を語らないといけないような風潮になっている気がする。建築は社会的な産物でもあるからそれも当然といえば当然なのだが、一方で、建築「自体」の魅力への関心や思考が薄れているようにも感じる。そんななか古城君の卒業設計は、下手をすればアナクロになりそうなリスクを負いつつ、建築の存在自体だけを主題としていることに、現在の建築デザインをめぐる状況に対する、彼なりの批評と挑戦を感じた。

以下では、本編で詳しく紹介されているもの以外で個人的に印象に残った設計、論文について触れておく。

①卒業設計…浅利：トオリドマのアイデアは面白いし表現力も感じた。衣服をもっと空間体験に関わる積極的な取り扱いにできればもっとよかった。三浦亜也奈：独特な着眼点が魅力的だった。あまり建てすぎず、水面と高速道路と街の関係をアーバンランドスケープ的にデザインできるとよかったかも。福田：便宜的に各施設や広場が集積し複雑になるだけの駅前を、明快なデザインで統合できる可能性を感じたが、表現力がやや足りなかったか。

②卒業論文…今年は歴史系の内田・須崎研6編のほか、山家・上野研2編、中井研3編（他設計B梗概4編）があり、例年に比べてテーマもバラエティに富み、いずれも内容的にも興味深いもので楽しめた。

③修士論文…個人的には李君のハーフティンバー建築に関する研究や、劉君の家に関する研究が興味深かったが、制作系では、目的とデザインとのつながりが理解できないものや、論理展開に無理や飛躍があるものが多いことが今年も気になった。

卒業論文

工業都市のウォーターフロント再生に関する研究 ドイツ・デュースブルクを対象として	遠藤 啓吾
住宅系書籍にみる日本の戦前期における便所の位置に関する一考察 間取りにおける他室との関係を中心に	磯崎 翔一郎
民間空地活用事例に関する調査研究	清水 幹太
★国宝・重要文化財の遺構からみる詰組斗拱の研究 甲良家建仁寺流に見られる「アイタ」による斗拱法	高野 遼真
旧岡田邸の設計者と建築年代に関する一考察 遠藤新設計の矢田部勤吉邸との関連について	夏目 恭介
土地形状と道路との関係からみた熱海市における防火帯建築の構成	野口 松伸
北海道先住民族（アイヌ）の住居の変遷 厚真町発掘調査報告書を基本資料として	藤江 涼太郎
磯崎新の作品における内部空間に表現された構成要素によるデザインの变遷	益山 亮太
横浜山手の洋館に関する一考察 関東大震災直前の洋館の外部意匠の特徴について	江上 莉紗
ナチス・ドイツ政権下(1933-1945)の労働者住宅についての一考察 現存する都市郊外労働者住宅地ラマーズドルフ・ジードルンク(1934)に着目して	竹本 真
部位を構成する要素からみる20世紀以降の椅子デザイン	村越 由実

卒業設計〔設計A〕

◎城ヶ島の雨 北原白秋を通して自然と文化を空間体験する施設の提案	黒柳 和太
フードバンクの新しい形 食の需要と供給	鈴木 一輝
繋がるゲストハウス 日本の文化と通じて人々が交わる場の提案	宮崎 稜也
百年の記録に百年の種を蒔く 土間と縁を活用した古民家改修と地方移住者を受け入れるための提案	相澤 優衣
香る国際学生寮 匂いと空間が作る繋がり	宮澤 将生
◎カゾクとイエとトオリドマ 衣服と巡る小さな経済圏	浅利 正太
滞在那のものに価値を与える宿泊施設の提案	安保 英悟
連なる居場所 京急川崎駅から八丁駅間の高架下活用の提案	岡村 優月
◎その道の先に 農地再生を基軸とした土砂災害発生地域の復興計画	加藤 佑規
堤防型建築が引き起こすパラダイムシフト アグリツーリズムによって農業活動を再構築する堤防型田園都市の提案	金谷 優汰
都市化する衛星「月」	神前 憧哉
移住者向け生活スタイルの提案 宮古島市伊良部島における新しい集落形成	岸上 和輝
森林都市の創出 都市内緑地からの環境移流を利用したオフィス	小林 日菜子

★ 隔たりなき壁 徳島県美波町における防潮堤とその周辺の提案	坂本 理久
かみさまをたてる 北海道恵庭公園における自然空間の提案	佐藤 季也
まちのひろば 駅地下空間を利用した広場的建築の構想	佐藤 若菜
集、交、繋 ゲストハウスから始まるこれからの「観光」の在り方	清水 あやめ
◎みちくさあそび 密集市街地における住宅外部空間の提案	鈴木 杏奈
自然を巡る旅館 自然との繋がりを意識した配置計画	簾内 俊希
Train stops at the library 茨城県の玄関口となる駅再生の提案	竹澤 佳奈絵
輪を育む 富士宮市における集合住宅の提案	畑山 舜輝
日本文化を体験する宿	古内 友梨香
◎都心の洞窟 日本橋における都市の水辺空間の提案	三浦 亜也奈
◎いえがまちを彩り、まちがいえを彩る 郊外住宅地におけるまちと会話する暮らしと住空間の提案	三浦 悠介
◎浸透する水辺 水上交通の発展に伴う親水施設の提案	矢島 涼
移り住む人のための仮住まい 体験移住を兼ねた道の駅の提案	安田 慎彦
夢の第11レース 思い出が蘇る競馬博物館の提案	荒川 優哉
整備された網島 網島駅前広場開放計画	池原 亜門
自然に包まれた集合住宅 自然環境と住み方の変化を考えた集合住宅の提案	内田 智貴
新たな中国の風を	王 欣漢
ゆとりの間 堅苦しい生活から解き放たれる宿泊施設	加藤 俊輝
◎死シテ生ヲ為ス 建築のはじまりから富士噴火に伴う機能喪失、自然へ還るまで	古城 偉央理
海に見える宿 真鶴町の斜面を活用した宿泊施設	小林 真騎士
活気を取り戻す 秋田駅前に新たな交流と出会いのきっかけとなる場を	小武海 利恵
まちの結び目 福島県「夜ノ森」における居場所の再構築	佐藤 厚太
地方と都市をつなぐ 自分らしいライフスタイルとワークスタイルを見つけるヴェレッジの提案	佐野 巧
喧騒と暮らしの間で 歩車分離のまちづくりにおける駅前空間の提案	清水 駿甫
庭のある暮らし 存在を感じるコミュニティ	白石 楓

★ディプロマ賞 ◎優秀賞 ○卒業設計優秀作品発表会発表者

卒業設計【設計A】

私の子から地域の子どもへ 新たな気づきをもたらす子育て支援施設の提案	鈴木 道成
観せる道筋 イセザキモールを新しい芸劇場の通りとする提案	鈴野 佑季
桃園 再開発完成後の綱島で、衰退した伝統と向き合う	千葉 瑞樹
○うつろう想い 武蔵小山における新たな都市の更新のあり方	徳山 碩峰
○FOR ALL 多国籍の多様性を許容する都市の提案	トレミュロ 香炉栄雪
大人と子供 互いの世界を覗く	水村 翔
健康に寄り添う スポーツと生きるための公園建築	村田 幹治
○まちにほどける培いの場 3歳から12歳を対象とした学び舎の提案	山本 麻貴
市民とまちに開いた新たな市庁舎の提案	奈良 僚太
窓越しに、鎌を持つ少女が見えた。 生産緑地における住宅の在り方	豊泉 晴夏

卒業設計【設計B】

◎子どもの遊び場から見るマチグラーの表と裏 栄町市場における要素の共存と連担から読み取る道空間の構成	池原 なつ子
本に囲まれた路地空間 本に関するサービスの形態	日比野 次郎
水辺に咲く桜の名所 道との関係からみる水辺の桜並木の空間構成	大輪 一騎
○屋根で繋がる駅前空間 現代の木造建築内部にみられる架構表現	福田 紗弓

設計A: 建築物あるいは都市計画など、各自の独自の視点による設計。テーマを各自が自由に設定。

設計B: 都市計画・開発計画などについての計画書、または建築や都市に関する特定のテーマについての調査分析報告、および設計図面の作成。

★ディプロマ賞 ◎優秀賞 ○卒業設計優秀作品発表会発表者



学部設計課題 優秀作品

建築デザインⅢ

建築デザインⅡ

建築デザインⅠ

設計製図Ⅱ

設計製図Ⅰ

非常勤講師



鈴木 信弘
Nobuhiro SUZUKI

鈴木アトリエ一級建築士事務所



川辺 直哉
Naoya KAWABE

川辺直哉建築設計事務所



岡村 晶義
Akiyoshi OKAMURA

一級建築士事務所アトリエ鯨



井原 佳代
Kayo IHARA

ihrmk一級建築士事務所



木島 千嘉
Chika KIJIMA

木島千嘉建築設計事務所



佐々木 龍郎
Tatsuro SASAKI

佐々木設計事務所



アリソン 理恵
Rie ARISON

ara



八島 正年
Masatoshi YASHIMA

八島建築設計事務所



渡瀬 正記
Masanori WATASE

一級建築士事務所設計室

担当

曾我部 昌史（教授）、吉岡 寛之（助教）、岡村 晶義（非常勤講師、アトリエ鯨）、
佐々木 龍郎（非常勤講師、佐々木設計事務所）、渡瀬 正記（非常勤講師、設計室）

Masashi SOGABE (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant professor), Akiyoshi OKAMURA (Guest Lecturer, Atelier KUJIRA),
Tatsuro SASAKI (Guest Lecturer, Sasaki Architects & Associates), Masanori WATASE (Guest Lecturer, an office)

佐塚 将太 (M1、TA)、鈴木 啓生 (M1、TA)、加藤 佑規 (B4、SA)、坂本 理久 (B4、SA)
Shota SAZUKA (M1, Teaching Assistant), Yoshio SUZUKI (M1, Teaching Assistant),
Yuki KATO (B4, Student Assistant), Riku SAKAMOTO (B4, Student Assistant)

第一課題 50人が暮らし50人が泊まれる、この先の暮らしの場

地域に暮らす人たちの居場所(地域の居場所)と、観光などで訪れる人たちの拠点的な場(来訪者の拠点)の複合である。「地域の居場所」では、地域調査をもとに課題や需要を抽出した上で、どのような場をつくるかを各人が構想すること。この先の公民館のあるべき姿を考えることにもなるだろう。「来訪者の拠点」はいわば観光案内所だが、事例調査などをもとに今日的な役割を踏まえながら用途をまとめる必要がある。「地域の居場所」と「来訪者の拠点」が単に併設されているのではなく、相互補完的に計画することで、より多様で豊かな活動の受け皿となるよう検討し提案にまとめること。

敷地は、地下鉄駅、船着場、幹線道路に面する交通の結節点にある。それらとの関係を動線として解きながら、建物内のいろいろな場とのつながりかたを検討する必要がある。利用者、時間帯などにも意識をしながらまとめる必要がある。



※ 参考敷地
(敷地は関内エリアから自由に選定する)

【設計条件】

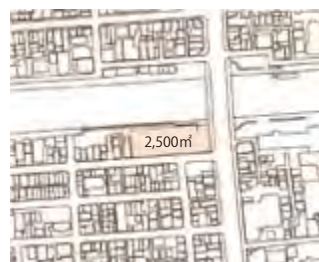
- ・敷地：神奈川県横浜市中区太田町5丁目
- ・用途地域：商業地域
- ・敷地面積：約1034.3㎡
- ・延床面積：4,500㎡～5,500㎡(地下を設ける場合は1層まで)
- ・道路斜線制限、高さ制限は厳守

第二課題 街のインフォメーションセンター

共に暮らすことで自分の好みにあった豊かな時間が生み出される、そういう住空間を提案すること。

この建物は、住まいの場所とこの場所での暮らしを特徴付けるサービスの場所とで構成され、住まいの場所は、賃貸住宅部分と宿泊施設部分にわけられる。共通のライフスタイルや必要とするサービスにより特徴付けられる 50 人の住まいがあり、その暮らしに関連した共用スペースやサービス系施設が特有の雰囲気を生み出し、その雰囲気が宿泊客や地域の人たちにアピールする。単に、賃貸住宅、宿泊施設、サービス関連施設とが固まっているのではなく、それぞれが有機的に関係を持つことで、何らかの特徴的な雰囲気を備えた居場所が生み出されるような計画を構想しなければならない。

敷地は関内地区の中央にある。歴史的背景や現状の周辺状況についての調査をもとに計画に反映させること。



【設計条件】

- ・敷地：東京都江東区清澄3丁目
- ・用途地域：準工業地域、商業地域
- ・敷地面積：2,500㎡
- ・延床面積：4,000㎡～6,000㎡(地上部分は3層以上とする)
- ・地下階を設け、地下鉄駅とつなぐこと

非常勤講師 経歴

岡村 晶義

Akiyoshi OKAMURA

1954年生まれ、早稲田大学産業技術専修学校（現早稲田大学芸術学校）卒業、teamzooアトリエモビル及び象設計集団を経て独立、アトリエ鯨を設立、東京理科大学非常勤講師及び法政大学兼任講師を経て現在に至る。日本建築学会作品選奨、土木学会デザイン賞など受賞

佐々木 龍郎

Tatsuro SASAKI

1964年生まれ、1987年東京立大学工学部建築学科卒業、1989年同大学院修士課程修了、工学修士、1992年同博士課程単位取得満期退学、1992年(株)デザインスタジオ建築設計室、1994年株式会社佐々木設計事務所入社、現在同代表取締役

渡瀬 正記

Masanori WATASE

1968年生まれ、1992年東京工業大学工学部建築学科卒業、1992年妹島和世建築設計事務所勤務、1993年～1997年青木淳建築計画事務所勤務、1998年一級建築士事務所設計室設立



グループごとで行われるエスキスチェック(第二課題:12月5日)



展示の様子(第二課題:1月7日)



8号館2階マップホールにて一般公開型でのプレゼンテーション模型とパネルの展示は約一週間行われ、様々な人の目に触れた(最終講評会:1月9日)

桶谷 彩乃

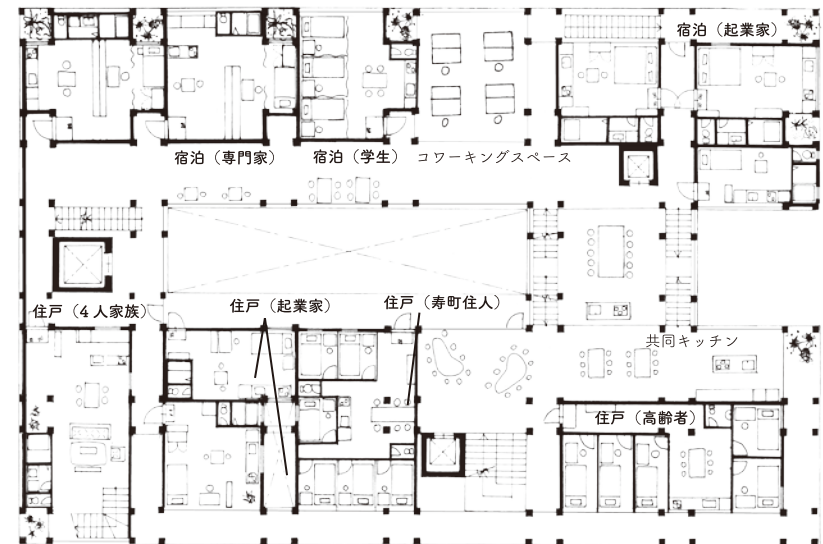
Ayano OKETANI

寿町は日本が迎える超高齢化社会の縮図とも言える町。

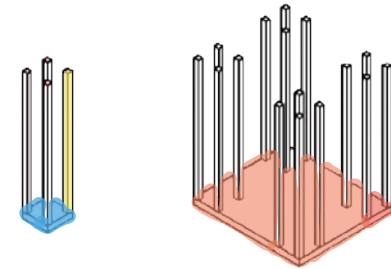
起業家がこの町に住み、現状を身近に体験することで問題を解決するきっかけを探していく。

同時に寿町住人が第二の人生をスタートするきっかけを得る場になる。

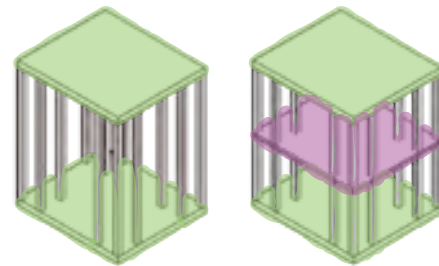
お互いを求め合う関係がさらに次のきっかけを生み、寿町の存在自体が日本の将来の高齢化社会の解決するきっかけになる。



ダブルグリッド



300mm 角の柱で一边 1500mm の正方形を作り、4つ配置する。この形を 1 ユニットとする。



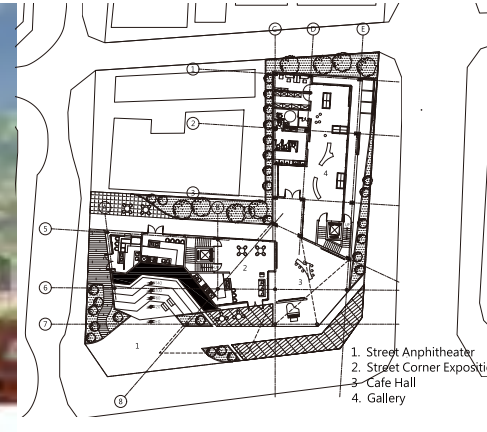
1 ユニットで400mm 厚のスラブを支えているのが主な構造になる。
そして400mm 厚のスラブの間に200mm 厚の床を入れ、構造体以外の床を作ることで、レベルを上下に操作する。
これにより、アイレベルをずらしプライベート空間を確保できる。

6F 平面図

きっかけを生む集合住宅
A housing complex that creates a chance

黄 莉芳

Huang Li Fang



ANALYSIS

Industries

Bashamichi is a district with Mixed Residential Commercial



CIRCULATION

Passenger Circulation

This area is full of historical buildings and restaurants gathering the crowd.

PROGRAMING

Business Zone

Street Cafeteria
Street Gallery
Art Classroom

ANALYSIS

Accumulation Point

The site which is chosen is between Passengers' and Residents' Accumulation Point.



CIRCULATION

Passenger Circulation

This area is full of historical buildings and restaurants gathering the crowd.

PROGRAMING

Hostel Zone

Public Kitchen
Communication Room
Rooms

STREET WITHIN THE HOUSING

Street within the housing

SECTION A-A'

Street = Semi-Private!

Street for Public
Street for Travelers and
Street for Residents



ISSUE

Scene of Bashamichi is Single

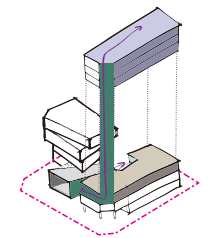
馬車道にはいろいろな産業がありますが、1階の飲食店は比較的行きやすい、他の産業は比較的高く閉鎖されたにありまので、着きにくく、見えません。



CONCEPT

Streets within the Housing

そして馬車道の景色をもっと見せたいです。複合住宅はいろいろな馬車道の活動を含みますので、街が複合住宅の中にも導入されている場合はいいと思います。街と住宅の境界線をぼかして、住宅中の街に暮らし、働き、料理し、コミュニケーションをとり、同時に、馬車道の活動の景色を人に見せます。



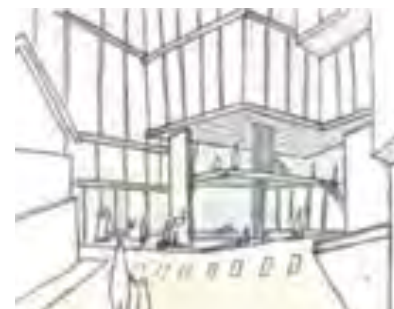
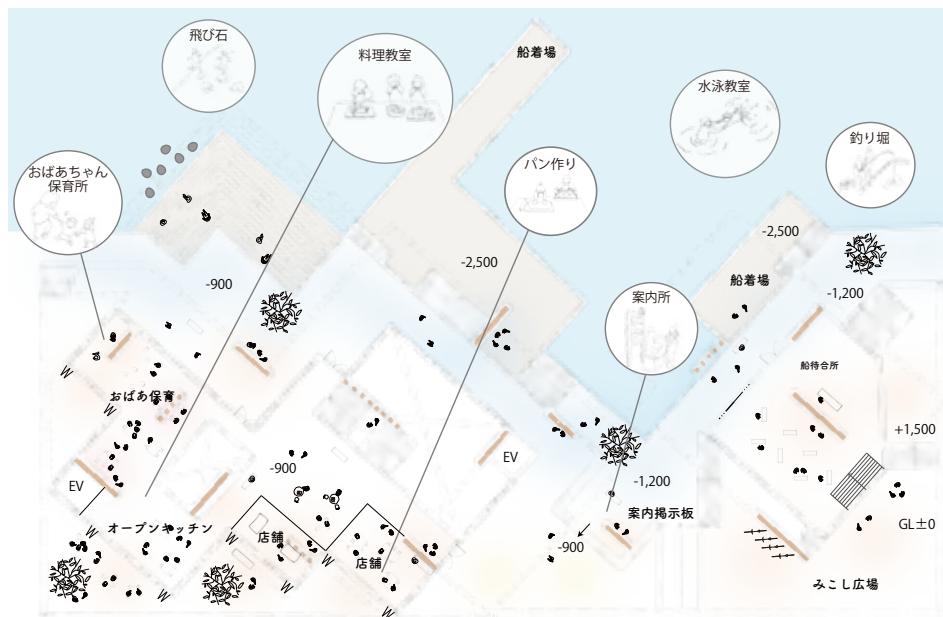
井口 翔太/城所 真緒/佐藤 滉起

Shota IGUCHI / Mao KIDOKORO / Koki SATO

テラコヤ ～皆が生徒、先生になれる地域情報センター～

TERAKOYA

町に溢れた歴史や人々の生活、職などを情報とみため、
あるときは先生、あるときは生徒として教え合うような、
様々な交流を促す情報センターを提案する。

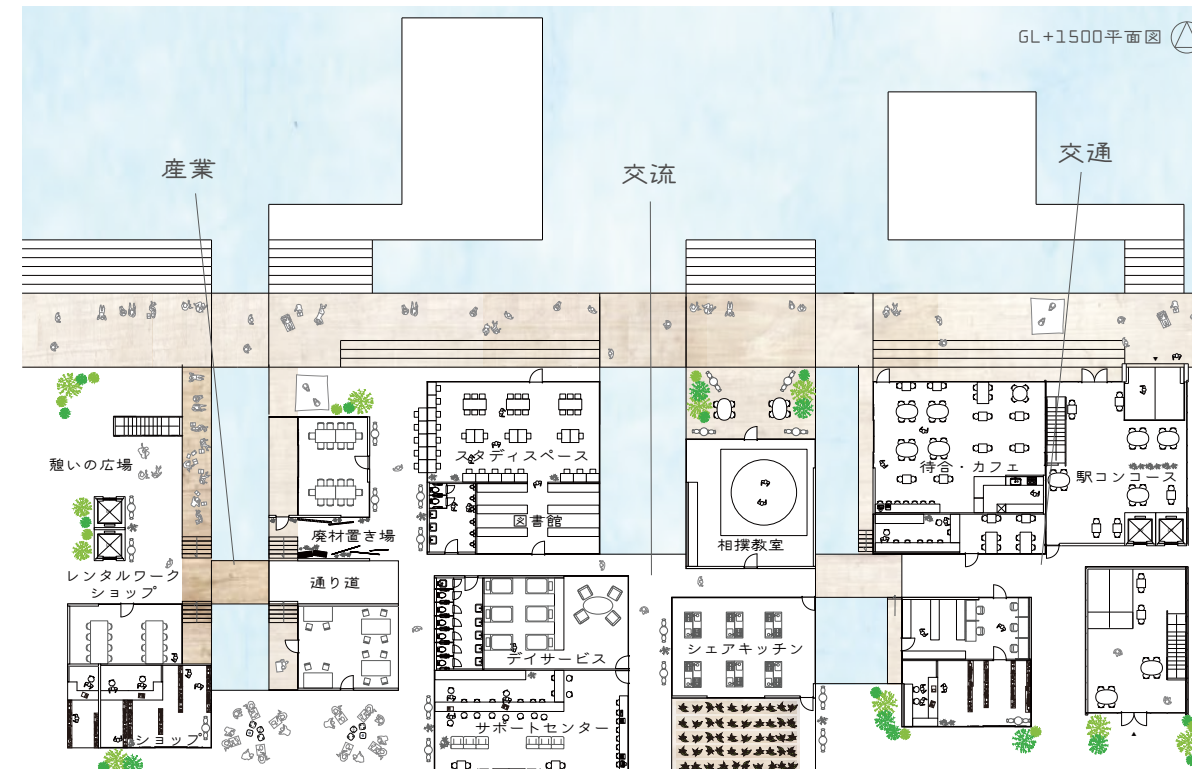


飯塚 ちひろ/黄 莉芳/鈴木 碧衣

Chihiro IIDUKA / Huang Li Fang / Aoi SUZUKI

垣間見える表裏

Get a brief glimpse of front and back



このインフォメーションセンターでは、まちの特徴でもある「表」と「裏」による構成と「交通」「交流」「産業」の要素を取り入れ、路地的空間を介すことにより、裏と表の空間が垣間見え多様なアクティビティを体験できる。多様で複合的な機能を持つことで情報文化の発信拠点となると同時に、観光地としても多くの人々を惹きつけ、水辺都市をサステナブルな都市として発展させていくことを目的とする。



担当

石田 敏明 (教授)、曾我部 昌史 (教授)、田野 耕平 (助手)、
木島 千嘉 (非常勤講師、木島千嘉建築設計事務所)、八島 正年 (非常勤講師、八島建築設計事務所)
*Toshiaki ISHIDA (Professor), Masashi SOGABE (Professor), Kohei TANO (Assistant),
Chika KIJIMA (Guest Lecturer, Kijima architect and associates), Masatoshi YASHIMA (Guest Lecturer, Yashima architect and associates)*

掛川 真乃子 (M1、TA)、塚本 裕士 (M1、TA)、古城 偉央理 (B4、SA)、山本 麻貴 (B4、SA)
*Manoko KAKEGAWA (M1, Teaching Assistant), Yuji TSUKAMOTO (M1, Teaching Assistant),
Iori KOJO (B4, Student Assistant), Maki YAMAMOTO (B4, Student Assistant)*

第一課題 六角橋ミニシアターコンプレックスと広場の設計

白楽駅前に広場と一体となった積層型のシネマコンプレックスの計画である。渋谷のシネマライズ閉館に代表されるようにミニシアターは徐々にその姿を消しつつあり、映画を鑑賞する環境や映画鑑賞前後の空間体験は均質化しつつある。本課題では気持ちの高まりや余韻を受け止める空間を計画すること。駅前の場所性や商店街との補完関係を考慮し、計画する建築が地域にとってどのような役割を果たすことができるのかを広場を含めて積極的に提案すること。

また周辺環境 (計画地北側には集合住宅がある) にも十分に配慮すること。地域の核となる建築のデザインを要求している。



- 【設計条件】
- ・敷地：神奈川県横浜市神奈川区 白楽124
 - ・用途地域：商業地域
 - ・敷地面積：約855㎡
 - ・延床面積：1,800㎡～2,200㎡ (地下を設ける場合は2層まで)
 - ・道路斜線制限、高さ制限は厳守

第二課題 地域に開かれた中学校

神奈川区の住宅地に隣接する中学校の計画である。地域支援施設を持つ中学校とし、生徒の見守りなど地域に開くことで生まれる地域住民と学生・教職員との関係性を積極的に取り入れた中学校計画とした。

敷地は横浜の特徴的地形である高低差のある谷戸地形の中に位置し、周囲は戸建住宅、公団住宅、分譲マンションなどが取り囲んでいる。傾斜面の地形を積極的に取り込みつつ周辺の状況に呼応した、場所性をよく読んだサイトプランニングと学生のアクティビティデザイン、環境デザインを心がけることが求められた。



- 【設計条件】
- ・敷地：神奈川県横浜市神奈川区 三ツ沢下町301
 - ・敷地面積：約24,186㎡
 - ・地域に解放するエリアや動線など運用を考慮すること
 - ・延床面積：9,000㎡～10,000㎡ (地上部分は3層以下とする)

非常勤講師 経歴

木島 千嘉
Chika KIJIMA

1966年生まれ、1989年早稲田大学理工学部建築学科卒業、1991年東京工業大学大学院修士課程修了、1991年(株)日建建設入社、1999年O.F.D.A、associates所属、2001年木島千嘉建築設計事務所設立

八島 正年
Masatoshi YASHIMA

1968年生まれ、1993年東京芸術大学美術学部建築科卒業、1995年東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了、1998年八島正年+高瀬夕子建築設計事務所共同設立、2002年八島建築設計事務所に改称

六角橋ミニシアターコンプレックスと広場の設計

酒井 優人

Yuto SAKAI



賑わいを生み出す山

The mountain is crowded with people



鈴木 碧衣

Aoi SUZUKI



WALL STREET

WALL STREET



地域に開かれた中学校

井口 翔太
Shota IGUCHI



捲り巡る学び舎
Turning skyline, visiting small space



地域に開かれた中学校

菅野 麻衣子
Maiko SUGANO



よりみち -地域と育つ学び舎-
Detour -School that growing with the local community-



高橋 菫
Ayame TAKAHASHI



はぐくむ中学校
Junior high school raises students

谷本 優斗
Yoto TANIMOTO



繋がりを生む場所
Whereabouts that creates connections

担当

山家 京子 (教授)、石田 敏明 (教授)、吉岡 寛之 (助教)、 田野 耕平 (助手)、
アリソン 理恵 (非常勤講師、ara)、川辺 直哉 (非常勤講師、川辺直哉建築設計事務所)

Kyoko YAMAGA (Professor), Toshiaki ISHIDA (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Kohei TANO (Assistant),
Rie ARISON (Guest Lecturer, ara), Naoya KAWABE (Guest Lecturer, NAOYA KAWABE ARCHITECTS)

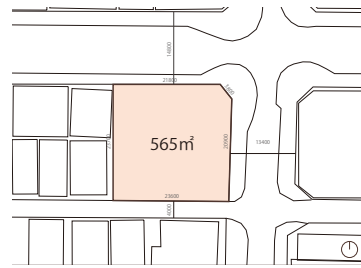
竹島 大地 (M2, TA)、永盛 菜 (M1, TA)、徳山 碩峰 (B4, SA)、岡村 優月 (B4, SA)
Daichi TAKESHIMA (M2, Teaching Assistant), Shiori NAGAMORI (M1, Teaching Assistant),
Hiromine TOKUYAMA (B4, Student Assistant), Yuzuki OKAMURA (B4, Student Assistant)

第一課題 関内に建つオフィス

横浜市関内地区にオフィスを計画せよ。

近年、まちに開く建築が話題となっています。住宅の一部を交流の場やまちかど図書室とする「住み開き」、集合住宅の共用施設を居住者だけでなく地域にも開放する、小学校に地域施設を併設する、など。これらはこれまでコミュニティ施設が担ってきた機能を、それ以外の施設が地域と部分的にシェアすることで、自らの機能をより充実させるものです。コミュニティ活性化を図るとともに、それぞれの生活の豊かさにもつながる方向性と言えます。

一方、オフィスはセキュリティの観点から、入り口にゲートを設けるなど、どちらかというと閉じていく傾向にあります。しかし、オフィスもまた開くことによって、イノベーションを起こすことが期待されています。ここでは、空間的にもプログラムのにも、社会、地域に対して開かれたオフィスの提案を求めます。



【設計条件】

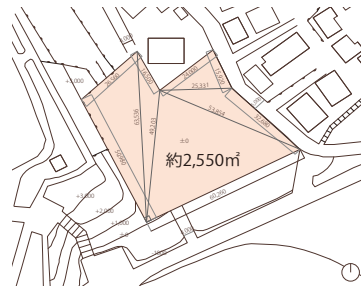
- ・敷地：神奈川県横浜市中区 住吉町3丁目
- ・敷地面積：約565㎡
- ・建ぺい率：80%
- ・容積率：700%

第二課題 公園の一角に建つ地域の図書館

岸根公園に面する敷地に地域図書館を計画せよ。

図書館は「知識資源の管理と新しい知識創造の場」である。インターネットの普及を背景に本との関わりが変わりつつある現代において、書籍の保管・管理と閲覧という図書館の基本的機能を満たしつつ、図書館の今後の在り方について考えること。

一方、地域図書館は中央図書館等大規模図書館を縮小した施設ではなく、コミュニティ施設としての機能が求められている。コミュニティ施設は、住民が自発的な意思により行う地域独自の活動を支援するとともに、住民同士の交流を促進する場である。周辺の都市空間構成を読みとり、岸根公園との空間的つながりを意識し、地域の人たちが本に親しみながら、地域交流を図る「地域の図書館」を計画しなさい。



【設計条件】

- ・敷地：神奈川県横浜市 港北区岸根町725
- ・敷地面積：約2,550㎡
- ・建ぺい率：60%
- ・容積率：100%

非常勤講師 経歴

アリソン 理恵

Rie ARISON

1982年生まれ、2005年東京工業大学工学部建築学科卒業、2009年NMBW(オーストラリア)にてインターンシップ、2011年東京工業大学大学院博士課程単位取得退学、2011年～2015年一級建築士事務所ルートエー勤務、2014年～2015年アトリエ・アンド・アイ坂本一成研究室勤務、2015年一級建築士事務所teco設立、2018年teco株式会社に改組、2019年ara設立

川辺 直哉

Naoya KAWABE

1970年神奈川県生まれ、1994年東京理科大学工学部建築学科卒業、1996年東京芸術大学大学院修士課程修了、1997～2001年、石田敏明建築設計事務所、2002年川辺直哉建築設計事務所設立、現在東京理科大学、東京電機大学にて非常勤講師

久保田 唯

Yui KUBOTA

コントラスト

Contrast



町山 李桜

Rio MACHIYAMA

積み重なる本

Stack of books



石井 瞭亮

Ryosuke ISHII

色箱

Color Box



兼田 聖人

Masato KANEDA

柱に添う

Follow a pillar



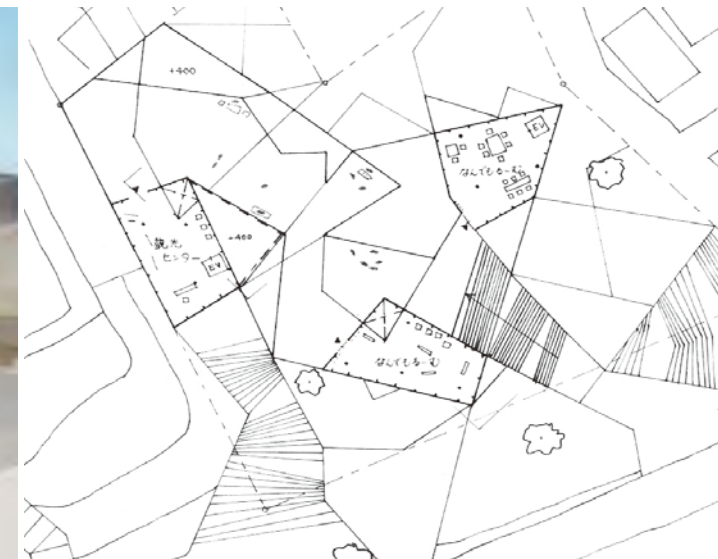
鈴木 瑚生
Kou SUZUKI

道を介して
Through the road



野中 美奈
Mina NONAKA

葉の連なり、重なり
Series of Leaves and Overlapping



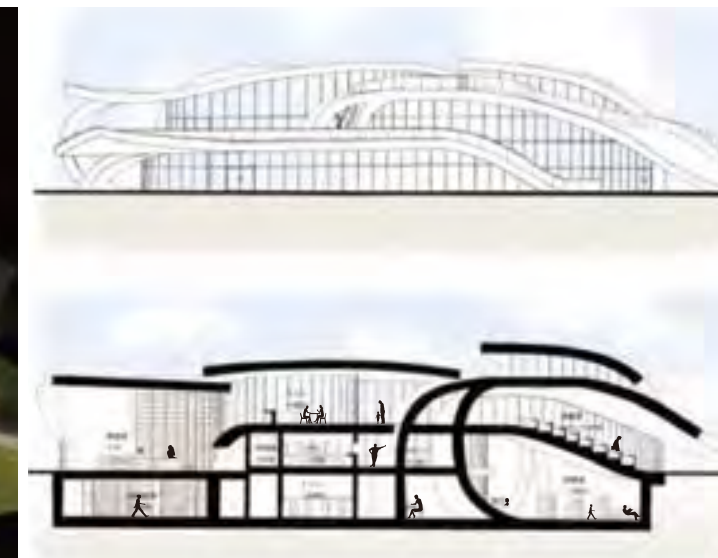
伊東 珠見
Tamami ITO

OPEN RING
Open Ring



穂屋下 直輝
Naoki HOYASHITA

重なり合う
Overlapping



担当

中井 邦夫（教授）、吉岡 寛之（助教）、
上野 正也（助教）、須崎 文代（助教）、
鈴木 信弘（非常勤講師、鈴木アトリエ）、
井原 佳代（非常勤講師、ihrmk一級建築士事務所）

Kunio NAKAI (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor),
Masaya UENO (Assistant Professor), Fumiyo SUZAKI (Assistant Professor),
Nobuhiro SUZUKI (Guest Lecturer, Suzuki Atelier),
Kayo IHARA (Guest Lecturer, ihrmk Architects)

飯田 康二郎 (M1, TA)、長谷川 舞 (M1, TA)、渡辺 悠介 (M1, TA)、
向咲重 (M1, TA)、池原 なつ子 (B4, SA)、福田 紗弓 (B4, SA)

Kojiro IIDA (M1, Teaching Assistant), Mai HASEGAWA (M1, Teaching Assistant),
Yusuke WATANABE (M1, Teaching Assistant), Sakie MUKAI (M1, Teaching Assistant),
Natsuko IKEHARA (B4, Student Assistant), Sayumi FUKUDA (B4, Student Assistant)

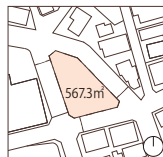
授業内容

- | | |
|--|---|
| 1) トレース課題Ⅰ
「萩塚の長屋」(設計: 藤野 高志)
(鉛筆書き 1/100) | 3) 第一課題 (下記参照)
「神奈川大学 6 号館」(設計: RIA) |
| 2) 模型製作課題
「萩塚の長屋」(模型 1/100) | 5) 第二課題 (下記参照) |

第一課題 地域とつながる集合住宅

住宅地内の敷地に、様々な世代の居住者が、ともに住む集合住宅を設計する。敷地は、四周が道路に面する三角形の区画であり、公園のそばに立地し、商店街にも近い。地域との関連性を意識して、敷地周辺の条件を最大限に活かしながら、この場所に住む様々なタイプの世帯それぞれの生活像を具体的にイメージすると同時に、そうした個性の異なる複数の居住者が住む集合住宅ならではの楽しい提案・空間を求める。

【設計条件】
敷地: 神奈川県西神奈川3-9-16
地域: 市街化区域、第一種住居地域 防火地域: 準防火地域
構造形式: 鉄筋コンクリート・壁式構造
敷地面積: 567.3㎡ 建ぺい率: 70% 容積率: 200%



第二課題 神大ミュージアム

神奈川県18号館および21号館の敷地に、神奈川県が所蔵する収蔵品(文献史料、記録史料など)を企画、常設展示する展示室やインフォメーション・センターを含むミュージアムを設計する。敷地は、大学と住宅地との境界部に位置する緩やかな傾斜をもった角地であり、大学キャンパス・マスタープランにおいて、16号館と共に大学の「ゲート・ゾーン」と位置づけられており、大学の対外的な顔となる空間となることが期待されている。多様な活動を含み込む可能性を最大限引き出す提案を求める。

【設計条件】
敷地: 神奈川県六角橋3丁目
地域: 第二種中高層住居専用地域 防火地域: 準防火地域
構造形式: 鉄筋コンクリート・ラーメン構造
敷地面積: 1333.8㎡ 建ぺい率: 70% (法定は60%)
容積率: 150%



地域とつながる集合住宅

鎌田 芽萌

Kayame KAMATA

つなぐ
Link



久保田 唯

Yui KUBOTA

よりどころ
A rest station



宮島 里帆

Riho MIYAJIMA

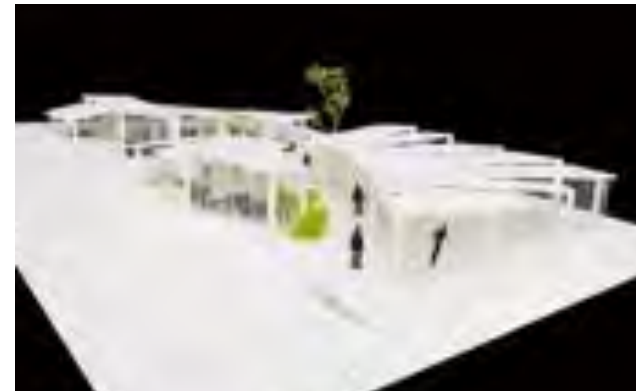
本箱
Book box



西村 和将

Kazumasa NISHIMURA

軌跡
The trajectory



野中 美奈

Mina NONAKA

さんぼみち
The path



穂屋下 直輝

Naoki HOYASHITA

導き
Lead



町山 李桜

Rio MACHIYAMA

交差する回廊
Crossing corridor



毛利 菜稜

Nazumi MOURI

逕路
The track



山内 悠斗

Yuto YAMAUCHI

MOVE AROUND
Move around



担当

中井 邦夫 (教授)、上野 正也 (助教)、
須崎 文代 (助教)、田野 耕平 (助手)、
鈴木 信弘 (非常勤講師、鈴木アトリエ)、
井原 佳代 (非常勤講師、ihrmk一級建築士事務所)

Kunio NAKAI (Professor), Masaya UENO (Assistant professor),
Fumiyo SUZAKI (Assistant professor), Kohei TANO (Assistant),
Nobuhiro SUZUKI (Guest Lecturer, Suzuki Atelier),
Kayo IHARA (Guest Lecturer, ihrmk Architects)

丹羽 貴之 (M2, TA)、飯田 康二郎 (M1, TA)、長谷川 舞 (M1, TA)、
渡辺 悠介 (M1, TA)、籾内 俊希 (B4, SA)、福田 紗弓 (B4, SA)

Takayuki NIWA (M2, Teaching Assistant), Kojiro IIDA (M1, Teaching Assistant),
Mai HASEGAWA (M1, Teaching Assistant),
Yusuke WATANABE (M1, Teaching Assistant), Toshiki SUNOUCHI (B4, Student Assistant),
Sayumi FUKUDA (B4, Student Assistant)

授業内容

- | | |
|---|--|
| 1) トレース課題 I
「水道道の家」(設計: 鈴木アトリエ)
意匠図 (鉛筆描き、1/50、1/100) | 5) ウォーミングアップトレース
・カニングハム邸
・白の家 (設計: 篠原 一男) |
| 2) 模型製作課題 I
「水道道の家」(軸組模型 1/50) | ・ひな壇基礎の家 (設計: ihrmk) |
| 3) 空間演習
「光のスタディ」(模型 1/30) | ・周辺環境の設計
・階段のスタディ
・ヒアシンスハウス
(設計: 立原 道造) |
| 4) 第一課題
「セカンドハウス」(下記参照) | ・塔の家 (設計: 東 孝光) |
| | 6) 春休み課題
・浜田山の家 (軸組模型 1/50) |

第一課題 光・風・自然を感じるセカンドハウス

河口湖に浮かぶ「鶴の島」に、セカンドハウスを設計してください。既成の考え方やスタイルにとらわれない、この島の環境を活かした、日常生活から離れたセカンドハウスならではの、自由な発想の空間による新鮮なライフスタイルの提案を期待します。

【設計条件】

- ・原則として木造とし、柱・梁の配置など、架構を具体的に表現すること。
- ・延床面積は、65㎡前後とし、外部空間は自由に設定してください。
- ・配置は島全体から好きな場所を選んでください。



【敷地情報】

計画敷地は、河口湖に浮かぶ、木々に覆われた高低差が激しい無人島「鶴の島」。
面積: 0.028km²、標高: 859m

非常勤講師 経歴

鈴木 信弘

Nobuhiro SUZUKI

1963年生まれ、1986年神奈川大学卒、1988年神奈川大学大学院修士課程修了、1988年-1996年東京工業大学工学部建築学科助手、1994年鈴木アトリエ一級建築士事務所開設

-代表作-

神奈川大学29号館 JAPAN WOOD DESIGN AWARD 2015ウッドデザイン賞 受賞

井原 佳代

Kayo IHARA

1979年東京都生まれ、2002年神奈川大学工学部建築学科卒、2004年キングストン大学大学院美術・デザイン・建築学部卒、2009年-2016年シーラカンスアンドアソシエイツ、2016年ihrmk参加

-代表作-

ひな壇基礎の家 Fantastic Kitchen Competition グランプリ

久世 文

Aya KUSE

雨も愉しむ地中の家

Rain Viewing Chamber



江上 直希

Naaki EGAMI

まつぼっくりの家

House of a pine cone



小野 美咲

Misaki ONO

自然と共に在る

Being with nature



吉濱 智哉

Tomoya YOSHIHAMA

バラエティハウス

Variety house



五十嵐 希美

Nozomi IGARASHI

風林荘

Wind forest house



影山 紗希

Saki KAGEYAMA

ひらめき

A flash



杉江 聖哉

Seiya SUGIE

島と流れる家

House floating with the island



野口 亜美

Ami NOGUCHI

木の中を通り抜けながら広がるライフスペース

Vast life space while walking through trees



建築デザインⅢ

二つの複合建築の課題である。いずれもプログラムを組み立てるところから手がけ、複雑な構成の検討をし、構造や動線を立体的に解く必要がある。今年度から課題の順番を入れ替え、学部での最終課題となる第二課題を3人一組のグループ課題とした。検討のレンジを広げながらアイデアを発展させることにもなり、結果として高く評価できる提案が揃った。

第一課題では、各人がこの先の暮らし方の多様化に対して意識を開き、新たな建築空間の構想へとつなげる必要がある。昨年度に続き各人が敷地を選定することとし、地域性を調査分析した上でプログラムを組み立てた。桶谷さんは周辺との関わりの場をダブルグリッドによる構成の中につくりだし、黄さんは綿密な周辺の分析を重ねた上で丁寧に提案に反映させた。

第二課題では、地下鉄駅出入口、遊歩道のある水路等との関わり、展示、待合所など多様な場の関係のつけ方が鍵となる。井口・城所・佐藤グループは、45度に振った平面構成を採用することで、川との関わりを強くすることに成功した。飯塚・黄・鈴木グループは路地的な場と水路を敷地内に取り込み、ある種の親密感を感じさせられる空間を得た。最終回の一回前となる12月最後の授業日に一般的な図面などの提出を受け講評し、年明けとなる最終回に8号館2階マップホールにて一般公開型でのプレゼンテーションを行った。一週間程度の展示期間を設け多くの人たちの目に触れられるようにした。(曾我部 昌史)

建築デザインⅡ

建築デザインⅡは第一課題の白楽駅前にある商店街やまちとのつながりのあるポケットパークを持った商業施設と第二課題の比較的豊かな住宅地に隣接する中学校の設計である。立地や用途、規模が全く異なる課題ではあるが、共通していることは斜面地と建築との応答である。斜面を自然、建築を人工物と言い換えることもでき、普遍的な建築的な命題である。

「六角橋ミニシアターコンプレックスと広場の設計」は時間と人の流れ、まちの密度と周辺建物とのボリューム、閉じた箱とまちへのひらき方がテーマといえよう。多くの案は閉じたボリュームの配列と

アプローチと街への開き方に様々な提案が見られたが、場所を共有して映画を見るという楽しみ方への建築的提案が見られなかったのは残念である。

「地域に開かれた中学校」は住宅地に隣接した、地形にかなりの高低差がある敷地に校舎の配置計画と地域への開き方が問われた。上位に選ばれた作品は学年ごとの建築的まとまりと学生の居場所、アクティビティとスケール、外構デザインなど建築の部分と全体の関係がレベル差を利用して計画的にも上手く提案された案であった。

最終日のリ・プレゼンテーションはまとめ方とプレゼンへの意識が見られ、教育的成果があった。(石田 敏明)

建築デザインⅠ

本科目は、小・中規模施設の設計課題を通して、建築を成立させる計画的な基礎を学ぶとともに、自らが設定したテーマを建築化する方法の修得を目標としている。本年度は2つの課題でいずれも建築のプログラム及び空間構成において、周辺環境との関わりを意識したデザインを促している。

「第Ⅰ課題：関内に建つオフィス」は関内に8層程度の本社ビルを計画する課題である。久保田さんは折り曲げたスラブに柱を通し、兼田さんは壁柱を手掛かりに、石井さんはボックスをアクセントとし、町山さんは積み重ねた本をイメージして構成した。いずれもボリューム、柱、スラブの操作により明快な空間構成を行った秀作で、ここから機能の落とし込み、すなわち平面計画をどのように展開するかが今後の課題である。

「第Ⅱ課題：公園に面して建つ地域図書館」では、図書館の建築計画を丁寧に解きながらかなりのヴォリュームを占める開架図書室をどう扱うかが鍵となる。伊東さんは中庭を囲み環状に、鈴木さんは道を介してボリュームを配置し、穂屋下さんは3次元で構想している。野中さんはボリュームを調整しながら配置するアプローチで、力量を感じさせる秀作である。(山家 京子)

設計製図Ⅱ

本授業は、建築学科生全員を対象とする最後の製図系必修科目であり、主にRC造中規模建築を課題としている。授業はトレース課題と模型課題、そして2つの設計課題から構成される。設計課題

では、150名余りの履修生を6ユニットに分けて指導し、中間と最終で全体講評会を行っている。前年までと比較した2019年度の履修状況の傾向としては、まず前年度に比べ「秀」が大幅に減り、その分「優」と「可」が増えた一方、「良」と不合格者数はあまり変わっていない。つまり「良」の上下の層が増えたという「微妙な二極化」にも見えるが、「優」が伸び悩んで「秀」に届かなかった原因は、トレース課題と模型課題の成績不振があると思われる。設計課題に限ってみれば本誌に紹介されている優秀作品群を含め、例年以上に優れた作品が多かった印象である。

また、第一設計課題(集合住宅)でBを取った学生が、第二設計課題でCを取る学生も少なからずおり(伸び悩みか時間不足か…)さらに第一設計課題がC評価の学生のほとんどは、第二設計課題でもC以下であった。今後はこうした学生たちがやる気を持続できるようにフォローすることも必要と感じる。(中井 邦夫)

設計製図Ⅰ

本授業は、建築学科生全員対象の製図系必修科目であり、主に木造小規模建築を課題としている。授業では、名作住宅などのトレース課題、木造住宅の軸組模型制作、そしてダンボール箱を使った空間演習と1つの設計課題から構成される。空間演習は、それまで2つ行っていた設計課題を1つに減らし、光や空間の操作と効果を実感させる目的で、2018年度から加えたものである。空間演習と設計課題では、150名余りの履修生を6ユニットに分けて指導し、中間と最終で全体講評会を行っている。

前年までと比較した2019年度の履修状況の傾向としては、まず合格者の平均点が例年よりも約4ポイント上がり、不合格率もここ数年継続して減少傾向にある。課題内容が異なる年もあるので一概には言えないが、全体的な成績は改善傾向にあるといえる。最終課題である設計課題(セカンドハウス)では、本誌に紹介されている優秀作品群を含め、例年に比べてバラエティに富んだ秀作が多かった。(中井 邦夫)

NEWS

KU+LEMON HOME Design Forum VI

課外活動

学外受賞

留学生レポート

課題：湘南の生活スタイルを喚起する「やわらかいいえ」

最終プレゼンテーション

- 日 時：令和元年6月29日 13:30～
- 場 所：神奈川大学8号館4階 製図室
- 審査員：八島 正年 (八島建築設計事務所代表)
阿部 健太郎 (レモンホーム(株)常務取締役)
八幡 一郎 (レモンホーム(株)設計部部长)
神奈川大学建築デザインコース教授
- オブザーバー：重村 力 (神奈川大学工学研究所客員教授)

- 選考対象者 21名
- 表彰 最優秀賞2作品 中村 圭那 「マイペース時代のマイホーム」
三浦 悠介 「結んで開いて」
- 優秀賞4作品 早川 史洋 「創造性を喚起させる家」
水上 翔太 「無駄のある家」
米山 昂佑 「波間に住もう」
永盛 栞 「潮風をまとう」

「マイペース時代のマイホーム-ベランダのいえ-」 中村 圭那



「結んで開いて-変化していくまちにおけるいえの在り方の提案-」 三浦 悠介

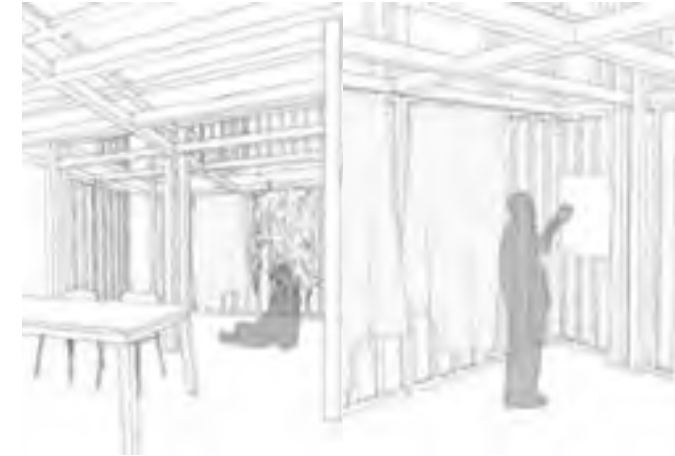


総評

第6回目のテーマは「湘南の生活を喚起する-やわらかいいえ」でした。応募総数は 21 作品あり、入賞作品はどれもテーマに真正面から取り組んだ力作揃いで十分に審査を楽しむことができました。「やわらかいいえ」の解釈はライフスタイルや家族構成の変化に柔軟に対応できる構法と空間構成の提案や、住人同士のコミュニケーションや近隣のコミュニティへの配慮から、内外にやわらかく開いた平面計画が

特徴的でした。具体的には境界を強く示す塀の解体であったり、内部空間がほぼワンルームの構成と空間分節の方法に見受けられます。ただ、角地に対する建物ボリュームや配置計画(余地の残し方)への提案が弱かったように思いました。全般的にはデザインコンセプトを分かり易く伝えるダイアグラムやパース、模型表現などプレゼンテーションは評価できます。(石田 敏明)

「創造性を喚起させる家」 早川 史洋



「無駄のある家」 水上 翔太



「波間に住もう」 米山 昂佑



「潮風をまとう-家族の変化に対応するみかんの木と共に育つ家-」 永盛 栞



テクノサークル 建築をつくる会

活動の目的

建築デザイン教育において、設計演習課題では建築を設計し組み立てるが、実際の建築物をつくる機会は少ない。そこで、テクノサークル「建築をつくる会 つくけん」は、学校の授業だけでは経験できないリアルな建築を自分たちで構成し、つくり、体験することが主な目的である。その過程を経験し、建築に対して知見を深めるだけでなく、実社会の建築設計にも求められる共同制作における必要な能力の向上も期待する。



具体的な活動

建築を構成する様々な空間を分類すると内部空間、外部空間、それらを繋ぐ緩衝空間に分けられる。緩衝空間は内部や外部空間とは違い、周辺の特徴・配置・利用者などの要因が変化すると空間の持つ意味も変化すると考える。

その緩衝空間がもたらす人の活動の影響とそれぞれの関係性の検証・観察を目的とし、竹と麻布を用いて一時的な空間を制作した。



第31回 JIA 神奈川建築 WEEK かながわ建築祭 2020 大学卒業設計コンクール

隔たりなき壁 - 徳島県美波町における防潮堤とその周辺の提案 -
坂本 理久 [金賞]



「第31回 JIA 神奈川建築 WEEK かながわ建築祭 2020 大学卒業設計コンクール」において、坂本理久さん(当時曾我部研究室学部4年)が金賞を受賞しました。作品の詳細は54~55ページに記載されています。

建築新人戦 2019

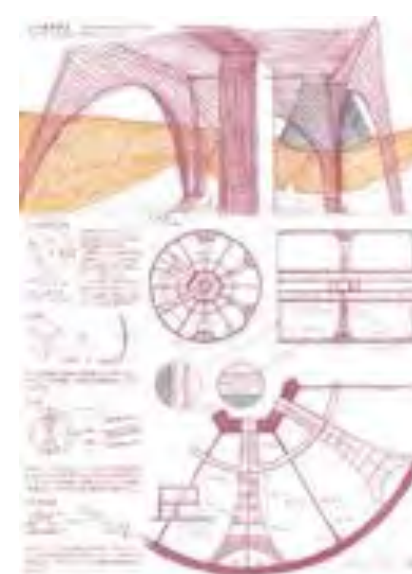
捲り巡る学び舎
井口 翔太 [100選]



「建築新人戦 2019」において、井口翔太さん(当時学部3年)が100選に入選されました。

第6回宇宙建築賞

人工農業惑星
-an Artificial Agriculture Planet-
古城 偉央理 [入賞]



「第6回宇宙建築賞」において、古城偉央理さん(当時石田研究室学部4年)が入賞を受賞しました。

第5回学生建築デザインコンペ未来のとびらコンテスト2019

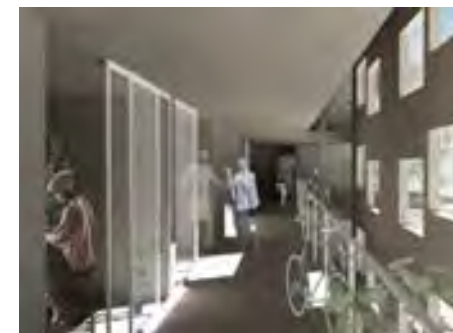
懐古協奏曲
-都市に潜む音を拾う家-
齊藤 健太、竹島 大地、谷本 優斗 [優秀賞]



「第5回学生建築デザインコンペ未来のとびらコンテスト2019」において、齊藤健太さん(当時石田研究室修士1年)、竹島大地さん(当時山家研究室修士2年)、谷本優斗さん(当時曾我部研究室学部3年)が優秀賞を受賞しました。

2019 年度支部共通事業日本建築学会設計競技「ダンチを再考する」

ダンチサイクルエコロジー -環境やヒト・モノの循環から、建物の循環へ-
齊藤 健太、鈴木 啓生、向 咲重、渡辺 悠介 [関東支部入選]



2019 年度支部共通事業日本建築学会設計競技「ダンチを再考する」において、齊藤健太さん(当時石田研究室修士1年)、鈴木啓生さん(当時曾我部研究室修士1年)、向咲重さん(当期中井研究室修士1年)、渡辺悠介さん(当期中井研究室修士1年)が関東支部に入選しました。

Luca Reinhardt

カールスルーエ応用科学大学より
中井研究室



I didn't know so much about Japan before I came here, so I was very excited and curious about exploring Japan and its culture. Now I must say I really fell in love with it. The People, the food, the izakayas and the very nice public transport.

I was really lucky to choose Nakai Laboratory. I made a lot of good friends, that I hope I will meet again soon. They showed me how they worked on projects and brought me to museums and good restaurants in Tokyo and Yokohama. They also taught me to cook nabe, which I now like to cook also in my homecountry.

Nakai Lab was the right choice, because it gave me the possibility to join the ongoing Projects in the Lab, but it also allowed me to travel around Japan and explore cities by myself. Nakai Lab gave me good advice on what places and things I should visit when travelling around.

One time I also went to a Labos building site in Uozo with a group of international students and the project leader Takayuki San. We helped to demolish a house. It was really fun and interesting, because Uozu was a very rural city which I wouldn't have normally gone to as a Tourist and so it was great to see a different side of Japan.

I am sure that i will come back to Japan as soon as I can to see my friends and enjoy more of this wonderful culture. I will never forget this wonderful time I had at Kanagawa University in Nakai Lab.



Maria Goppel

カールスルーエ応用科学大学より
中井研究室



My exchange year in Japan started in September 2018. I came because I wanted to learn about Japan, Japanese architecture and its culture.

I joined Nakai lab and I do not regret, because everyone in the lab was really kind and friendly and they always were willing to help. My home university doesn't have this concept of laboratories and I think it is really interesting and beneficial to work in real projects as they do here in Japan. At the time, there were two projects on going at Sogabe's laboratory. Unfortunately, I didn't have the opportunity to participate on them as much as I'd like, because I don't speak Japanese and that was a big obstacle. Even though there were some subjects in English, I feel that I would have learnt more if I could speak Japanese, because I wasn't able to follow some lessons and meetings. However, the environment in the laboratory was always perfect to work, so I spent a lot of time there reading about Japanese architecture and doing other projects by my own. I also made really good friends there!

I believe this whole experience has been really beneficial for my future career and myself, it has changed the way I see architecture and grown my knowledge.



Telmo Benito Del Valle

バスク大学より
中井研究室



I came to Yokohama for my exchange year in September 2019. When I thought about doing a year at another university, the first country that came to mind was Japan. I chose Japan because I wanted to know a new culture, learn a totally different language and because I was very interested in Japanese traditional and modern architecture (the architects I follow the most are Japanese).

When I got here the most different thing to my university was the laboratory concept and the way of working. I got into Nakai's laboratory and it was very interesting to see how they work on various real projects and how they share group ideas in weekly meetings with the professor. Although initially it was difficult to communicate with the Japanese students they always helped us as much as possible and wanted us to have a good experience in Japan. We could join a project trip to Toyama and we had several food parties with the Japanese students. It was a lot of fun!

In overall, it has been an amazing year and choosing Japan for my exchange program was the best decision I could take. I think that what I learnt from my teachers, my classmates and also from living here will be very useful in my future both professionally and personally. I have been able to meet many incredible people in Japan and I hope we shall meet again some day.



Maddi Viegas

バスク大学より
中井研究室



I came to Japan in September 2019 for my exchange program. I chose this country with the will to learn about Japanese architecture and be able to apply some ideas of it in my own projects. I also wanted to learn the culture and lifestyle in such a crowded country.

The first struggle at the university was to choose a laboratory, a professor who would be your supervisor during a hole year, without even knowing him or his work. I chose Nakai's labo and I'm very happy with that decision. Although the language was a difficulty, everyone has always been very helpful, both students and Nakai.

The laboratory system is very different to the way I am used to work, and it was hard to understand (I don't even understand it good nowadays) but from the beginning it seemed to be very interesting to work on a real project and sharing opinions and work with everybody in the labo. All the exchange students in the labo joined a project in Toyama, to where we went to help on the building's demolition. It was really fun! It would have been great to know some Japanese to be able to take part in more things, but it has still been a good year in which I've learnt a lot, not only in labo but also in museums and galleries, and make many friends with whom I hope keeping in contact back in my country.



Celia Gleyse

国立モンペリエ高等建築学校より
曾我部・吉岡研究室



My exchange year in Japan started in September 2019. I decided to study in Kanagawa University because Japanese architecture is so fascinating and unique. I think every student should be interested in other ways of doing the architecture and that's why I took the opportunity of coming here to learn more about the culture. I was also interested in wood construction methods, and I saw in this exchange the opportunity to continue my research on my thesis, Japan is actually for me the ideal destination.

I joined Sogabe's laboratory and I was warmly welcomed by the other students. They helped me through the semester with the language barrier and different projects. Japanese was difficult for me at first but they helped me when I needed. The concept of laboratory in very different from France, everyone is working together and the method of conception and realization is also different. Then, the approach of modeling is incredible here, the models are clean with a sensitive touch and we can really understand the meaning of the project.

Even with the complicated situation that started before the second semester, I was still in touch with the laboratory and the professor. I'm so grateful to all the students in my laboratory but also to the other laboratories with whom I have discussed and exchanged a lot. I would like to thank both Kanagawa University and ENSAM for letting me do this wonderful exchange.

This experience will be a great enrichment for my futur job as an architect.



Huang Li Fang

国立台湾科技大学より
山家・上野研究室



Ever since I began studying architecture, I had been fascinated with Japan for both the innovative, contemporary design and the effort in conserving traditional architecture heritages. It became my goal to study in Japan when I was a sophomore. Therefore, I was really excited when I application for the exchange program to Kanagawa University was accepted in the second semester of 2019.

I had the opportunity to participate in the urban planning project of inner harbor in the Yamaga Lab, Not only did I learn more about the development process of the inner harbor area, I also made deeper connection with the port city of Yokohama. Professor Yamaga was a really passionate and patient instructor who always guided students to dive deeper into the design topic. The discussion with the professor in the studio always had a conformable atmosphere. I really appreciate that I was able to learn and exchange opinions with others.

Though the time during the exchange program had always been busy, it was also a very fulfilling experience. This program will certainly inspire me and lead me further in my architecture career.



中村 圭那

Keina NAKAMURA
ケルン工科大学へ
中井研究室修士2年



ドイツ西部のライン川流域に位置する都市ケルンにある Technische Hochschule Köln での 7ヶ月間の留学を終了しました。ヨーロッパの建築を実際に見てみたいとの思いと、海外の建築学生がどのように建築を学んでいるのかに興味を持ち、留学を決めました。

ケルンの中心部には、世界遺産のケルン大聖堂があります。また、クリスマスマーケットやカーニバルと呼ばれるイベントも有名です。そのためか、街にはたくさんの観光客や留学生がいて、英語が通じる場面も多く、国際都市だと感じました。

大学の授業は、基本的にドイツ語でしたが、英語でのフォローアップがあり、自動車デザインを学ぶ学生と学部を超えて共同で、スマートモビリティシティのプロジェクトに取り組みました。都市の問題点やアイデアを形にしていく方法が、全く異なっていて、驚きの連続でした。

また、ヨーロッパの他の国からの留学生も受け入れており、留学生同士の文化交流も楽しかったです。長期休みの際に、建築を見に行き、実際に空間を体験できたことは、何ものにも代え難い大きな収穫でした。

当初、一年ほどの留学を予定していましたが、新型コロナウイルスの流行の為、突然中止になってしまいました。悔やまれることも多々ありますが、日本と全く異なるドイツでの生活は、ちょっとしたことが上手いかなかったり、あるいは発見があったりと、毎日が挑戦であり刺激的でとても貴重な経験となりました。現地でお世話になった方々や、留学の機会を頂けたことに感謝しています。



米山 昂佑

Kosuke YONEYAMA
ケルン工科大学へ
山家・上野研究室修士2年



これまでインドや上海でインターンしながら忙しく観光スポットを制覇していくような慌ただしいことをしていたこともありましたが、今回の長期間の留学では初めて海外で(課題の提出前を除き)穏やかな日々を過ごしていました。

自分は在籍していた大学から少し離れた寮の一室をスペイン人とシェアしていたため、ライン川と直交しケルンの街を東西に横断するトラムで大聖堂やドイツの街並みを眺めながら毎日通学していました。毎日同じルートを通るわけですが、シーズンごとに街が様相を変えていくのを見るのはなんだか楽しいし、休日は大きな公園で鴨を眺めたり、ライン川沿いでビール瓶を片手に談笑したりというのなかなか良い時間です。もちろん、パカンスに来ているわけではないので躓くことも時折あります。大学の授業ではグループワークが多いことも幸いし、同期とは早々に仲良くなることができましたが、他専攻学生との合同で大人数のグループワークになるとドイツ語でテンポのはやい会話になってしまうことがありました。英語で会話を誘導しようと努力はしますが、何気ない話が議題の導入になってしまう時などはやはり現地語の重要性を痛感します。プロジェクトの進め方にも違いがあり意見が食い違うため、互いに納得がいくまで議論するということがあります。

振り返って思うのは海外の大学院の授業をとることで得た知見・経験もたくさんありましたが、それと同時にマイノリティとしての生活や振る舞いを通して得られる気づきもとても重要で、様々な気づきを同時並行で得られる環境というのは留学だからこそぞったかなと思います。留学が中止になり企画していた夏の予定を一つもやれないまま帰国することになったことは残念でしたが、概ね良い留学でした。



「STOCKHOLM WORKSHOP CENTER」 Telmo Benito Del Valle



「Studies of japanese sketches after Kuniyoshi UTAGAWA」 Luca Reinhardt



「Studies of ramen and ramen shop SUEHIROYA」 Maria Goppel



「Hand drawings」 Maddi Viegas



建築デザイン研究室



石田 敏明 | Toshiaki ISHIDA
教授
[担当授業] 建築設計論、
建築デザインⅠ・Ⅱ 他
[部屋番号] 8-68A



田野 耕平 | Kohei TANO
助教
[担当授業] 設計製図Ⅰ、
建築デザインⅠ・Ⅱ 他
[部屋番号] 8-68A



AOハウス (2007)



廃品を利用したアートワークショップ

建築史研究室



内田 青蔵 | Seizo UCHIDA
教授
[担当授業] 日本近代建築史、
建築のデザイン 他
[部屋番号] 8-510



須崎 文代 | Fumiyo SUZAKI
助教
[担当授業] 設計製図Ⅰ・Ⅱ、
建築グラフィックス 他
[部屋番号] 8-510



日本近代建築史より、辰野金吾設計の日本銀行本館(左)とベルギー銀行(右)の比較



上海の街歩きの様子

都市デザイン研究室



曽我部 昌史 | Masashi SOGABE
教授
[担当授業] 都市デザイン論、
建築デザインⅡ・Ⅲ 他
[部屋番号] 8-61



吉岡 寛之 | Horoyuki YOSHIOKA
助教
[担当授業] 設計製図Ⅱ、
建築デザインⅠ・Ⅲ 他
[部屋番号] 8-61



赤松地区防災拠点 (徳島県/2017)



来島海峡サービスエリア飯店舗 (愛媛県/2018)

建築計画研究室



中井 邦夫 | Kunio NAKAI
教授
[担当授業] 建築計画A、
設計製図Ⅰ・Ⅱ 他
[部屋番号] 8-67A



台東区浅草文化観光センターコンペ入選案 (2009年)



富久町の家 (2013年)

都市計画研究室



山家 京子 | Kyoko YAMAGA
教授
[担当授業] 都市計画、
建築デザインⅠ 他
[部屋番号] 8-66A



上野 正也 | Masaya UENO
助教
[担当授業] 設計製図Ⅰ・Ⅱ 他
[部屋番号] 8-66A



十日市場駅駅圏におけるまちづくり：たからもの探しワークショップの様子 (2018年)



弘明寺商店街でのインスタレーション制作 (2018年)

神奈川大学工学部建築学科・大学院工学研究科建築学専攻 沿革

- 1928 米田吉盛が「横浜学院」創設(旧横浜市中区桜木町)
- 1929 専門学校令により「横浜専門学校」設立認可
- 1930 六角橋に移転、横浜キャンパス開設(5月15日 創立記念日)
- 1949 学制改革により「神奈川大学」設置
- 1952 神奈川大学整備拡張計画(設計:山口文象/RIA)
- 1965 神奈川大学工学部建築学科創設(初代学科長:谷口忠教授、定員80名)
8号館(建築学科研究室、製図室)竣工
- 1967 12号館(建築学科総合実験棟)竣工
- 1971 大学院工学研究科建築学専攻博士前期(修士)課程設置
- 1973 かなな会(建築学科同窓会)設立
- 1985 建築学科創設20周年 記念誌発刊
- 1990 大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程設置
- 1994 建築学科にシステムコースとデザインコースの2コース制導入
- 1998 横浜キャンパス再開発開始(2002年完了)
- 2005 RAKU(デザインコース年鑑)vol.1発刊
- 2006 建築学科に建築環境コース、建築構造コース、建築デザインコースの3コース制導入
第1回東アジア大学建築学術交流セミナー(以後毎年開催)
日本建築学会120周年記念大会を神奈川大学で開催
- 2008 神奈川大学創立80周年、「学校法人神奈川大学将来構想」公表
- 2015 建築学科創設50周年 記念誌発刊



8号館

建築学科・専攻関連の主な学術交流協定校 *派遣交換留学有り(U:全学、E:部局間))

- アジア:同済大学(中国、1982~)、武漢理工大学(中国、1982~)、成均館大学校(韓国、2002~)、
国立台湾科技大学(台湾、*E 2005~)、モンクット王工科大学トンブリー校(タイ、*E 2019~)
- 欧州:デンマーク王立芸術アカデミー建築大学(デンマーク、2010~)、国立モンペリエ高等建築大学(フランス、*E 2013~)、
バスク大学(スペイン、*U 2017~)、ルツェルン応用科学芸術大学工学・建築学部(スイス、*U 2017~)、
チェコ工科大学(チェコ、*U 2018~)、カールスルーエ応用科学大学(ドイツ、*U 2018~)、
ケルン工科大学(ドイツ、*U 2018~)
- その他:タスマニア大学(オーストラリア、*U 2011~)

RAKU バックナンバー



RAKU は、神奈川大学工学部建築学科建築デザインコースで 2005 年から発行しています。第 6 号以降は、毎号多彩なテーマの特集を組み、大学院生主体の取材と制作により、単なる学生作品紹介誌を超えた建築誌としても楽しめるように企画しています。第 15 号からは編集者の二階さちえ氏を起用し、第 12 号からご担当頂いているデザイナーの qp 氏とともに、さらにパワーアップしました。読んで眺めてお楽しみください。
(建築デザインコース主任 中井邦夫)

学生編集委員
制作代表/加藤佑規
制作副代表/徳山碩峰
特集班/竹本真(代表)、遠藤啓吾、古城偉央理、坂本理久、向咲重、横山優莉菜、(制作協力)三浦悠介、三浦亜也奈、岡田直樹
建築探訪班/鈴木杏奈(代表)、池原なつ子、三浦亜也奈、山本麻貴

[制作メンバー]
王欣漢、岡田直樹、解添禹、蔡格非、佐藤季也、籙内俊希、唐泓、三浦悠介、矢野新、李嘉文、飯田康二郎、掛川真乃子、齊藤健太、佐塚将太、下山美月、鈴木啓生、塚本裕士、永盛栞、白露、原巧、古本将大、前田沙希、梁訊、渡辺悠介

監修/中井邦夫、田野耕平、吉岡寛之、上野正也、須崎文代
特集ページ編集/二階さちえ
デザイン/qp

「RAKU Vol.16」 発行/神奈川大学工学部建築学科建築デザインコース
発行日/2020年8月31日 [横浜キャンパス] 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

